

---

# レディと呼ばせて

樹林

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

レディと呼ばせて

### 【著者名】

N4080C

### 【作者名】

樹林

### 【あらすじ】

親が経営している会社の存続のために、息子である卓巳がお嬢さまの元に世話係として任命された。さて、卓巳はお嬢さまの世話係として暮らしていくのか！ラブとコメディのお話です

## 登場人物（変更…7 / 21）

### メインキャラ

西沢 頂巳  
にしざわ たかみ

愛華の元に世話係の執事として雇われた（のかな?）不幸な少年。愛らしい顔つきが特徴で、自分の顔が女の子みたいなことから、あまり自分の顔を好んではいない。

小堂 愛華  
じゅうどう まなか

お嬢さま。ちょっと性格に問題はあるが、それでも割りと良い子だったりする。ちなみに卓巳の事を下僕と言い慕っている。

西森 カナメ  
にしみつ かなめ

愛華の邸のメイド長。ハーフだが、自称日本人で通している。まだ謎の多い人物。

天野 小鳥  
あまの ことり

愛華のクラスメイト。何かと愛華に突つかかってくる。

狩野 明海  
かのう あけみ

卓巳の元彼女。愛華から別れるように言われ、別れるのだが……

東郷 亜里沙  
とうごう ありさ

笑顔がとても似合ひ可愛い子。アバラ骨折と全身打撲した卓巳が入院した病院で出会つ。それ以外はまだまだ謎の少女。

## サブキャラ＆脇役

朝からティーを楽しむ生徒A・B・C『5パシリ』

ちょっとこり登場した名のない生徒A・B・Cプラスアルファの執事3人。他の生徒が登校しようが下校しようが常にティーを楽しむ生徒、もとい暇人。ちなみに話の内容は常に自慢話。これぞ私の生きる道、と言つていいかのように自慢を自慢で返し、やうには「凄い」とは口が裂けても言わない3人組。

本庄 梨乃 『7パシリ／12パシリ』

明海の友達。陽気な性格だが、時と場合によりかなり良い人に変身！ ちなみに珍しいジュースを飲むのが趣味だつたりする。けど今までにアタリといえるジュースに出会えたのは五本。出会える確立ひくつ！

高松 良助 『8パシリ／11パシリ』

以前卓巳が通っていた学校の友達。卓巳同様成績が悪く、下から数えて一番目のブービーだつたり。かといって卓巳と数点しか違わないため、実際は同レベルだつたりする。ちょっとがっかりな一面やら、ちょっとこれは……みたいな一面を数多く持つている残念な男の子。

ゴーヤ100%ジュース 『8パシリ』

梨乃が買ったジュースの一つ。原材料の欄を見ればあらビックリ、ゴーヤのみ！ 苦くて、後味悪くて、咳き込むジュース。ちなみに眠気を覚ましたい時はコーヒーの3倍は威力を發揮する。さらには缶に様々な俳句がプリントされている。ちなみにゴーヤの素晴らし

さを表した俳句のみだけ採用される。これぞ権力の力！

ドキドキ、ワクワク。『これ食べれば記憶力UP、バージョン2・

5！ 食堂の小母ちゃん一押し！！ 『9パシリ』

以前卓巳が通っていた食堂のメニューの一つ。食べたくない食べ物、見た目最悪の食べ物、トラウマになる食べ物の三冠王を見事達成した代物。ちなみにこれを食べれば頭脳は高まつても、それと同時に何かを失うこと間違いなし！ ちなみにこれまでの犠牲者は8人。

大男A・B 『13パシリ』

卓巳が入院している病室のドアの前に立っていた二人組み。なにかとハモる。もう気持ち悪いぐらいハモる。そのせいか双子と勘違いされたことも今までにしばしば。たぶんきっと今後一切登場しない人物ランキングどうどうの1位！

朝倉 空 『16パシリ』

小堂家でメイドとして働いている子。主な仕事は中庭をプチ庭園にすること。それ以外はメイドらしい仕事はさっぱりしていない。ちなみに趣味は花いけじり。特技は花言葉を直ぐに言えること。

## 1パシリ 私の世話係に任命します

突然ですが、感情に流されて一時的に大きな決断をする事はよくない事だと思います。もちろんその中には当たりもあり、当たりがあるならハズレもある。俺の場合では一面は超大当たりで、一面は超特大級の大ハズレなのです。

そう西沢卓巳は思っていた。

卓巳はカツコイイと言われるより可愛い、そう比喩された方がしつくりする顔立ちで髪の色素が薄いのか少し茶色をしたブラウンヘア。大きな眼が特徴で、それに合った長いまつ毛、そして太陽の光を浴びないのか白くスベスベした肌。全てが男性と言つよりかは女性と感じさせていた。

卓巳は高校一年生の男子生徒だつた。『だつた』と言つのは、つい十分ほど前に高校を中退させられてしまつたのだ。

そして卓巳は高校を無理やり辞めさせた張本人である小堂愛華を睨む。だが、卓巳が睨んだところで恐いというよりも、どちらかといえば可愛いと表現したほうが適切な訳で愛華は笑みを見せて卓巳を見ていた。

「それで庶民は晩ご飯なにが食べたい？　ああ、やつぱり庶民にはカップラーメンとか言つやつがお似合いね。それなら至急手配させましょう」

卓巳に聞いたはずなのに、愛華は一人で勝手に解釈して勝手に決めた。

そんな愛華に卓巳は何も言えず、ただただ広い部屋にある一つだけ場違いな汚い椅子に座つて愛華を見ていた。

広い部屋にはシャンデリアから綺麗に彫刻された机やタンス。全てがお金持ちと言わせているような部屋だ。もちろん愛華が卓巳に「庶民」と言つてゐるからして、この部屋は愛華の部屋だ。

そして卓巳は大きなため息と一緒に昨日の出来事を思い出した。

\*

\*

学生である卓巳は学校に行き、そして何もイベントにいなかったりイベントもないまま学校を終えて卓巳は一人で帰途についていた。

卓巳の家から学校まではたほど距離がなく、そのため歩いて登下校している。

ものの五分ほど歩いたところで卓巳は家が見える位置までつく。だが、卓巳の家の前には見知らぬ車が一台停まっていた。一般家庭が集まる住宅街では決して似合わないリムジンが、だ。

卓巳は不信に思ひながらも、家の中に入らない訳にもいかないため玄関のドアを開けて中に入る。

その時に不審を覚えて玄関のドアを開けなければ、違った未来だつたかもしれない。だが、ドアを開けた以上中に必需的に中に入る選択肢しかない。

「ただいま～」

そう言いながら玄関に置かれている靴を見る。玄関にあるのは父さんと母さんの靴、そして見知らぬ女性用の靴が一つ置かれていた。卓巳が靴を脱ぎ、自分の部屋に行こうとした時、突然居間に通じるドアが思いつきり開かれた。その突然さに卓巳はビクッと体を振るわせた。

居間から出てきたのは卓巳の父親である浩史だった。

浩史は何も卓巳に告げる事無く、腕を引いて居間まで連れて行く。

「ちょ、ちょっと何だよ！？」

卓巳の反抗する声もむなしく、やはり浩史は何も言わず居間に置かれているソファのところまで卓巳を連れてつた。

そこによつやく卓巳は向かいに座つてゐるお姉さんの存在に気づいた。

長い髪は自然に垂らされて、大きくアーモンドに似た目、整つた鼻、リップをついているのか綺麗な色をした唇、雪のように真っ白

な肌。その全てが卓巳の知るビの女性よりも美しい人が田の前にいた。

「貴方が卓巳くんかしら？」

「口と優しい笑みを見せて、その人は言った。

卓巳はその笑顔にドキッと胸が高鳴った。

「父さん、この人は？」

「いり！ 質問に答えんか！ すいません、卓巳はあまり行儀といつ言葉を知らないもので」

そう言って浩史はペロペロと頭を下げる。ここは流石営業マンと言えるのだろうか、綺麗な頭の下げ方だ。

「いえ、私は別に気にはしていませんよ」

「ありがとうございます。卓巳、この方は父さんの会社の取引相手である小堂財閥の一人娘の愛華さんだ」

そして愛華は小さく頭を下げる。卓巳も愛華に小さくお辞儀を返した。

「へへ、そつか

卓巳はそう言いながらもう一度頭を下げて、座っていたソファから立ち上がる。

「どうしたんだ？」

「いや、こんなところにいても場違いじゃない。だから部屋に行こうかと」

浩史はさつきまで愛華と話していた以上卓巳に部屋に帰られては都合が悪いため、卓巳の肩を掴んでソファに座りなおせせる。

「何だよ？」

「いいから座りなさい。今日からお前は愛華さんの世話をするのだからな」

卓巳はギョッと浩史を見る。

「い、今なんて言った？」

「だから、今日からお前は愛華さんの世話をするのだ。これは命令だから拒否できませんぞ」

「は？ ついに父さんは呆けてしまったか……いや、人間つて  
もういものだな」

卓巳は遠い目をしながら居間から見える庭を見る。

「父さんはまだ呆けてないぞ」

「百歩譲つて呆けてないのは認めよう。だが、どうして俺が世話な  
んてしなきやいけない？」

「父さんの会社が潰れてもいいのか？ お前を今まで誰が育てたと  
思っている？ これまでの恩を仇で返す気が？」

「」の時の浩史は慌てていて、なんとしても卓巳を愛華の世話係に  
させたいようだった。

「え？ なにか？ 父さんは会社の存続と俺を売り飛ばすのに会  
社を取ったのか？」

「人聞きの悪いことを言つた。頼むから父さん達を路頭に迷わせな  
いでくれ」

浩史は卓巳に頭を下げた。

そんな父の姿を卓巳は見たくはなかった。それが如何なる理由で  
あらうとも。

「……分かったよ。だから父さんも頭を上げてくれ」

卓巳は渋々答えた。

「た、卓巳。父さんは嬉しいぞ」

浩史は嬉しさのあまり卓巳に抱きついた。

もちろん年頃の卓巳にとって父親にこんな事をされるのは嫌なものだ。だから思いつきり腕を使って剥がれさせる。

「お話をお決まりになつたようなので、これからに卓巳くんのサイン  
を頂けるかしら？」

机に置かれているのは一枚の紙。そこには卓巳が愛華の世話係になるのを了解した証を残すために色々と書かれている紙だ。

卓巳はサラサラと『西沢 卓巳』と書く。

「これでいいのか？」

「ええ、これでいいですよ。それでは荷物などは必要ないので今す

ぐ私の邸に行きますが、異論はないですね？」

「……ああ」

\*

\*

そして今に至る。

さつきまでの愛華は猫を被つていて、愛華の邸に帰った途端に素の愛華に戻った。そんな愛華を卓巳は目を見開いて見ていたが、直にこれから的事を考えて落ち込んでいた。

「それで、愛華さんは俺をどうしたいわけ？」

まだ愛華と会つて差ほど時間は経つてはいない。だけど、卓巳は幾度となく同じ質問をした。それは返つてくる返事があいまいなせいである。

「あら？ 私の事は愛華様がご主人様つて言うようにさつき言わなかつたかしら？ 同じ部屋にいるだけでも罪深いことなのに、私の事を『さん』付けで呼ぶなんて問題外ですわ」

「……愛華様は俺をどうしたいわけ？」

「さつきから同じ質問ばかりね？ 貴方はその言葉しか知らないの？」

「愛華様があいまいな返事しかしてないから……」

「ですから、私の身の回りの世話を誰かにしてほしかつた。ただそれだけです。おわかりになりました？」

卓巳にとつて、こんな猫を被つた人がそれだけの理由だけではないようと思えて仕方がなかつた。だからこそ本心を聞きたかったのだ。

「……そうだつたな」

もう愛華から本心を聞き出すことを諦めた卓巳は、大きなため息をついて足元に視線を送つた。

「あら？ 何か悩みもあるの？」

「そうだな、強いて言うならば愛華様に悩みがありますね」

「どういふ意味ですか？」

ピクリと愛華の眉がつりあがる。

「いの際ですから言つけど、愛華様の猫を被つた性格をどうにかしてほしー。そうすれば俺は他にも何も言わないし、何も望まん」「ふふふ、貴方は今禁句を言いましたね？ 今すぐ私の前に膝をつき、謝罪の文と一緒に土下座しなさい」

フカフカで柔らかそうな椅子に座つてゐる愛華は立ち上がり、卓巳を見下すように冷たい目線で見下す。

「絶対に嫌だ！ 愛華様は可愛いのに、そんな猫かぶりの性格をどうにかしないと駄目だ！」

卓巳はこの時むきになり言つていたため、愛華の頬がほんのり赤く染まつた事に気づくことはなかつた。もちろん愛華も卓巳に色々と言つ。

そして卓巳はこれから的生活の事を不安に想いながらも、愛華とギヤー、ギヤーと騒いでいた。

## 2パシリ 何の解決にもならないやり取り

卓巳と愛華が騒ぎに騒ぎ一人とも疲れたのか、卓巳は部屋に場違いな汚い椅子に座り、愛華は無駄にゴージャスなフカフカそうな椅子に座っている。

「今回の事は水に流して差し上げますから、今後は今回の事がないようにしなさい」

愛華は少し息を切らしながら卓巳に告げる。

「ああ……それより飯はどうなった?」

卓巳は壁にかけてある時計を見ながら言つ。

時間は七時を過ぎ、卓巳のお腹からは「グ~」と、胃が食べ物を要求する音が出ていた。

「そうね、私もお腹がすいたから晩ご飯にしましょ~」

愛華はそう言つて、近くに置かれた鈴を鳴らす。

「愛華様、お呼びでしょ~うか?」

ガチャリと音がしたと思えば、メイド長である西森カナメが卓巳の隣に立っていた。

カナメは二十代前半で、落ち着いた大人の女性を感じさせる美しい女性だ。短くカットされた髪は漆黒の色だが、瞳の色は灰色をしている。本人曰くカラー・コンタクトと言つているが、実際はハーフということはメイドを含め、邸にいる人全てが知っている。

卓巳は突然カナメが隣に立っていたため、ギョッと驚いた風に力ナメを見る。

「食事の『ご用意はおすすめになつていますか?』

「はい、こちらにお運びしますか? それとも食堂の方まで足を運びますか?」

「そうね……、部屋まで運んでもいいついでに『かしこまりました』

カナメは一礼をして愛華に背を向ける。

「食事がおすみになりましたら、私の元まできてください」

そのほんの一瞬の間に、カナメは卓巳に告げた。

そしてスタスターと何事もなかつたように部屋から出て行つた。

「なあ、あの人何者？」

「カナメはメイド長よ。庶民とは比べ物にならないぐらい凄い人よ。まあ、カナメはあまり人と係わるのが苦手なのよ。人には向き不向きがあるから、何でもできるカナメの唯一の欠点なのよね」

ふう」と、ため息をついて愛華は言った。

（人と係わるのが苦手なのに、どうして始めて会う俺に話そうとしたんだ？……ま、まさか！　さつきのやり取りを聞いたか見て、ちょっと面かせやあ～見たいな不良に絡まれました。そんな展開に発展するのか！？　いやいやあ～、第一印象からそんな展開にはならんでしょう。……いや、このお譲の事もあるから第一印象で人を見るのは非常に危険だ。人を疑うことは良い事じゃないが、用心にこしたことはないからな）

卓巳がまだ良く知らないメイド長であるカナメを勝手に危険扱いにし、何か良い対策がないか考え込んだ。

そう言つても、そう簡単に案が出るはずもない。そういうつしる間にノックと共にカナメが晚ご飯を運んできた。

カナメは一礼をして部屋に置かれていた足つきの丸テーブルの上に料理を置いていく。さっきまで愛華は卓巳にカツチラーメンを食べさせるつもりだったが、言い争いですっかりカナメに言うのを忘れていた。そのため愛華は苦い顔で一人分ある料理を見つめた。

「ねえ、カナメ？」

「はい、どうかなされましたか？」

「明日からは庶民の食事はカツチラーメンでいいわ。私と同じのを食べていると思うと虫唾が走るのよ」

「かしこまりました」

「ちょ、ちょっと待て！」

卓巳は慌てて叫ぶ。さすがの卓巳でも三食カツチラーメンだと味

に飽きる以前に体に悪いし、なによりカツプラーーメンだと一週間後には食欲をなくしてやつれるのが目に見えていた。

「なによ？ 庶民の分際で私に意見でもしようと思つてているの？」

それなら残念、私の決定は絶対よ

「頼むから毎日カツプラーーメンは止めてくれ。絶対に死ぬから」

「そうね、それなら三日一回はカツプヤキソバにしてあげましょう」

「……なんの解決にもなってない」

卓巳は愛華に何を言つても通じることがないと悟り、ただポツリと呟いた。

「お嬢様？ それでは西沢様があまりにもお可哀想です。ですから三食を味噌、豚骨、塩と分けてみてはどうでしょう？」

カナメは表情を変えずに言つた。だけどカナメにとつてはナイスフォローと言わんばかりに、握りこぶしを作っていた。もちろん卓巳からすればありがた迷惑と思われているのは本人のカナメには気づくことはなかつた。

（あれ？ このメイド長天然なのか？ つてか、このメイド長は俺に三食同じ味で食わすつもりだったのか？ それこそ無謀だろ…）

…

言葉に出せない以上卓巳は心の中で大きなため息と共に、そんな事を思つていた。

「カナメは優しすぎよ。庶民を甘やかせば、きっと調子に乗るに決まっているわ。もつと厳しく当たらなくつてどうするの？」

（いや、全く甘やかしてないだろ…）。それどころか何も変わつてないようと思えるのは庶民だからか…）

まだ卓巳と愛華は会つて、差ほど時間は経つてはいない。だが、卓巳はここで反論すればきっと良からぬ方向へ行きそだと感じていた。だから心の中で呟く以外選択権はなかつた。

「……かしこまりました。それでは、西沢様には三食豚骨味で我慢していただきます」

チラリと卓巳の方を見ながらカナメは言つ。

「そうしてちょうどいい」

そしてカナメは一礼をして部屋から出て行った。

残された卓巳は愛華を見る。愛華は満足げな顔で、椅子に座り卓巳が同じように椅子に座るのを待っていた。やはりお嬢様だけあり、庶民と言っている卓巳を取り残して先に食事を取らず、最低限のマナーは持っていた。

卓巳は小汚い椅子から立ち、愛華が座っている同じ椅子に座りなおす。

テーブルの上に置かれた食事は庶民である卓巳には想像を絶するほど料理の数々が置かれていた。

イセエビを初めとするアワビやウニなどの海を代表するものから、三大珍味のトリュフやフォアグラなどの珍味を豪快に使われていた。もちろんそういうた類の食べ物をあまり食さない卓巳にとっては、どちら手をつけていいか悩みどころでもあった。

「あら？ 手が進んでいないようだけど口に合わなかつた？」

「あっ、いや、そういう訳じやない。ただ、こんな美味しそうなのを毎日食べている愛華様が凄いなと思つて」

「それは褒めているつもりかしら？」

「いや、そうじゃなくって……なんて言つのかな？ 愛華様が本当にお金持ちのお嬢様なんだなって、そう感じたんだよ。俺はお金持ちのお嬢様がどんな生活しているかなんて全然想像もつかない、だけどさ、庶民の俺とは住んでいる世界が違うんだなってこの短い時間の間に感じたんだよ」

「そうね、お金持ちの良さが庶民には分かり、庶民にはお金持ちの良さが分かるつてことよ」

卓巳はその時の愛華が、今まで見てきた表情より柔らかい笑顔をしていた事に気づいた。

「愛華様が感じる庶民の良さはなんですか？」

「自由で暖かな家庭が築けるところかしら。お金を持っていても良いことなんて高が知れているわ。それどころか悪い点の方がたくさん

んあるのよ？ 親の顔を立てるために成績は常にトップを維持しなければいけない、親の開いたパーティーには絶対出席しなければいけない、そして忙しい親と係わる時間なんて無に等しいわ

愛華は悲しそうな顔で卓巳に告げた。

そんな愛華を見ていた卓巳は何も言葉が出てこなかつた。

「さつ、ご飯が冷めないうちに頂きましょ」

卓巳が何も言えないまま、愛華は黙々と食べていた。

そして愛華は晩ご飯が食べ終えるまで一言も喋ることはなかつた。ただただ流れるのは氣まずい「匂」と、フォークと皿が当たる音だけだつた。

### 3パシリ メイド長とはメイドの一一番偉い人

堅苦しく、さらに重い空氣の食事に終止符を打ち、卓巳は何かをする訳でもなく草臥れた椅子に座つてじつと天上を見ている。

愛華は愛華で、食事が終わるや否や「お風呂に入つてくる」と、それだけを告げて部屋から出て行つたのだ。だから一人残された卓巳は主人の帰りを待つている犬のように、ただただ椅子に座るだけだった。それでも当の本人は愛華を主人と思ってないのが現状だつたりする。

「コンコン。そう、静かで無駄に広い部屋にそんなノック音が鳴り響く。決して弱くない音で、それでも決して大きくない音で、だ。これほど綺麗にノックができる技量の持ち主は、この邸でも一握りのメイドしかいない。

卓巳は重たい体を椅子から起こし、ドアを開ける。  
そこには完全無欠なのだけど、どこか普通の人とは外れたメイド長が立つていた。

カナメは何も言わずにスタッタと部屋に入り、何も言わずにさつきまで卓巳が座つていた椅子に腰を下ろした。

少し戸惑いを隠せない卓巳とは正反対に、カナメはきりつと凜々しい顔つきだった。あたかもそれが普通のように、あたかもそれが重要な事のように。

「えつと……、どうしたんですか？」

少しの間を空けて、恐る恐る卓巳は棒立ちのままカナメの方を向いて言う。

「食事が終わり次第私の元にくるように言つたではありますんか？  
ですが、一向にくる気配がなかつたので私の方からきました」

卓巳はカナメとの約束をすっぽかすような形になつていたが、それでもカナメの顔からは不機嫌そうな表情はない。そして卓巳は「あ～」と言い、すっかり忘れていたのだつた。

「それで俺に何の用なんですか？」

「そうですね、簡単に申し上げますとお嬢さまとは仲良くしていただきたのです。もちろん西沢さんがお嬢さまのお世話係になつた経緯は承知しております。ですが、できることならお嬢さまを怨まないで下さい」

すっと綺麗に椅子から立ち上がり、卓巳に振り向いて頭を下げた。卓巳は卓巳で、あまり人から感謝されるのが得意じゃなく、そんな力ナメを見ていたらむず痒く感じていた。

「別に怨んだりしませんよ。ただですね、もつ少しだけ性格をどうにかしてほしいですね。愛華はずつとあんな性格をしていたんですね？」

本人の前じゃいため、卓巳は愛華の事を呼び捨てで呼んでいた。もちろん本人の前では何を言われるか分かったものじゃないから、愛華がいない今限定なのだけれど。

「いえ、お嬢さまが小さい頃はもう可愛らしい性格をしていましたそれは卓巳にとつて興味深い事実だった。

「どんな性格だったんですか？」

「そうですね、奥様は忙しい身でしたので、代わりに私の後を子猫みたいにくつづいてきました。もちろんそれだけではなく、一生懸命に私の手伝いもしてくれましたね。その姿が愛らしく、時々ギュッとしたい衝動に陥つたほどです」

どこか懐かしそうに力ナメは言つ。

卓巳は力ナメの言つた事が信じられず、不思議そうな顔をして力ナメを見ていた。それは言つまでもなく、今の愛華からは想像も出来ない事実だつたからだ。

「……それは本当に愛華なのか？」

「ええもちろんです。今のお嬢さまも以前と変わりなく愛らしい性格をしていると思いますが、西沢さんはお嬢さまの何処が不満なのですか？」

「強いて言つなら自分自身が特別な人のように感じているところです」

すね。逆に聞きますが、カナメさんは愛華の何処が愛らしい性格だ  
と思うんですか？」

卓巳にとつて自分の事を「さま」や「ご主人さま」と呼ぶように  
言つのは少々苦手な部類に入る性格だった。どちらかと言えば、卓  
巳にとつて異性に求める性格は大人しい子なので、顔が良くても騒  
がしい愛華は今のところ恋愛対象に入ることはまずない。

「それは愚問です。西沢さんには辛く当たつていますが、お嬢さま  
は根から優しいお方です。その事を気づかない西沢さんに非がある  
と言つものです」

（いやいや、気づくはずがないから。そもそも今日始めて会つた人  
の根なんて分かるはずがない）

卓巳はそんな事を思つていた。だけど卓巳の思つた事も一理ある。  
いや、一理どころじゃない。完全に卓巳の思つ通りだ。

どれほど優秀で、どれほど鋭い人でも会つて数時間で心の内側を  
分かることなんていないだろう。もしいたとするならば、それはそれ  
で確証の無い確信と言つものだ。

「……そうですか。俺にはまだ愛華の良い面が分かりません。ですが、  
カナメさんがそこまで愛華を信頼しているのなら俺も少なから  
ず愛華の良い面を探してみます」

どれだけの時間が掛かるか分からなければ、そう付け足すよう  
に心中で呟く。

「そうしていただけと嬉しいです。それではそろそろお嬢さまが  
お戻りになると思いますので、私は仕事に戻ります」

そしてスタスタとドアの方に歩いていく。それから何事も無かつ  
たかのように部屋から出て行くカナメの後ろ姿を見て卓巳は手を伸  
ばした。

「どうかなされましたか？」

ギュッと腕を握っている卓巳を見つめながら言つ。それでも顔の  
表情は変わることはなかった。

「……いえ、なんでもないです。仕事頑張ってください」

卓巳は特にカナメに言いたい事があつた訳ではない。なんとなく卓巳にはカナメが寂しそうに思え、そう思つたら自然に体が動いたのだ。

そんな事を言えるはずもなく、卓巳は誤魔化すようにそう言つ。「西沢さんもお嬢さまのお世話を頑張つてください」

カナメはするりと力の入つていない卓巳の手を気にせずに、それだけを言つて部屋から出つた。取り残された卓巳は少しの間呆然と立ちすくんでいた。

カナメの言つた通り直に愛華が部屋に戻ってきた。

部屋に戻るなり、不機嫌ですと言つているかのような顔で愛華は卓巳を睨んだ。もちろん理由が分からぬ卓巳にどうしては不思議でたまらないのは言つまでも無い。

「どうしてお前はそんなに不機嫌そうに俺を睨む？」

卓巳の質問に愛華は無言でさつき以上に睨みつけた。やはり理由もなく愛華が怒るとは思えず、プレッシャーを感じながらも卓巳は考えた。

それでも理由が思い浮かばず、首を傾げて愛華を見る。

「……お前と言つたのはあえて伏せときます。ですが、庶民の分際で私を呼び捨てで呼ぶとは何事ですか？」

ようやく愛華が口を開いたと思えば、そんな事を言い出した。だけど卓巳は愛華の前で呼び捨てにして呼んだ記憶が全くなかつた。それどころかいつたい何を言つて居るのか卓巳には理解できなかつた。

が、少しだけ考へると一つの事が頭によぎつた。

愛華はカナメとのやり取りを盗聴していたのだろうか、と。

「……愛華さまは俺とカナメさんの話を盗聴でもしていたのか？」

「さあ、どうでしょう？ ですが、庶民の分際でご主人さまを呼び捨てで呼ぶなんて言語道断です！ それどころか私の事を侮辱するような事を言うなんて問題外ですわ！」

どんな手段を使って話を聞いていたのかは分からぬが、卓巳はそんな愛華を見て大きくため息をついた。

(さつき力ナメさんに言つた事は前言撤回だな。こいつに良い面なんて見つかりつこない)

そんな事を人知れず思つていた。もちろんそんな事を本人である愛華に言えば、今後の生活が堅苦しく、それでもつて辛いことになると悟り何も言わずに卓巳は愛華の怒りを見つめていた。

ちなみに愛華の機嫌が直つたのは小一時間ほどしてからだつた。そして卓巳が風呂に入り、部屋に戻つて来た頃には愛華は眠りについていて、何処で眠ればいいのか分からぬ卓巳は部屋の端で丸まつて寝ていた。

卓巳はもう学校とは一生縁の無い居場所だと思つていた。いや、もう学校という単語が出てくるとは思つてもいなかつた。それでも卓巳は学校の前に立つてゐる。別に女子高校生が目当てで立つてゐるのではない。口をだらしなく開けて、呆然と視線を上に向けて立つてゐるだけだ。その姿を例えるならば、都会を始めてみた田舎の人。そう例えるのが一番しつくりするのかも知れない。が、卓巳にとつて都會とは別に珍しいものではない。なぜなら生まれも育ちも都會だからだ。ならどうして、そんな田舎人と例えるよつな姿をしているのだろうか？ その答えは簡単だつた。

都會全てを珍しく見るのではなく、都會のほんの一部で、なおかつ今までに見たことの無い学校を珍しく見ていたからだ。

時は変わり、今朝の事である。

卓巳が愛華の世話係、いや、執事とでも言つといひへ。そんな職に就くことになつた初めての朝。

(あれ？ こゝは……どこだ？)

寝ぼけながら卓巳はそんな事を思つて目を覚ました。床で寝ていたため、卓巳の体はすっかり固くなり、目覚めの良い朝とは相当かけ離れていた。

少し考えたところで、ようやく卓巳は今の状況と、自分の置かれている立場を認識する。立場からすれば、この邸にいるどの人より下の立場である。

ゆつくつと立ち上がり卓巳は思いつきり伸びをする。

小さく「よしつ」と呟き、ベッドでいまだ寝てゐる愛華を見る。

愛華はまだ夢の中の住人で、小さく細い寝息が聞こえる。そんな愛華を見ていた卓巳は呆然と立ち、人の気持ちも知らないで気楽な

ものだと感じていた。

別に卓巳の気持ちは思つてはいるより気楽なもので、正直などこりどつでもよかつたりする。そんな事はともあれ、今日は平日で時計の針は既に七時に差しかかろうとしていた。

卓巳にとって七時に起きるのは普通で、学校を辞めさせられた今になつてはもつとゆづくり起きればいいのだが、体は七時に起きるよつてインプットをされている。長い事同じ時間に起きていた事から七時に起きるのは必然なのだろう。

それはさて置き、男である卓巳にとって朝は別に忙しいものではない。顔を洗い、朝食を取る。それだけの行動しか知らない。だが、女性は男性とは色々な面から違う。薄く化粧をしたり、シャワーを浴びたりと人によつては異なるが、それでも女性の朝は戦場のように忙しいものだと卓巳は思つている。

卓巳はゆづくつと愛華に近づき、そつとベッドで寝てゐる愛華の肩に手を伸ばす。

が、その行動は直に阻止された。

卓巳の腕を掴み、その力強さから押すことも引くことも拒まってしまった。ビックリしながらも卓巳は誰だと思いながら腕が伸びているほうを見る。

完全無欠、ポーカーフェイス、メイドの中のメイド、  
西森カナメ、

が、立つていた。

卓巳から見てカナメの腕は決して太いとは思えない、むしろ街中を歩いている少女の用に細い腕をしていた。そんなカナメがここまで力強いとは思つてなかつた卓巳は少し驚く。

「お、おはようございます」

このシコチューニングが取り敢えず苦じて思えた卓巳は朝の挨拶をする。

「おはようございます。それで、西沢さんはお嬢さまに何をしようと思つてこるのでしょうか？　返事次第では容赦しませんよ？」

顔の表情は変わつてないものの、背中の方からびす黒いオーラのよつなものを卓巳は感じ取つた。

「普通に起こしあうと思つただけですよ、はい。ほら、今日は平日で学校がある日でしょ？ それなら起こしてあげないと朝ごはんを食べる時間がないと思つて……」

「そりですか、てつきり発情期の犬の如くお嬢さまに襲い掛かるのかと思つていました」

仮に卓巳がそうしようと思つていたところど、そんな事をカナメに言えるはずがない。もし言つてしまつたら窓から投げられて、メイド達に冥土に送られるところだつただろ？

「それよりいつの間に部屋に入つてきたのですか？ セツキまでは俺以外誰もいなかつたと思うのですが……」

「それにつきましてはそこからです」

天上を指差すカナメ。

カナメの真上、天上には人が通れそうな穴がある。いや、穴と言うより人工的に開けられた通り道とでも言つておこり。(メイドと言うより、ここまでくると忍者だな)

天上に開けられている通り道を見たとたんにそつ頭によぎる。

「……そり、ですか。それはそつと、愛華様を起こさなくともいいのですか？」

「ああ、そりでしたね。そりや起きてもらわないと学校に遅刻してしまいます」

カナメはそり言つて、卓巳から手を離して体全体を愛華に向ける。

「お嬢さま、そろそろ起床の時間です」

無理やり起こすわけではなく、綺麗な声が部屋を響き渡る。それでも決して大きな声ではない、むしろこれだけのボリュームで本当に起きたのかと思つぐらい起こすには小さな声だつた。

愛華は「うへん」と唸り声を上げ、ゆつくりと目を開ける。

卓巳はそんな愛華を見ながら、少なからず「あと五分だけ」みたいな事を言つてくれることを期待していた。だけどさすがお嬢さま

と語ったところだらう。優雅にベッドから体を起した。

「おはようカナメ、下僕」

「おはよひざわこめすお嬢さま」

「……」

卓巳は素直に朝の挨拶をできなかつた。いや、できるはずも無い。なぜか「下僕」に格下げされているからだ。このままだといずれは「犬」にまで落ちそうだと卓巳は悟つた。

「あら、主がおはようと言つてこるのに下僕の貴方が挨拶を返さうとはしないのですか?」

不機嫌そうに愛華が言つた。

「……おはよひざわいます、愛華様」

渋々卓巳は言つた。

「うん、おはよひ。それより朝食の準備は整つていますか?」

「はい。朝食はこじらひにお持ちすればよろしくでしようが?」

「そうね……、そうしてちょうどいい」

カナメは一礼をして消えた。消えたところはドアから出て行くのではなく、天井に開いている通り道にジャンプで戻つていったからだ。

「そういふ下僕には昨日言わなかつたけど、今日から貴方も私が通つている学校についてきなさい」

「えつ、それって転校つて事か?」

「違うわ。強いて言つならば私の身の回りの世話をするため、そういうところに通つてもらいたいから」

卓巳にとつての学校は勉強を留つといひで、決して身の回りの世話をするために学校に行くのではない。だからお嬢さまが通う学校が次元の違うところだと感心しつつ、少しだけメンドクサイ学校だと思った。

「それだと愛華様が授業中はどつしていればいい?」

「それについて私の隣で控えていればいいのよ」

「そしたら他の生徒に迷惑かけないか?」

「誰も立つていろとは言つてないでしよう? 私が座つている席の隣に座つていればいいのよ。私も鬼じゃないわ。ずっと立てなんて言わないわよ」

卓巳は愛華の優しさに少しだけ感動した。

時は戻り、現在である。

高級車で学校まできて、自慢そうな顔で呆然と立つている卓巳を愛華はニヤニヤと見つめている。

「さあ、授業が始まりますので行きますよ。ちなみにこの学校は女子生徒しかいないので、粗相のな」ようにしてくださいね」

「……ああ」

そして二人並んで未知の学校に卓巳は足を踏み入れる。

ちなみに卓巳の服装はカジュアルではなく、スーツだった。執事なのにどうしてスーツなのか、それは卓巳も感じていた。だけど学校の方針だから仕方のない事だったのだ。

## 5パシリ 普通でない学校

学校とは何をしに行くものなのだろうか？

勉強？ 恋愛？ 将来の通り道？ なんだろうと大いに結構。だが、愛華が通っている私立白怜女子高等学校の生徒は、ほんぽん的に普通の学生とは何かが違った。

卓巳にとっての学校とは百歩譲つて勉強を学ぶものだと思っていた。が、私立白怜女子高等学校の生徒は暇つぶしに学校にきているのだ。財あるものは暇をもてあますと言つが、これほどしつくりくる光景を見た卓巳は初めてだった。

無駄に広い敷地のあちこちにお茶を楽しむ場所が設けられている。それだけならまだしも、その場所を利用して生徒が目に入った。オープンカフェのような場所に数人の生徒が談話を楽しみ、その後ろには執事と思わせる人が数人待機している。時々執事がお茶を入れている姿は、本場の執事と勘違いさせるほど全てにおいてマッチしていた。

「なあ、いつも朝っぱらからこんなことしているのか？」

談話を楽しんでいる生徒を遠めで見つめながら卓巳は言つ。

「そうね、朝だからこんなものだけど昼時になるともうと凄いわよ」「ふうん、まつ、別に俺には関係のない事だけどな」

大きな欠伸をしながら卓巳は言つ。

「そうでもないわよ？ 卓巳さんも執事の端くれなら、そういうた機会もあります。邸に帰つたら早速力ナメにでも聞いておくと良いでしょ？」

卓巳は欠伸以上にあんぐりとだらしなく口を開いて愛華を見た。

別に卓巳自信が執事の仕事をするのに驚いているのではない、愛華が言つた「卓巳さん」という発言が卓巳を驚かせていたのだ。

「……あっれ？ 僕の耳も寿命かな？」

トントンと卓巳は耳を叩く。

「何をしていいの？」

卓巳の仕草が理解できない愛華は少し首を傾げ卓巳を凝視した。

「さつきの言葉もう一回言つてくれないか？」

「ですから、卓巳さんも執事の端くれなら、そういうた機会もあります。邸に帰つたら早速力ナメにでも聞いておくと良いでしょう。そう言ったのです」

「くわつぱあ～！」

卓巳は驚きと不意打ちに奇妙な奇声を発した。そんな卓巳に奇声に何事かと愛華は大きな目をパチパチとして卓巳を不思議そうな顔で覗き込んだ。

「い、いつたいどうしたのよ？」

「ごめん。ついつい現実に背を向けてしまった。まさか愛華様が俺の事を卓巳さんなんて言つから一瞬我を忘れてしまった。いやあ～、ようやく名前で呼んでくれて俺は嬉しいよ」

感動のあまり薄つすらと涙を溜めて愛華の肩に手を乗せて卓巳は言つた。

愛華は今まで卓巳の事を「庶民」か「下僕」としか呼んでいない。そのせいか卓巳は愛華に呼ばれることを少しだけ拒んでいた。誰だつて自分の事を「庶民」「やら」「下僕」なんて呼ばれたくないし、なにより腹が立つ。

「……は？ なに言つていいの？ そんなの学校だけに決まっているじゃない。家に帰つたらまた普通どおり呼ぶわ」

「と、いいますと、愛華様は学校では優等生を演じると…」

「そうなるわね。お嬢さまっていうのは何かとお喋りの面があるからね、素の私なんて見たらあつといつ間に広まつてしまーます」

「そ、そうですか……」

愛華が猫をかぶつている事については卓巳も知つてこる。が、ここまであからさまに世間の事を気にする計算高い愛華を卓巳は少しだけ羨ましくもあり、そして面倒にも思えた。

卓巳はあまり計算して今後の事を考へる事はない。それはどうさ

に何歩先の考えが出来ないからである。そのためか、今までに将棋やチヨスなどのボードゲームで勝つた覚えがなかつた。それほど計算というものが生活からかけ離れた場所にあつた。だからこそ愛華を羨ましく思えて仕方なかつたのだ。

無駄に長く、それでもつて無駄なところにお金を掛けている校門から校舎まで続く道のりをのんびりと歩いた。時々始めてみるオブジエラッシーものやら、形や時代が違う校舎があり、その都度卓巳は色々な表情を見せた。

長い、長い、道を何分も歩き、ようやく校舎に着いた頃には卓巳は肩で息をしていた。卓巳はそれほど体力がなく、小学校の頃にあつたマラソン大会も良い成績は今までにない。それでも運動神経は悪いほうじゃない、だが、それでも最初だけで最後の方はばててしまうのだ。

「だらしないわね。今日から体力をつけなさい」

「無理。自慢じゃないが、俺は体力だけはないのが取り柄だからな」「そんなの自慢にもならないわ。全く……」

愛華は呆れたように肩をすくめた。

「まあ、いいわ。それより早く教室に行きましょうっ。遅刻だけはしたくないの」

そしてスタスタと愛華は校舎の中に入つて行つた。その後を追うように卓巳も校舎の中に入る。

校舎は外見よりもっと凄かつた。それは卓巳が校舎に入つて初めて思った事だつた。

廊下なのに天上にはシャンデリア、壁には色々な絵画や壺、そして壁にも彫刻が彫られていて何処を見ても卓巳にとつては凄いことだつた。

「うわあ～」

卓巳は自然に声が漏れた。

「そんなに驚く事でもないでしょ？ このぐらいなら私の家の方が

よっぽど凄いわよ？

「いや、学校がここまで凄いなんて予想外だったから、つい」

「そうなの。まつ、これから慣れればいいわ」

「ああ、そうするよ」

それから教室に向かうのに廊下を歩いていると、愛華はすれ違う生徒から挨拶されていた。しかもすれ違う全ての生徒が、だ。愛華が人気者なんか、それとも学校の常識なのかは定かではないが、それでも卓巳にとつては凄い光景だつた。しかも卓巳はどこか興味深く見られたのだ。

ようやく教室につき、何事もないように愛華は先に教室の中に入つていく。

卓巳はどうにも始めての学校で、しかも転校生扱いされないため何処か居心地が悪く思えて教室の前で立ち止まる。

「何しているの？ 早く教室に入りなさい」

「いや、そう言われても……」

「何を考えているなんて分からないわ。だけどね、入らなかつたら不審者で警備員に連れていかれるわよ？ それでもいいなら好きなようにしなさい」

「それは勘弁だ」

卓巳は大きく深呼吸をしてから愛華に続いて教室に入る。

教室はざわついていたものの、知らない顔である卓巳の存在で教室中が静まり返つた。卓巳を遠めで見るものもいれば、ヒソヒソと卓巳について話し合っている生徒がいた。もちろん卓巳はそんな事に慣れている訳が無く、余計にいづらく思えて仕方が無かつた。

愛華は笑顔で教室の生徒に挨拶をして自分の机に座る。

机は一人が使えるタイプで、卓巳もまた愛華の隣に座る。手に持つていた愛華のバックを机の端にあるフックにかけ、何処を見るわけでもなく真っ直ぐ視線を送つた。

そんな中、卓巳と愛華に忍び寄る一つの陰。ではなく、堂々と愛華の前に立つ一人の少女がいた。

愛華同様に美しい顔立ちだったが、彼女の顔で全て台無しにしていた。

「あり？ 天野さんではありますんか？ そんなに怖い顔をしていますとシワが増えますよ？」

彼女の名前は天野小鳥。長い髪を後頭部で結び、いわゆるポーテイルにして、白い肌と高い鼻、そして大きな瞳が彼女の美をより引きだしている。

「あ～ら、腹黒女に言われたくないわ。それより隣の貴方？ 中々可愛らしい顔をしているのね？ こんな腹黒女のところより私の執事にならない？」

「……ちょっと考えさせて下さい」

卓巳にとつてそれは興味がそそる話しだった。愛華が嫌と言えば、嫌だが、それでもカナメとの約束もある。それに一応父親の事もあり、卓巳は即答で答えを出すことはできなかつた。

「その間と返事はなに！？ 卓巳さんは私の執事です！ 勝手に人の執事を誘惑するのはよしてください！」

「それは違いますよ？ 卓巳は小堂さんの持ち物ではありません。ですから卓巳が私の執事になりたいのなら引き止めるのは変ですか？」

「そ、それはそうですけど……それでもダメです！」

卓巳はどうして自分を引き止めるのか謎だつた。特に人に威張れる特技もなにもない、普通の庶民なのに今の愛華は必死に卓巳を渡そうとはしない。その姿がどうにも理解できなかつた。

それから授業が始まるまで愛華と小鳥のやり取りが終わる事はなかつた。そして卓巳は小鳥に返した返事がどうにも誤ったものだと気づく。それは邸に帰つたらどんなお仕置きが待つているか分からなかつた。

## 5パシリ 普通でない学校（後書き）

一気に修正しました。

修正といっても本編は変わらず、一話ずつずらして登場人物の欄を設けました。

10月は忙しい用なので、9月中にあと2回ぐらい更新したいと思っています。それでは次回も楽しみにしていただけたら嬉しいです

## 6パシリ 彼氏彼女の関係

私立白怜女子高等学校の授業内容については一般的の学校と同じレベルで、執事として入学なのか付き添いなのか定かではない卓巳でも理解出来る授業だった。それに付け加え、一応卓巳が通っていた学校は進学学校だ。そのため全て習い終えている範囲だった。

以前習った授業と同じ範囲をもう一度聞くのは退屈なものだと、卓巳は睡魔と闘いながら思った。それでも習つてない授業なら眠くは無いのかと聞かれれば、きっと卓巳は「眠い」と答えるだろう。卓巳は進学学校に行つていたけど、学校の中ではおちこぼれと言われていた。担任からもクラスメイトからも、さらには現在進行形で付き合つている彼女からも言っていた。それでも卓巳は勉強が嫌いな訳ではない。ただ人より少し不器用なだけだった。それは勉強だけではなく、恋愛も日頃の行動も、全てにおいて不器用なのだ。

いつそうのこと寝てしまおうと卓巳は思つたが、チラリと隣の愛華を見れば真剣に授業を聞いていた。だから卓巳は寝るのを少しだけ迷つてしまつた。ここで寝てしまえば愛華にも迷惑がかかるし、なにより小堂家に迷惑がかかると感じたからだ。主人が授業を聞いているのに、それを差し置いて寝る執事。それは執事とはいえない行為だ。本当の執事ならどんなに眠くても、どんなにイライラしていても、どんなに腹が立つても表情に出さず、主人に仕えるものだ。だからこそ卓巳は寝ることを戸惑つてしまつたのだ。

「他のやつらはほとんど寝ているのに、愛華様は寝ないのか？」

先生には聞こえないほど小さな声で愛華に言つ。

卓巳の言つたとおり、現在授業を聞いている生徒の数は酷いものだ。寝ている生徒が八割で、眞面目に授業を聞いているのが一割、そして残りの一割の生徒は漫画を読んだり携帯電話をいじつたりしている。世の中にはボイコットという言葉がある。まさに今、そのボイコットが授業と言う名の学問を学ぶ時間に反発するかの如く成

り立つて いる。

「何を言つて いるのか私には理解できないわ。授業とは学問や 技芸を学ぶ場ですよ？ それなのに寝て どうするのです。皆は 皆、私は 私です」

「眞面目なんだな。どうせ予習とかして授業なんて聞かなくて 分かるんだろ？」

昨日の夜に愛華は卓巳に「親の顔を立てるために成績は常にトッ プを維持しなければ いけない」 そう言つた。その言葉をしつかりと 覚えていた卓巳は小さなため息をつきながら言つ。

卓巳がため息をついたのには理由があつた。一つ目は腹黒で猫か ぶりの愛華が学校では一変して優等生を演じて いること。二つ目は 「冗談も通じないキャリアウーマンのよつな事を言つて いるからだ。卓巳にとつてそういう部類の人は苦手だつた。できるなら冗談が 通じ、そして固いことを言わない人が卓巳の理想なのだ。そうなれば今 の彼女はどうなのか、そう聞かれれば苦虫でも口に入つたかの ような表情をするだろ？ 卓巳の彼女もまた、愛華のような性格を している。それでも卓巳は彼女の一途な思いと、何事にも一生懸命 な姿が好きだつた。それ以外にも彼女を慕うところは沢山ある。そ れでも卓巳にとつてそれが一番の理由だつた。

「当たり前じやない。今のところは半年前に予習したわ。けどね、 予習だけじゃダメなの。授業を通して復習するのよ」

「 そ う か …… 」

卓巳は そう言いながら愛華から窓の景色に視線を移した。

今日の天気は実に良い天気だ。開いた窓から心地よい風が流れ、 どこまでも続く青く澄み渡つた広い空、そして他から隔離されてい るかのような静かな教室。

(俺が学校を辞めようが学校は何も変わつてないだろ？)

卓巳は目を細め、そんな事を思つていた。だがそれも事実。卓巳 が学校を辞めたのは昨日のことと、卓巳が通つていた学校のクラス メイトは卓巳が学校を辞めた事なんて知らないだろ？ 仮に知つて

いても「辞めるのは時間の問題だつたけどな」と、納得するクラスメイトもいただろう。

「憂鬱そうな顔をしているけど、どうかしたの？」

「ちょっと前の学校の事を考えていた……なあ、この学校に公衆電話とかあるか？」

「そんな時代遅れで、無駄な電話なんて無いわ。そんなの当の昔に撤去されたと思っていたけど、街中にはまだあるの？」

愛華は首を傾げ、怪訝な顔で卓巳を見た。「時代遅れ」や「無駄な電話」と言っているが、愛華は今までに公衆電話を実際に見たことはない。見たとしてもテレビ番組ぐらいだった。それどころか生まれも育ちもお嬢さまの愛華は電話を使う機会は無一等しかった。大抵のことはメイドから聞かされ、携帯電話を持つているものの電話帳には家の番号とカナメの番号しか登録していない。別に友達がないわけではない、クラスメイトを含め学校の生徒は愛華を憧れの存在として見てている。そのためメールアドレスや番号を聞くのは暗黙のルールとされている。そのため誰も愛華のアドレスや番号を知らないのだ。

「酷い言いようだな。公衆電話を愛する人が聞いたら殴られても文句は言えないぞ？」

「あら？ そんな人がいるなら見てみたいものだわ。それより私の携帯を貸しましょうか？」

「助かる。悪いが授業が終わったら貸してくれ」

「ええ、それで誰に電話をかけるつもり？ お父さまかしら？ けど、卓巳さんのお父さまは大丈夫よ。私は約束を守る主義ですから今頃休憩を削って仕事に励んでいくと思うわ」

「いや、父さんには電話はかけない。彼女と少しだけ話したいだけだ」

卓巳がそう言つた途端、愛華の眉間にシワがよつた。

愛華は卓巳が異性の子と付き合っているのは知っていた。卓巳を世話係として迎えようとした時に、カナメに頼んで色々と調べさせ

ていたのだ。カナメは卓巳の誕生日や血液型は当たり前、趣味や一日の行動まで調べていた。そうなれば卓巳に彼女がいるのも直に分かつていた。

「……そう、なの。悪いことは言わないわ。今日限りで彼女とは別れなさい」

愛華は眉をしかめ、あからさまにそっぽを向く。もちろん卓巳は愛華にそんな事を言われる筋合いがないため、怪訝そうな顔で愛華を見つめた。

「ちょっと待て、愛華さまには関係ないだろ？」

それでも卓巳は薄々気づいていた。そもそも潮時なのだと。

卓巳達は付き合い始めた頃は楽しくやつていて、毎日のよつに連絡を取り合っていた。だが、それは月日が経つごとに変わり、しまいには相手の関心も次第に薄れていった。本当にこんな結末でいいのか、そう何度も卓巳は思つた。それでも行動に出すことは一度もなかつた。それは心のどこかで「もう、どうでもいい」と思う気持ちが芽生えていたのかもしれない。

「卓巳さんの小さな脳で考えてください。仮にここで別れなかつた時の事を想定で話します。卓巳さんは私の世話係であり執事でもあります。そこから常に私の身近にいることになります。そうなれば必然的に卓巳さんは彼女と会うことができません。一番辛いのは誰ですか？ 卓巳さんではなく彼女でしょう？ それなら辛い思いをさせる前に別れるのが一番です」

卓巳の気持ちを知らない愛華はそうとしか言えなかつた。愛華は卓巳たちの関係が良好だと思い、そう言つたが、実際は良好とは遠いところにあつた。だが、それもまた卓巳が思つてゐる事であり、卓巳の彼女はどう思つてゐるのかは分からぬ。実はシンデレラに憧れて卓巳にシンシンしてゐるのかもしれない、もしかしたら忙しいあまり卓巳と係わる時間が以前より無くなつたのかもしれない。だからこそ全ては卓巳の脳内で繰り広げられた想像なのだ。

愛華の言つたことはあながちあたつてゐる。だけど一つだけ否定

する点がある。それは卓巳たちの関係が良好なら、別れを切り出すことが一番辛いことなのだ。相手を本当に好んでいるのにも係わらず、その行為が見事に裏切られてしまった。それこそが一番の辛さである。

「……」

卓巳は何も言えなかつた。

もう会えないのならいつそうのこと別れよつかと思つたからだ。が、実際は卓巳が思つてゐるほど愛華は酷い人間ではない。愛華の側にいるのは変わらない。それでも休みが無いわけではないのだ。「私の携帯を貸してあげます。彼女と別れるか別れないのかは、卓巳さん次第です。それでも一つだけ言つておきます。もし卓巳さんの彼女が私なら、少しでも早く別れたいと思います」

机の上を滑らせ、愛華は携帯電話を卓巳の前に置く。その時の愛華の表情は何かを成し遂げた誇らしい顔をしていた。

卓巳は携帯電話を手に取り、

「一つだけ聞いていいか?」

「答えられる範囲なら何でも聞いてください」

「感情に流された恋人の結末はどうなると思つ?」

「そんなの決まっているわ。バットエンドの道しかないわよ

「……そうか」

「だけどね、誰かを愛することは素晴らしいことだわ。それがハッピーエンドだらうとバットエンドだらうと一緒に。よつは誰かを愛し、愛されることが一番大切なよ。そしてほどほどに愛する。それが恋愛を長続きさせるのに必要なことよ。一生懸命に愛せば、それだけの代償がどこかで見えてくるものなのよ。相手を慕う気持ちがあるなら、相手にとつて一番の幸せを考えなさい。それが男つてものでしょ?」

愛華はそう言つたが、どこか苦い顔をしていた。それは卓巳の幸せを考えてないからである。

「そんなものなのかな?」

「そんなものよ。それじゃあ、私からも一つだけ質問をせてもいいわ。卓巳さんだけだとズルイでしょ？」

「勝手にしろ」

「ええ、勝手にします。卓巳さんの夢はなんですか？ 別に子供の頃に抱いた夢でも、今現在の夢でもいいです」

「夢ねえ～、強いて言つなら誰かを本気で愛したかった。それが彼女ができる前に抱いた夢だ」

卓巳は懐かしそうに手を細めた。かなりキザな夢であつたが、それでも本当に卓巳があつてほしいと願う夢だった。

「その夢は実現できましたか？」

「ああ」

「それなら夢を叶えた責任をもちなさい」

「自分自身に、か？」

「夢を叶える前の自分に、です」

愛華はそれ以降口を開こうとはしなかつた。卓巳もまた愛華と同様に何も言わずに、ただ彼女に何を言つたか考えていた。

卓巳は愛華の携帯電話を見つめて、深いため息をついた。それは今後の結末が卓巳自身にも分からなかつたからだ。

## 6パシリ 彼氏彼女の関係（後書き）

書置きがあつたのを忘れていました（汗  
ただいま実習真っ最中なので、更新が遅れたことを最初に謝罪します。

次の更新は何時になるか分かりませんが、楽しみにしていただけたら嬉しいです。

## 7パシリ 破局と戯言

授業が終わり、卓巳と愛華は屋上にきた。当初は卓巳一人で静かな場所に行こうとしていた。そうなれば無駄に広い学校で迷子になる可能性があるため、愛華も一緒についてきたのだ。

私立白怜女子高等学校は県最大規模の学校なのだ。全校生徒数は一般的の学校より劣るが、金にものをいわせ、見るもの全て豪華仕様にしてある。そのため入学して相当たった愛華も行ったことのない場所は多数存在する。

卓巳は屋上のフロンスによしかかり、手馴れた手つきで携帯電話のボタンを押した。電話をかける相手はもちろん卓巳の彼女である狩野明海だ。携帯電話を耳に当て、何度も呼び出し音がなった。そろそろ留守番電話に変わらうとしていた時、ようやく電話が繋がった。

『もしもし?』

明海の声は電話越しからでも分かるほど不審に感じている声だった。

「もしもし、俺だ」

『学校にもこないで何やつているの、卓巳ー。』

明海は電話の相手が卓巳とわかつた途端に、さつきまでの不審に感じていた気持ちが何処にいったのか、卓巳に怒鳴りつける。

明海と愛華は似ていた。顔や体格などの外見ではない、考え方や卓巳にどう接しているのか、そういう中身が似ていたのだ。そうはいつても明美はお嬢さまではないので、愛華のように卓巳を「庶民」とは言わない。ただ、卓巳をどう思っているのか、そこが似ていた。

卓巳は耳から携帯電話を離し、苦虫でも口に入れたかのように携帯電話を見つめる。それから直ぐに再び耳に当てる、

「頼むから怒鳴らないでくれ」

『何言つていいの！　ただでさえ卓巳は皆から「落ちこぼれ」って言われているのよ！　悔しくないの！？』

「言いたい奴には言わせとけばいい。それにもうそんな事を言わないから気にすることはない』

『どういう意味よ？』

明美は怒鳴らなくなはなつたものの、それ以上に不機嫌な声だつた。明美が不機嫌になると顔には出ないものの、声が平常の時と比べ物にならないぐらい低くなる。

「昨日で学校を辞めた」

『……』

「あの学校は俺には合わなかつた。それに俺つてそれほど頭良くないし、あの学校に入れたもの奇跡みたいなものだつたからな」

卓巳は苦く笑つた。

世の中には奇跡なんて本当は無いのかもしねない。あるのは必然と偶然。そのため偶然を奇跡と例え、偶然を浸つているのだろう。卓巳もそういう部類に入り、努力を奇跡と例え、落ちこぼれと言われても否定どころか肯定してきた。人一倍努力をしても全て空回りする卓巳は、そこから努力を奇跡と思い込むようになつた。

『……それが学校を辞めた理由だつていつの？』

「いや、もつと違つた理由がある」

卓巳は空を見上げた。蒼くどこまでも続く空を、ただただ見つめた。

愛華は卓巳の横顔を見て心が痛んでいた。卓巳本人は別れることに特別何かを思つてはいなかつた。それでも愛華から見る卓巳の横顔が悲しそうだつたからだ。

(不器用な人なんだから……)

そつと愛華はため息をついた。

『どんな理由よ？　もしくだらない理由だつたら殴るから』

ドスの利いた声に卓巳は焦つた。「くだらない理由」それは人の価値観で変わることだ。もう会うこともない、そう思つても卓

巳は焦つた。

「……そ、それは」

その後の言葉は授業開始のチャイムではばかれた。卓巳にとっては救いのチャイムとも思えるチャイムだった。

「残念だけど時間切れだわ。また今夜にでも電話をかけなおせばいいから、一言一言いつて早く電話を切りなさい」

『ちょ、ちょっと！？ 今の声は誰よ！？』

地獄耳である明海にはしつかりと愛華の声が届いていた。それが話を混乱させ、切るに切れない状態になってしまった。

「……声ですか？ はて何のことやら、幻聴でも聞いたんじゃないのか？」

戸惑いと焦りから卓巳は明海を電波人間のように言い、その場を誤魔化そうとした。

『はぐらかさないで！ それに声の前に学校のチャイムみたいな音もしたわ。いつたい何処にいるのよ。怒らないから正直に言ってよ、卓巳……』

さっきまでの威勢とドスの聞いた声は何処にいったのだろうか。今の中海の声はどこか悲しそうで、どこか辛そうで、今にも声が聞こえなくなりそうだつた。

「ごめん、それは言えない。俺は明海を……いや、狩野とはもう会えない。だから俺の事は今日限りで忘れてくれ。そして……をようなら」

卓巳は一方的に電話を切った。明海の返事を聞かないまま、明海の本音を聞かないまま、明海の

声を最後に聞けないまま、明海の誤解を残したまま、明海との時間を、明海との生活を、明海と交わした言葉を、全て忘れてほしいと願うように、一方的に電話を切った。

卓巳がした行為は正しいとは到底言えない。それでも不器用すぎる卓巳にとっては精一杯の別れ話だった。

「気は済みましたか？」

「……いや、むねやけした気分だ」

パタリと携帯電話を折りたたみながら卓巳は呟いた。

\*

\*

「卓巳の……バカ」

携帯電話から聞こえる「ツーッー」という音を聞きながら明海はそう呟いた。

昨日まで卓巳の姿が見られた廊下に背を預け、明海は今にも泣き出しそうだった。大きな瞳は充血し、体を支えている足にも力が入つていなかつた。

フラフラと教室に入り、授業が開始しているにも係わらず未だ先生がこないため少々騒がしかつたが、今の明海には気にするどころか、全て耳に入らなかつた。耳元に残る卓巳の声だけが明細に明海の脳を繰り返し流れていった。

明海は自分の席に座り、さつき卓巳が言つたことが頭によぎる。「狩野とはもう会えない」「今日限りで忘れてくれ」「……さよなら」全てが何度も頭にループして流れた。

「あつちゃん、どつたの？」

明海の席の後ろに座っている本庄梨乃がポンと明海の肩を叩きながら言う。梨乃は明海の気持ちとは正反対に陽気だった。

「あ、あのね、あのね。た、卓巳がね」

辛い時、悲しい時、そういう時を誰かに打ち明けるのは、その時の事を再び思い出してしまつものだ。そのため明海は堪えていた気持ちが溢れ出し、その結果頬に涙がつたつた。

「ちょっとどうしたのよー?」

梨乃の陽気な性格は筋金入りで、ちょっとやそつとの事では動搖を見せない。が、今の梨乃はオロオロとうろたえ共同不審になつていた。それは明海の性格上仕方がなかつた。明海は卓巳を含めて誰にも弱音や弱い部分を見せないようにしていた。プライドが高い訳

ではなく、ただたんに心配をかけたくなかつた。それだけだ。

明海の様子と梨乃の態度で、明海の友達が机の周りに集まつた。心配する子もいれば、表情では心配を装い内心は興味津々の子もある。梨乃の場合は前者にあたつた。

人とは残酷な生き物だ。自分の事を不幸と思い、自分より不幸な人を見つけた場合は哀れみの眼差しで見つめるか同情する。全ての人がそうではないが、そういう人の中にはいる。

「卓巳がねつ」

「無理に話さなくてもいい。だから涙を拭いて」

明海の言葉を遮り、梨乃は優しい声をかけながら明海をそつと抱き軽く背中をさする。

梨乃は視線で野次馬となつてゐるクラスメイトを散らせ、明海が落ち着け野次馬の目が届かない談話室に向かつて歩き出した。

\*

授業は始まつてゐるのだが、愛華の「お腹が空いたわ」という一言から卓巳と愛華は食堂の机に向かい合つて座つてゐる。普通の学校なら到底ありえない事だが、お嬢さま学校である私立白怜女子高等学校では日常茶飯事のため、誰も気に留めることはなかつた。それは学生を含め先生も、だ。

「邸に帰りましたらもう一度電話をします?」

食べ終わつた皿を脇に除けて、愛華は口元を拭きながら言つ。

「いや、別にもういい」

「そうですか。さつき卓巳さんは「むねやけした気分だ」つて言つていましたね? それはどういう意味だつたんですか?」

卓巳は怪訝そうに愛華を見つめた。

「どうしてそんな事を聞く?」

「気になつた。とでも言つておきましょ?」

それは愛華の本心だつた。愛華は卓巳が言つた「むねやけした気

分だ」を別れた事を後悔しているのだと感じたからだ。

卓巳は「そうか」と素つ気なく呟いた。

ため息をつき、

「俺は愛華さまに『感情に流された恋人の結末はどうなると思つ?』

そう聞いて、愛華さまは「バッドエンドの道しかない」と言つた。  
俺と明海が付き合つたのは俺が愛華さまに聞いた通りだ。だから最初は二人で楽しくやつていたけど、それも最初だけ。今に至つては連絡もあまりとらないし、学校でも話さない。形だけの恋人みたいだつた。だから最後ぐらいは彼氏らしいところを見せたかったんだ。どんなに些細な事でもいい。何でもいいから見せたかった……」

卓巳はそつと視線を窓の外に移す。綺麗にカットされている木、日本と忘れさせるような噴水、日光を浴びて輝いている机と椅子。どこかを見ているのではなく、ただ見ていた。

愛華は小さく鼻で笑つた。その姿は卓巳の言つたことを「ぐだらない」とでも言つてゐるかのようだつた。

「何がおかしい?」

「全てです。どうして形だけの彼女に彼氏らしいことかを見せたいのですか? 意味が分かりません。私からしてみれば、それは戯言です。卓巳さんはそう言つて自分の気持ちを誤魔化しているのではありませんか? 私は卓巳さんに『夢を叶えた責任をとりなさい』そう言いましたよね? その責任をとりなさい。明海さんが納得するまで責任をとりなさい」

「……」

卓巳は何も言えなかつた。愛華の言つてゐる事を否定できなかつたからである。

「邸に帰つたら電話しなさい。」これは頼みじやなく強制です  
「……ああ」

## 7パシリ 破局と戯言（後書き）

久しぶりの更新です。

次回は今回の続きをみたいな感じです。ちょっとシリアスになるとと思  
いますが、楽しみにしていただけると嬉しいです。

## 8パシリ わよつならと言わせて

さよなら、サヨナラ、バイバイ、またね。さよならにも色々な意味と、その場に合った使い方がある。さよならにも複数の意味があり、また明日も会いましょうからもう会うこともない最後の挨拶まで幅広い意味がある。

小堂家の母屋から少し離れた場所にもうけてある愛華専用のプライベート邸の一室。

ありとあらゆるもののが無駄に豪華仕様になっている部屋に一つだけ不釣合いな椅子に卓巳は座っていた。

愛華は風呂を入りにいき、その間に明海に電話をかけるように卓巳に携帯電話を渡した。それは愛華なりの心遣いなのだが、この部屋に限っては愛華の仕込んだ盗聴器などが設置されているため、愛華のプライバシーは守られていても、卓巳のプライバシーというものはみじんもないため心遣いどころではなかつたりする。

「うう、俺はいつたいどうしたらしいのだあー！？」

明海に電話をかけようとしたが、肝心の内容が思い浮かばないため、卓巳は小汚い椅子に座りながら手足をバタバタ振り回した。その姿はお菓子を買ってくれなかつた子どもがスーパーで暴れる姿と似ている。

卓巳は数秒そのまま暴れていたが、突然ゼンマイの切れたカラクリ人形のようにぐつたりとする。そのまま視線だけを天上に向けた。

「……俺はガキかつ」

そう小さく呟いて目を閉じる。

目を閉じてもシャンデリアの光で明るかつた。卓巳は今どうすればいいのか考えていた。この場に居合わせた人がいたなら、きっと寝たのかと勘違いするほど静かに目を閉じていた。

「よしつー！」

数分考えてから掛け声と共に卓巳は椅子から立ち上がり、パチッと頬を両手で思いつきり叩く。

卓巳は愛華の携帯電話を見つめ、ギュッと握った後に自分のポケットに乱暴に入れた。それからドアを開けて廊下を早歩きで歩く。

「どちらに行かれるのですか、西沢さん？」

どこからともなくカナメの声が廊下に響く。

卓巳は予想外の声にビックリし、少し体を震わせる。そして足を止めて後ろを振り向く。

「カナメさん……止めにきたのですか？」

「いえ」

「それならどうして？」

卓巳はカナメを怪訝そうに見つめる。

「西沢さんに一言いいたいことがあります」

「俺に、ですか？」

「ええ、恥ずかしながら私は今までに異性の方とお付き合いしたことがありません。私が西沢さんと彼女さんの事を言つのは場違いと承知しています。ですが、私は西沢さんに後悔だけはしてほしくはありません。お嬢様に何て言られたのかは分かりませんが、それでも西沢さんしたいようにすればいいと思います。ただそれだけを言つておきたかったのです」

カナメは一礼をし、卓巳に背を向けて歩き出した。卓巳はそんなカナメの背中を見つめ、自然に手が伸びた。掴むことも触ることもできない遠い背中が、卓巳にとって誰よりも大きな背中に見えたからだ。

カナメの姿が見えなくなつたといひで、卓巳は再び歩き出した。

邸を出て、敷地の外に出る門まで數十分かかった。そのタイムロスをカバーするかのように、卓巳は走り出した。向かつた先は言うまでもなく、明海の家だった。

小堂家と狩野家はわりと遠く、車でも使わないと一時間ほどかかる

る距離があつた。かといって卓巳は財布どころかお金すらもつていない。バスも電車もタクシーも使えない今、ただ果てしない距離を走っていた。

卓巳は体力が全くないため倒れるギリギリまで走り、休憩をかねて歩く。それをずっと繰り返していた。

時間は夜遅くなくても辺りは暗く、左右の家からは電気が漏れていた。そして歩道には数人の人が歩いている。卓巳の格好、執事服装が珍しいのか、はたまた変質者のように見えたのか辺りの人は卓巳に集中する。それでも卓巳は気にする事なく走り続けた。

「西沢くん？」

卓巳が小堂家を飛び出して四十分ぐらいたつた頃だろうか、ようやく狩野家につきそうになつたそんな時、不意に後ろから声がした。卓巳が振り向けばそこには梨乃が立っていた。手にはコンビニの袋を持っていて、ラフな格好だった。が、卓巳は梨乃の事を知らなかつた。卓巳が以前かよつていた学校は進学校だつたし、なによりあまり人付き合いが得意とはいえなかつたため、自分のクラス以外の生徒は無知だつた。

誰だと思い、卓巳は首を傾げる。

「えつ、誰だ？」

頬を流れる汗を手の甲で拭いながら言ひ。

梨乃は「信じられない」と言つてゐるかのように眉間にシワを寄せ、そのまま卓巳に近づく。

「私の事はこの際どうでもいい。けど明海を泣かせるような奴にはお説教してあげる。だからちょっと私に付き合いなさい」

そう言いながら梨乃是卓巳の胸倉を掴む。そのまま梨乃是自分の顔に引き寄せ、傍から見れば愛し合つてゐるカップルがキスをしてゐるかのように見えた。

「いいわよね？」

至近距離で梨乃是ニッコリと笑みを見せる。

卓巳はそんな梨乃の笑みと至近距離が居心地悪く思え、梨乃から

視線を外す。

「急いでいるから離してくれ」

「あら、女の子からデートに誘っているのに断るわけ？ 甲斐性がないわね」

（さつき説教するつて言つたじゃないか）

卓巳は心の中でツツコム。

「それ以前にその格好はなに？ ちょっとキメすぎじゃないかな？」

「ほつとけ」

「そう、まつ、私には関係ないけど。それよりそこの公園で少し話そう。別にいいよね？」

梨乃は卓巳の返事を聞く前に、卓巳の胸倉を掴んだまま歩き出す。卓巳は思わず事態になされるまま強引に引っ張られる。

公園は素っ気なかつた。どこが素っ気ないのかと言えば全てが素っ気なかつた。以前は今よりもっと元気だったが、今ではほとんど遊具が撤去されて、残っているのは滑り台と砂場、そして鉄棒ぐらいだつた。

卓巳は梨乃に強引にベンチに座らせ、今は一人並んでベンチに座つている。そんな中、梨乃はおもむろにコンビニの袋から缶ジュークを取り出し、そのまま卓巳に渡した。

「私のおごりだから」

そういうつて梨乃は自分の分の缶ジュークを開ける。

卓巳も「ありがとう」と小さく呟いて缶ジュークを開けた。ここまで何も水分を補給しないまま走つたり歩いたりしていたため、この水分補給はありがたかった。そのため卓巳は何のジュークスかも確かめないまま口いっぱいにジュークスを含む。が、直ぐに口の含んだジュークスを吐き出すことになった。それは味に問題があつたからだ。いや、問題なら可愛らしい。大問題だった。

「うわつ、汚いな」

ゴホッゴホッと咳き込む卓巳を尻目に梨乃は言った。

卓巳は涙目になりつつ、何のジュークスなのか見た。缶には『ゴー

ヤ100%』とプリントされ、さらには全く可愛らしくないマスク  
ツトキヤラ的な生物が憎たらしく笑っていた。

卓巳は梨乃を怪訝そうな顔で見つめ、

「美味しいのか？」

聞く順番が違うが、梨乃が好き好んで飲んでいるのか聞く。

「これはハズレだね」

梨乃是苦く笑った。梨乃の趣味は変わった食べ物やジュースがあると試したくなる子で、今までにも色々ものを試してきた。その中でもこのジュースはハズレの部類に入った。それでも梨乃是何も言わずに飲み干してしまった。

「明海から全部聞いたよ。あの子泣いていた」

少しの沈黙の後に、梨乃是そう呟いた。

卓巳は明海の泣き顔どころか、弱音すら吐いた姿を見たことがなかつたため、一瞬ベンチから身を乗り出そうとする。が、それも一瞬のこと。直ぐにベンチに座りなおした。

「……そうか」

卓巳は素っ気なく呟く。内心では自分のせいで泣かせてしまったことに罪悪感でいっぱいだった。だけど仕方がなかつた。そう心で言い訳をし、興味ないふりを見せていたのだ。

梨乃是眉をしかめ、

「君のせいで明海は泣いたのよ？ 何も感じないわけ？」

「……俺と一緒にいないほうがあいつのためだ」

「それは西沢くんが決めることじゃなくって、明海が決める」とよ。それに電話で「俺の事は今日限りで忘れてくれ。そして……さようなら」「さう言つたそうね？」

「ああ」

「カツコイイとでも思つてゐるの？ それならとんだ思い違いよ。全然カツコイイとも思はない、むしろ最低だね」

「……」

卓巳は何も言えなかつた。それよりも梨乃の言つたことが卓巳に

とつて辛く、切ない言葉だつた。それは卓巳が一番よく知つてゐる事だつたからだ。

「明海と付き合い始めたのはいつ頃から?」

「梨乃は何の前ぶれもなくそう言った。

「去年のクリスマス」

「そう、少しその頃の話を聞かせてよ」

「あいつから聞いていないのか?」

てつくり聞いているものだと思い、卓巳は怪訝そうな顔をする。

「あいつ、ね。もう明海の事は名前で呼ばないんだ?」

「お前には関係ない」

「そつ、それより話を聞かせてよ」

卓巳は大きく深いため息をつき、

「恥ずかしいから誰にも言'うなよ」

## 8パシリ やめひなりと書かせて（後書き）

予想以上に早く書き終えることができましたあ～。  
一つだけ報告があります。

これから的话をルート方式にしようと思つています。なので、今回  
は明海ルートです。

それでは次回も楽しみにしていただけると嬉しいです。

## 9パシリ 真の名前を教えて

「ふざまね」

卓巳と明海のファーストコンタクトの時に、明海が卓巳に始めて交わした会話だった。いや、会話とは少し違った。お互いの言葉のキヤツチボールができていないため、一方的な言葉だった。

県立正栄高等学校。県に数多くの高校の一つで、主に進学希望者が集まっている。そのため授業内容も難しく、進学率は県でも有数の名門高校だ。

そんな名門校に通っている卓巳は、ギリギリで入学ができたはいいが、授業に追いつくどころか、日に日にクラスメイトや同学年の生徒と差をつけられていた。それどころか、入学して初めての試験は学年最下位だった。さらにはブービーからの点数は相当離れて、赤点も見るも無残な数まで上り詰めていた。ある意味天下を取ったのだが、これといって自慢するほどの事ではない。良くて笑い話、悪くて痛い目で見られるかのどちらだった。

入学したことが幸か不幸か、卓巳は「おちじぼれ」と言われ続けられていた。もちろん努力もしていた。だが、努力は全て空回りし、成績は伸びるどころか落ちる一方だった。そのため何時しか努力をしないようになった。

入学して初めての秋。

卓巳は友達の高松良助と共に食堂まで足を運んでいた。

学校の生徒は主に弁当派、購買派、食堂派、そしてコンビニ派の四つの勢力がある。その中でも弁当派と購買派が圧倒的な支持を得ていて、食堂派とコンビニ派は少数民族のごとくひつそりと存在している。それには訳があり、弁当派は弁当を食べながら次の授業の予習ができる、購買にはコンビニもビックリするほどの品揃えを誇っている。そのため食堂は常にガラガラで何時なくなつても全く不思

議ではなかつた。

卓巳と良助は食券を買つため、あまり列ができるいない券売機に並ぶ。

列はそう長くないものの、一人は談話をしながら待つていた。もちろん勉強や学校以外の話で、だ。卓巳も良助もとりわけ頭がいいとは言えない、そのため食事中までそんな話をしたくなかったのだ。が、そんな二人を良いようには思えない人が卓巳たちの後ろにいた。

狩野明海。

明海はいつも弁長を持参していたが、今日は弁当をうっかり忘れてしまつたため、食堂まで足を運んでいた。

当初は購買にしようと思っていたのだが、出遅れてしまい好ましいのが残つていなかつた。そのため消去法から食堂になつてしまつた。

いつしか卓巳たちの番になつたものの、喋つていたため何にするか全く決めていなかつた。

「今日はどうする？」

卓巳は小銭を券売機に入れながら隣に立つている良助に言つ。

「一応全ルート制覇したからな……ここは一つ一週目に突入しますか」

「つつても一週目の一発目はやばいぞ？ 食べたくない食べ物、見た目最悪の食べ物、トラウマになる食べ物の三冠王に挑むにはちょっと冒険しそぎじゃないか？」

そう言つて卓巳は券売機のある一部を睨む。

卓巳が睨んだ先、そこには卓巳が以前食べて失神する一步手前までいってしまった『ドキドキ、ワクワク。これを食べれば記憶力UP、バージョン2・5！ 食堂の小母ちゃん一押し！』と書かれた食べ物だつた。ちなみに以前卓巳が食べた時は『バージョン1・5』だつた。

「おいおい、一周目をクリアするには多少の犠牲があつたほうが燃

えるだろ?」

「……」

犠牲が俺たちじやないのか。卓巳はそんな事を心の中で呟いた。  
卓巳がそんな事を思つてゐるとは知らず、良助は胸の前で握りこぶしを作つて語りだそうとしていた。

「そう、例えるならギャルガーかエロゲーだ。一周目は何に対してもドキドキするだろ? だが、一周目に突入したら後の展開が手をとるようにならぬから、それで二周目とは違つた選択肢を選んで一度の樂しみを味わう。さらにハッピーホンドじやなく、ハッピーホンドコースに突き進む」とによつて一人のフラグで一度楽しめるじゃないか。バッドエンドによつて自分の気持ちが犠牲になるが、ギャルガーとエロゲーの貴公子と呼ばれた卓巳には俺の言いたい事が分かるだろ?」

「……どうか、俺にはお前のソウルがしかと伝わつたぞ。貴公子と呼ばれた男がためらう理由がどこにある! 一の食堂と言つ名の戦場で革命を起しそうじやないか、同士よ!」

そして卓巳は良助のこぶしを握る。

が、良助は冷ややかな目で卓巳を見つめ、

「えつ、いや、なんて言えばいいのかな……それ以前に変な集団の勧誘はお断りだから、そののとこへじりよろしく」

「えつ?」

卓巳はせつかくノリに合わせたのに、良助はしらけた顔をしていた。やうには卓巳の手を払いのける。一いち歩ぐると恩を仇で返された氣分を卓巳は心底味わう。

「……ふつ、あはははは、腹いて~」

呆然と立つてゐる卓巳をよそに、良助は大声を上げて笑い出し、

「いや、さすが卓巳だな。ノルとは思つてゐたけど、俺の想像をはるかに超えて中々よかつたぞ。つーか、顔が一番うけた」  
良助はお腹を抑えながらも卓巳に親指を立てる。俗にいうグッジヨブというやつだ。

卓巳は大きくため息をついて、

「それで、結局一周目に突入す」

「ちょっと！　いい加減にしてくれない！？」

卓巳の言葉を遮り、卓巳たちの後ろに並んでいた明海が声を上げる。もちろん卓巳と良助はビックリした顔で明海を見つめるものの、直ぐに良助は卓巳の襟を掴んで明海の声が届かない場所に移動した。

「厄介なやつに出くわしたぞ。卓巳はあいつの事を知っているか？」

良助は卓巳の肩に腕を回してコソコソと話す。

卓巳はチラリと明海の方を見て、

「……ああ、この前いきなり「ぶざまね」とか言われた。ってか、あいつって誰だ？」

「世も末だな。知らない人に対し「ぶざまね」はないだろ……あいつは隣のクラスの狩野明海ってやつだ。ちなみに前回のテストで学年一位の才女だ。しかも満点だつて噂がある。まあ、噂だけで実際は本当か疑わしいけどな」

「へへ、どうりであんなことを言つてきたのか」

「関心しとる場合じゃないだろ。」これは一つガシンと言つ返しとけよ」

「別にいひつて。言いたいやつには言わせとけばいい」

「悔しくないのか？」

「悔しくないって言つたら嘘になるかもしない。けど、無駄な争いは避けたい主義でね」

「卓巳がそう言つなら別にいいか」

「それよりどうしてコソコソと話す必要があるんだ？」

「それは……」

良助は少し口ごもる。そんな良助を卓巳は怪訝そうな顔で見つめた。

「あいつの事が気になつていて」

少しの間を空けて良助はボソボソと卓巳に告げた。

卓巳は一瞬驚いたような顔をしたが、直ぐに、

「青春しているな」

「う、うるせー！ 性格は問題あるが、顔がいいから仕方ないだろ！」

恥じらいから良助は顔を真っ赤にして叫んだ。

「そんなに大声出すと聞こえるぞ？」

「い、いいから俺の恋が実るよつに手伝え！」

良助は卓巳に言いたいことを言つて、来た時と同様に襟を引っ張る。

卓巳は大きなため息をつきながらも友達の願いだから仕方がない、そんな事を思いつつなされるがまま襟を引っ張っていた。

卓巳と良助は再び券売機の前に戻り、かなり機嫌が悪い明海に向かい合つ。

良助は卓巳のわき腹を肘で付く。言葉では表さないものの、一種の合図で「この機を逃すな」そう合図をした。

卓巳は友人の頼みだから仕方ないと想いながらも乗り気じゃなかった。が、このタイミングで「自分で何とかしろ」とは言えるはずもなく、深いため息をついた。

「えーっと、君の名前を教えてくれないか？」

とりわけこういった機会が今までに無かつたため、卓巳は社交辞令のように取り敢えず名前から聞くことにした。

「黙秘します」

ブイツと明海はそっぽを向きながら答えた。

「良助さん、黙秘って何ですか？」

卓巳にとつて聞きなれない単語のため、意味が分からず隣の良助にコソコソ言つ。

「俺にふるなよ、卓巳さん。もしかしたら食べ物の一種じゃないのか？」

「なるほど、恩にきるよ」

卓巳は小さく笑いながら明海に視線を戻す。

そして続けて、

「黙秘ね。あれって美味しいよね~」

ちなみに黙秘とは何も言わないで黙つている事のことといつ。もちろん食べ物の一種じや決してない。

そうとは知らず、まるで知つたかのようになつてしまつた卓巳を明海は怪訝そうに見つめた。

「言つている意味が分からぬのだけど? 学年最下位とブービーには聞きなれない単語だつたかしり? それなら氣を利かせなくてごめんね」

誤るといつより、明らかに卓巳たちをバカにしていた。

卓巳は少し頭にきたが、ここで言いたい事を言つてしまつたら自分と良助の印象が最悪になつてしまつたため、卓巳は握りこぶしを作りながらも堪えた。

「だよね~、俺たちバカだからもうちょっとソフトに言つてくれると助かる」

良助は卓巳がよく堪えたと感心し、明海は意外そうな顔で卓巳を見つめた。

「あら、よく怒らないわね? 自分がバカにされているつて気づいているの?」

「気づかないほうが無理だつて。それよつゞつして挑発するような事をさつきから言つんだ?」

卓巳は不機嫌になりつつも、どうして明海がいつこつた態度をするのか探ろうとする。

明海は一瞬苦虫でも噛んだような表情を見せたが、それも一瞬。直ぐにそっぽを向いた。

「別になんだつていいでしょ」

「話したくないんなら無理に聞かない。だけど誰にでもそんな態度とついたら友達減るぞ?」

「う、うるさい! あなたには関係ないでしょ! ?」

「確かに関係はないな。まつ、ここはお人よしからの忠告とでも思

つてくれ

卓巳に言われるまでもなく明海は前々から知っていた。だからこそ誰かに言われた事が無性に腹が立ち、イライラさせた。

明海は「ふん」と鼻で言いながら卓巳たちに背を向けて食堂の出口に歩いていった。

大きなため息をつきながら、卓巳は隣に立っている良助をチラリと見る。

良助は実にガッカリし、肩を落として落ち込んでいた。そんな良助を見た卓巳は罪悪感で胸がいっぱいになつたが、その時には既に遅い。どうすることもできないため、そつと良助の肩に手を置いた。

## 9パシリ 君の名前を教えて（後書き）

回想モードに突入しましたあ～

まだ回想モードは続くので、明美ルート終了はもう少し先になります。

次回は今回の話から少しどびますが、次回も楽しみにしていただけ  
ると嬉しい限りです。

# 10パシリ 君の名前は狩野明海（前編）

卓巳と明海が始めて会話をしてから数日が経った頃。正式に言えば冬休みを田の前に控えた最後の週。

「あ～、ダルマックス」

卓巳はそんな事を呟き、券売機に小銭を入れる。

「つてかさ、こんな真面目に学校にくる必要とかあつたわけ？」  
小銭を入れ終わつた後に、隣に立つてゐる良助に言つ。  
良助も卓巳の言ったことに同感なのか、

「あるはずがない！」

何の迷いもなくキッパリと答えた。もし仮にこの場に明海が居合わせていたらきっと説教の一つでもしただろう。だが、相変わらず人気のない食堂には明海どころか、人の姿すら見当たらない。

「だよな～、どうせ来週から冬休みに突入だから休めばよかつたな」

「……いや、やっぱり学校は必要だ」

何の前ぶれもなく良助はそんな事を口走つた。さつきは「あるはずがない！」と断言していたのに、今はニヤリと似合ひもしない笑みを浮かべている。

「はつ？ 突然どうした？」

「来週に冬休みが控えている。それと同時に我らにも大イベントがあるではないか！？」

実際に嬉しそうに良助は言つ。

「俺は学校が休みなら常に大イベントだぞ？」

「かあー、お前の大イベントはしじつちゅう見かける閉店セールなどだな。この時期になると体の奥から湧き上がる情熱と言つ名のバストを異性にぶつけようと思わないのか！？ クリスマスだぞ、クリスマスイブだぞ、the evening of Christ mas Eveだぞ！？ 健全な男の子なら気になるあの子からちよつと無愛想な子まで幅広い守備で挑むだろ！ 最低でも五人は誘

つて時間帯別にデートするのが常識だろ！？ 最後のメインディッシュは共に夜を明かすのが日常だろ！？ それを「俺は学校が休みなら常に大イベントだぞ？」あー、ヤダヤダ。俺は絶対に嫌だね！ 実は彼女がいたりしますよ、みたいな余裕ぶっこいでいる子に育てたつもりはありません！？」

「お前つて興奮すると犯罪者の臭いがするのつて俺の気のせいなの

か？ それに話しの最後はしつかりまとめよつな」

やれやれ、と肩をすくめながら卓巳は冷ややかな目で良助を見つめた。だが、一度興奮状態に陥つたらそう簡単に素に戻るはずもなく、

「いいえ、お母さんは卓巳ちゃんに世の中のあり方を教えないといけないのつー？ 卓巳ちゃんが小さい頃に亡くなつたおつとさんも望んでいるのよー！」

しまいには裏声まで使って良助は叫んだ。

（おつと、この展開は友情破局かあ！？ つてか、前々から思つていたが、良助の頭つて末期だな。救いようのないバカだな）

卓巳はそんな事を思つていた。それでも唯一の救いは食堂に誰もいないことだ。もし一人でもいたら一緒にいる卓巳も変人と思われていただろう。

そんな事を卓巳は思いつつ、ふつと食堂の入り口に視線を送る。誰もいるはずがない。そう思つていたものの、それは明海によつて無残に裏切られた。

「ほら、お得意の口説き文句で彼女を誘つてみるよ」

シンシンと良助のわき腹を肘で突きながら卓巳は「ソソソソ」と言つ。チラリと良助は食堂の入り口を見る。一瞬顔がパafferと、花が咲いたような表情をする。が、それも一瞬で、次の瞬間には何事もなかつたかのように平然を装つていた。それでも装つてはいるだけで、たいてい行動を共にする卓巳には嬉しいのだと感じさせていた。  
「ばつ、バカやろう！ ど、どうして俺が誘う必要がある……けどタツくんの頼みなら行ってくる

卓巳は良助の口からタツくんと言われたのが初めてで、そこから相当緊張していると感づく。案の定良助は嬉しさ半分、悲しさ半分、緊張プラスアルファだった。嬉しさは分かるが、どうして悲しいのかは、五手先をよんでもバツドエンドを予想したためだ。

良助はテクテクと小走りで明海のところまで行つた。そんな友人の後ろ姿を卓巳は小さく笑いながら見送る。

\* \* \*

「ちょっと待つた。今話で明らかに西沢くんと明海が付き合う前提がないのは私のせい？ むしろ良助くん……だけ？ その人と明美が付き合っちゃいますみたいな空気があるのは私のせい？」

時は戻り卓巳と梨乃がベンチに座っている公園。

「いや、ここはまだ話しのオードブルだ」

「私にはオードブルなんて必要ないの、手取り早くメインディッシュに移ってくれない？」

「……」

「それに私って前フリが長い話とか嫌いなタイプだから、そろそろ限界だつたりするのよね」

二ツコリと微笑む梨乃をチラリと横目で見た後、卓巳は大きくため息をついた。

「はいはい、分かった。手取り早く結末まで飛ばすな……」「それでいいのよ」

\* \* \*

十一月二十四日。

クリスマスを前日に控えたクリスマスイブ。それだけなら素晴らしい日なのだが、世の中のもてない男子にとつて辛い日だつたりす

る。

それはそうと、街のイルミネーションが綺麗で誰もが目を奪われてもおかしくはない道の端。そこに卓巳と良助が地べたに座つていた。

「はあ～、俺たちつて何をしているんだろ？」

「それを言うな、悲しくなつてくる……」

良助は大きなため息をつき、地面に視線を送る。

そんな良助を横目でチラリと見てから卓巳は自分の目の方の前を通り過ぎる人を見ていた。

腕を組みながら一緒に歩いているカップル、

楽しそうに話しながら店のウインドウを見ているカップル、待ち合わせ場所でそわそわしながら時間を気にしている男性、人の数だけ微妙に違った行動をしている人を卓巳は遠めで見つめる。

「ちょっとトイレに行つてくるわ」

さっきまで落ち込んでいた良助が突然立ち上がりながら、そう卓巳に告げる。

「俺の目が届かないことをいいことに犯罪に走るなよ」

もう歩き出している良助にヒラヒラと手を振りながら言つ。良助は聞かなかつたフリをしているのか、小さく鼻で笑いながら人波にのまれていった。

一人取り残された卓巳は何もすることがなかつたため、再び人間観察をする。

卓巳は人間観察をしながら、ふと思つた。

俺はいつたい何をしているのだろうか？

そう思うと卓巳は無性にむなしく思え、ふと空を見上げた。空には雲一つなく星が綺麗に見えていたのではなく、雲が空を支配し星どころか月すら見えない。そんな空がさらに卓巳をむなしくさせた。

「一人で道端に座つているなんて寂しい人ね」

卓巳が空を見上げている時、卓巳にとつて少し聞きなれた声が聞

こえた。かなりきつい言い方をする子、明海の声が。

「ほつとけ……」

そう小さく呟くものの、卓巳は明海を見よつとましなかった。

明海はそんな卓巳を見ながら小さくため息をつく。そして卓巳の隣にそっと腰を下ろした。

「俺と一緒にいるところクラスの誰かに見られたら勘違いされるぞ？俺は学年一バカで、お前は学年一頭が良い。話のネタにはうつてつけだらうな」

「心配無用よ。私は皆から信頼されているから、ただの誤解で済むと思つから」

「あつそ、それよりこんな時間に何をしているんだ？　デート……のようには見えないけど」

チラリと卓巳は明海を見る。

明海の格好はデートに行くとは到底思えない格好をしていた。それどころかこの場にいるのが少し場違いのような格好である。下は私服のジャージ、上にはカーディガンを羽織つて首にはマフラーを巻いている。化粧もなく、どことなくラフな格好にプラスアルファで着込んだだけのように卓巳は思えた。

「私のプライバシーを知りたいわけ？」

「……興味ないね」

卓巳はそう言って肩をすくめる。

「ふうん、本心は興味津々だけど自分のプライドが許さないからってそんな素振りをしているのよね？　もう少し自分に正直になつた方が私は良いと思うわ」

「はつ？　今までの話からどうしてそこに繋がる？　それ以前になぜあたかも当たり前のように隣に座つている？　つーか、お前つてナルシストなわけ？　それなら今日からお前の事は狩野・ナル・明海って呼ぶわ。どつかのアニメに出てきそうでカッコイイだろ？」

「今の冗談のつもりだったんだけど……、気づかなかつた？」

明海は冗談を氣づいてもらえなくガツカリし、さらには追い討ち

をかけるかのように卓巳がキツイ言のせいで軽く落ち込む。もちろん卓巳は明海が冗談を言う人のように思えなかつたため、心からの本心だと勘違いし、かなり言い過ぎたと罪悪感に浸る。

「……な、なんていうの？　あれだ、そう、あれあれ。普段冗談やボケを言わない人が言うと、無性にボケを潰したくなる衝動が今まさに受けてね……、なんて言うのかな？　……ごめんなさい」

とつさに思いついたことを卓巳は言うが、まとまるはずもなく卓巳自身何を言つているのだろうか、そんな事を思つていた。

「それがあのボケ潰しつていう高等テクニックなのね！　あなた案外中々やるわね」

卓巳の内心とは裏腹に明海は少しばししゃいだように身を乗り出し、心底感心しているかのように卓巳を見つめていた。もちろん当の卓巳は明海がそんなキャラだとは微塵にも思つていなかつたため、驚きの表情で明海を見た。

「お前キャラ変わつてないか？」

「あつ……」

明海は居所が悪そうに地面に視線を送る。

学校での明海はクールに装つていた。だけど普通の私生活では学校での明海とは正反対だった。それだと自分の印象やら何やらの少女の気持ちから私生活とは別の自分。クールで学校生活を送ろうと明海は人知れず思つっていた。その結果として人からは近寄りがたい存在やら自分より格下とは付き合わない。そんな幻想を他の生徒に人知れず植え付けていた。明海自身今となつてはマイナスの印象になつてしまつたことを後悔したが、今更どうしようもなかつた。だから明海はクールな自分を演じ、なれもしない事を口走つていた。

が、

それは卓巳という存在で無になつてしまつた。

明海は今までに卓巳に酷い事は何度も言つてきた。だから明海は決意をした。学校の私と今の私で引かれるのだと。

「まつ、俺としてはそっちの方が接しやすいから別にいいけどな

卓巳は明海の想像とは全く別の事を言つ。

それは当たり前なのかもしれない。

男性と女性の考え方が違う。そこにある。女性が気にしている事でも男性は気にしていない。よくある話だ。もちろんその逆も存在する。だから男性と女性の付き合いは難しく、それでもつて謎なことが無数にある。

「あっ、あはははは」

予想外の出来事に何を言つていゝのか分からず、明海はただ笑つた。苦虫でも噉んだように顔が引きつっているが、少なからず明海は嬉しいと思う気持ちがあった。

変な人だつて思われなくてよかつた。

と、

心のどこかで思う気持ちがあつたからだ。

当の卓巳は首を傾げ、不思議そうに明海を見ていた。

## 10パシリ 番号前は狩野明海 ～前編～（後書き）

9パシリから相当日が経ちましたね^ ^ ;

途中まで書き終えてオチをどうするかで悩んだ結果が前編と後編に分ける結果になりました。

次はもっと早く更新できるよう頑張りますので、これからも応援よろしくおねがいします。

## 11パシリ 君の名前は狩野明海 ～中編～

「それよつせりと帰らないと親が心配するんじゃないか？」

そう言いながら卓巳はジーンズのポケットに突っ込んである携帯電話を取り、時間を確認しながら言つ。

時は二十時を過ぎ、息子なら特別うるわしくは言わないだろうが、娘なら親も相当心配するだろう。

「私は親から信頼されているから大丈夫よ。あなたこそ大丈夫なの？」

「さあ、な。どうせ仕事が忙しくって俺がいないことに気づいていないかもしないな」

「それって寂しくない？」

「いや、結構気楽でいいよ」

卓巳はそう言いながら過去を振り返る。そして振り返れば振り返るほど、卓巳は親との接点が少々薄いことに気づく。もちろんゼロと言つわけではない、それでも他の家庭よりかは少なかつた。かといって卓巳はそれについて特別不満がある訳ではないので、特に気にすることはないかった。

「へへ、私だつたら耐え切れないかも」

明海は苦く笑いながら言つ。

「慣れたらそんな事は感じなくなる」

卓巳は深く息を吸い、そして深く息を吐いた。息は白くにじり、その息が風に乗り消えていく。

「そんなものなの？」

「ああ、例えば熱い湯船に入つたら最初は辛いけど慣れたら気持ちいいだろ？ それが今の俺と親に変わつただけだ」

「なるほどね、中々興味深い事をあなたは言つのね。けど私は少し違うと思つわ」

そう、卓巳の言つたことは少し過ちがある。どれだけ熱い湯船に

慣れたところで熱いのは変わらない、熱を体に溜めれば溜めるほど、それ以上の対価で払わなければいけない。

つまり明海は早い話、いつかは寂しい気持ちでいっぱいになる。と、思った。近い未来なのか遠い未来のかは誰にも分からぬ。それでもいつかは寂しいと卓巳が思うはずだと明海は感じていた。「ただの例え話だ。多少違つていようがさほど気にする事はない」「……まつ、そうかもね。それで、いつまでここに座つていてるつもりなの？」

明海はそう言えば、と言つて居るかのように突然言つ。

「さー、ね。俺は早く帰りたいけど、友達がトイレに行つたきり戻つてこないから、勝手に帰る訳にはいかないから戻つてくるまで未定だな」

「その友達つていつも一緒にいる人？」

「ああ、そうだ」

「ふうん、イブだつていうのに一緒にいるなんて特別な関係なの？」明海は何の迷いもなくサラッと言つ。もちろん卓巳と良助はそんな仲では決してない。よくて仲の良い遊び友達、悪くて悪友といったところだろう。

「お前な……」

卓巳は大きなため息をつき、無邪気に笑つて居る明海を見る。そんな明海を見ていたら卓巳まで可笑しくなり、小さく笑つた。

「突然笑つてどうしたの？」

「いや、ただお前を見ていたら飽きないなって思つて」

「なにそれ。……突然あなたの事が分からなくなつたわ」

「人なんてそう簡単に分かるものじゃない。それが異性ならなおさらだ。違うか？」

卓巳が言つたことは大方あつて居る。男女の価値観とは相当ずれているものだ。小さい頃から女性の中で男性が一人過ごすのなら話は別なのかもしれない。が、卓巳は女性より男性との付き合いが長い。そのため女性とどう接すればいいのか分からぬのだ。

明海は噴出すように声を出して笑い、

「その通りね。あなたは勉強ができないけど、違う知識を色々と持つていいのね」

「ほつとけ」

卓巳は少しそうしたようにそっぽを向く。

ふふふつ、とすねた卓巳を明海は小さく笑いながら見る。

「いじけちゃった？」

「いじけてない」

素っ気なく卓巳は言い放つ。もちろんそっぽを見た常態で、だ。

「いじけてるじゃない」

「いじけてるはずがない」

「いじけてるわよ」

「それは気のせいだ」

と、何度も卓巳がいじけているのか否か口論……とこりより、明海が卓巳をいじっていた。

「まあ、いじけてないって事でいいわ。あなたって以外に頑固なのがね」

「それは違う。事実を述べただけだ」

「そこが頑固なのよ。もう少し素直なら可憐いのに……あなたと話していたらのどが渴いてきたわ」

ガツカリしたように明海は肩を落としながら、最後に小さく呟く。女性の扱いのイロハの最も知らない卓巳は「そのコンビニで何か買ってくるけど、何が飲みたい?」と、言えるはずもなく、それどころか「だからなに?」と言わんばかりの顔をしていた。

多少の沈黙が二人の間を流れる。

「ねえ、そこは男性が気を使って買つてきてくれるのが普通だよね?」

大きなため息をつきながら明海は情けない人を見つめるかのように卓巳を見る。

問題の卓巳といえば、今にも古風に手のひらの上にコブシを叩き

そうな仕草をして、今の状況をようやく理解していた。

「ちょっと自販機で飲み物買つてくるよ」

「もういいよ」

立ち上がり走り出そうとしている卓巳に明海は告げる。

「のど渇いていたんじゃないのか？」

怪訝そうな顔で明海を見つめた。

「もういいって」

「なに怒っているんだよ」

「怒つてない！」

「怒つているよ」

「怒つてないってば……！」

明海はどうにもむず痒い気持ちでいっぱいだった。それと一緒に無性に卓巳の顔を見るとイライラし、その結果として怒鳴るかたちとなってしまった。もちろん卓巳にとつては理解できるはずがなく、オロオロするだけだった。

道行く人は別れ話だらうと思っているのか、チラリと見るだけで、何事もなかつたかのようにそれぞれイブという日を楽しんでいた。少しの沈黙の後に、明海はおもむろに立ち上がる。そして人の波に混ざるかのように歩き出そうとした。が、卓巳が明海の腕を掴む。「いつたいどうしたんだよ？ 僕バカだから分からぬけど、気に障ることがあつたら言つてくれよ！」

「……あなたは何も悪くはない。だから離して！」

「それじゃあ、分からぬいだろ！？」

卓巳はどうして明海の機嫌が突然悪くなつたのか思い当たることはなかつた。そのため、明海にどうにかして聞いたかった。それは学校で友達と呼べる人が少なかつたから一人でも友達と呼べる人を失いたくなかった。からではなく、ただたんに明海の事が気になつて気まずい関係になるのが嫌だった。でもなく、卓巳は女心に気づかない自分に苛立ちを覚えていたからだ。どうしてこうなつたか分からない以上、どうしようもない。だからこそ卓巳は知りたかった

のだ。どうして明海の機嫌が突然悪くなつたのか、を。

思いつきり卓巳の手を振り払おうとも、ひ弱な明海が振り払えるはずもなかつた。それは卓巳も同じで、絶対に明海の腕を放すつもりはなかつた。

無言のまま卓巳と明海の間には解放しない気持ちと、解放されたい気持ちが交差する。

「そろそろ話してくれよ

重い空氣の中でボソリと卓巳は言う。

「バカ」

近くの人にしか聞き取れないほど小さな声で明海が言った。といつても、卓巳は聞き取れなかつたため怪訝そうに首を傾げる。

「バカ！」

叫ぶように言い放ち、卓巳の顔を睨む。

「あつ……」「あつ……

卓巳は明海の顔を見て、手から力が抜ける。その隙を逃すはずがない明海は、卓巳の腕を振り払つて一目散に人の波に飲まれるようにな消えていった。

その場に残された卓巳は振り払われた腕とは関係ないかのように手を伸ばしたまま明海の姿を追つていた。

「…………するいよ…………お前」

そして小さく呟いた。

卓巳は振り返つた明海の顔がどうしても頭から離れなかつた。それは卓巳にとつて初めて誰かを泣かせてしまつた事だからだ。

卓巳はさつきまで座つていた場所に再び座り、少しの間悩んでいた。

どうして明海を泣かせてしまったのか、と。

それでも卓巳が行き着く先には何もなかつた。分かることは自分が悪いという事実だけ。それ以外は何も分からなかつた。

「わり、ちょっと道に迷つっていた

良助は重い腰を卓巳の隣に落とす。

「……」

「ん？ 何かに思いつめているように見えるけど、俺がいない間に何があったのか？」

チラリと横目で見ながら良助は心配するといつよりかは、気楽に言つた。

「……いや、別に

素つ気なく卓巳は呟く。

「どうか、何か飲み物でも買つてくるわ」

眉を軽くひそめて再び良助は歩き出した。

一応良助なりの心遣いだつた。

考えたい時、誰かに愚痴を聞いてもらいたい時、一人にしてほしい時、人にはそれぞれ独自の世界と、その状況に応じた対応策が必要となる。それでも他の人からは決してどの選択が最善なのかあまり分かつたものではない。時として最悪の結果となるかもしれない、時として最善の結果になるかもしれない。それは誰にも分からぬ事かもしだれない。だからこそ良助は卓巳をそつとしておく選択をとつたのだ。

卓巳は一人になり深く考え、その結果として一つだけ分かつたことがあつた。

もう一度明海に理由を聞こう。と、だ。

それによつて明海に避けられるかもしれないが、卓巳は心が揺れてどうすることもできなかつた。だからこそ本人に直接聞いて、言つてくれなかつたらそれまでだと思つた。

そう思つたら卓巳は直ぐに行動に起こした。直ぐに立ち上がり、人の波を器用に避けながら懸命に走つた。そして後から良助には謝つておこうとも思つた。

明海がどこに向かつたのかは卓巳には全く検討がつくはずがない。それは当然で、卓巳と明海は友達といえるかどうかの瀬戸際の関係だからだ。悪くて顔見知り、良くて話し相手といったところだろう。

それでも卓巳は走り続けた。体力のない体を怨みながらも走り続けた。

どれぐらい走ったのだろうか。十分だろうか、それとも一十分だらうか。それぐらい長い間走っていたように卓巳は感じた。だけど、実際は五分弱ぐらいしか走ってはいなかつた。

「や、やっと見つけた」

荒い呼吸をし、肩で息をしながら卓巳は走るのを止めた。走るのを止めたのだから、必然的にそこに明海の姿があつた。

明海はビックリしたように目を見開き卓巳を見ていた。

まだほのかに赤い瞳を隠すかのように卓巳に背を向け、その時の彼女の頬はほんの少しだけ赤く染まっていた。

## 12パシリ 君の名前は狩野明海（後編）

「まあ、そんな感じ。その後はどこかのヤンキーに絡まれて、その時に俺が「俺の女に手を出すな」と言つたわけ。それが俺とあいつが付き合つきっかけになつた話だ」

時は戻り、公園のベンチ。

卓巳は一通りの説明をし、まだ残つているジュースを一気に飲み干す。もちろんむせて吐き出しそうになつたのは言つまでもない。「なるほどね、大体の話は理解した。けど一つだけ疑問があるけど、いいかな？」

「答えられる範囲なら」

「どうして明海は泣いていたの？ 別にそこは泣く必要はなかつたと思つけど……」

「確かにだけど、気持ちの整理がつかなかつたらしい。まあ、よく分からぬけど」

肩をすくめ、大きなため息を一つ吐く。だけど梨乃には理解できたのか、なるほどと言つてゐるかのように頷いていた。

「それで、西沢くんは今からどうするつもりなの？」

「なにが？」

「なにがつて……明海のことしかないでしょ」

梨乃是呆れ、頭を抱える。

それも仕方のない事である。何事にも鈍い卓巳を相手にすること、すなわち話しおの一つ一つに説明がいるということだ。そのため根気よく接しないと話しがかみ合つてそうでかみ合わないことがしばしばある。けど、本人の卓巳は全く自分が鈍いとは思つてはいないため、相手が卓巳のペースに合わせなければならぬのだ。

「その事だけど、まだ何も考えてない」

「へつ？」

あまりにも予想外の答えに梨乃是恥ずかしいぐらい間抜けな声を

上げる。

卓巳は恥ずかしそうにそっぽを向いて今にも口笛を吹きそうだ。

「ちょ、ちょっと待つて、今考えるから」

梨乃はこめかみを押さえながら考えた。

今から明海に会つて何を話すのだろうか、それ以前に私は何をしているのだろうか、などと初心に帰るほど考えた。

「要するに、西沢くんは何も考えないまま明海に会おうとしたわけ？」

「まつ、そうなるな」

「……こりゃあダメだ」

今にも梨乃は崩れ落ちそうだった。もちろん悪い意味で、だ。そんな梨乃の傍らで卓巳は、むつと眉間にシワを寄せた。

「悪かったな」

「別に悪くはないけど、もう少し後先を考えて行動したらどう？」

「少しさは考えたんだけど、考えてもしようがないと思つてさ」

「それで明海のところまで走つていたってわけ？」

「ああ、そうだ」

「西沢くんの思考回路どこか異常あると思つから病院に行くことを進める」

「失礼なやつだな。俺はどこも異常はないし、普通の考えだ。お前だつてあるだろ？」

「なにが？」

「考える間に体が動く時つて」

「全くない！」

梨乃は言い切る。

といつても、人は切羽詰る状況に陥れば考える前に体が動くなんて別に珍しい事ではない。そんな体験をしてない梨乃だからこそ言いい切れる事だつたりする。

「まあ、いいわ」

梨乃は卓巳を真剣な顔で見る。

「なんだよ？」

「明海には本当の事を言つて、自分の気持ちを伝えなさい。そうすれば明海もきっと分かってくれる。そして心のどこかにまだ明海と付き合いたい、そう思うなら別れる事を考え直しなさい。分かった？」

「……ああ

「ならやつやと言こにいけ少年よ」

「そうだな、少女よ」

それだけを言い残して卓巳はベンチから立ち上がり、直近くにある明海の家に向かつて走りだした。そんな卓巳の後姿を見て梨乃は小さくだが「がんばれよ少年」そう呟いたのだった。

明海の家の前。

「ぐぐぐ普通で、どこにでもある家の前。そこに場違いと思わせる服装をしている卓巳は立っていた。

軽く肩で息をしながら、卓巳は携帯電話をズボンのポケットから取り出す。別に時間を気にしている訳ではない。それどころか今の時間が深夜だらうが、子どもが寝る時間だらうが卓巳には関係がない事だ。

携帯電話の発信履歴を見る。

名前のない番号、明海の番号を睨んだ。

卓巳は通話ボタンを押そうと何度かするが、それでも通話ボタンは押していなかつた。ただその場には携帯と睨めっこする卓巳以外誰もいなく、辺りは静けさを保つていた。

数分の間、卓巳は携帯電話を睨んでいたが、睨むのを止めた。そしてぐぐぐ稀にする真剣な顔で明海の部屋、道路側の部屋を見上げる。

その刹那、卓巳は通話ボタンを押す。

携帯電話を耳に当て、何度も呼び出し音が鳴る。  
数回鳴つたところで、明海に電話がつながつた。

『……もしもし、卓巳?』

かなりか弱い声で明海は言った。

「……そうだ」

そんな明海の声を今までに聞いたことのない卓巳は困惑った。それでも直に元のように接しようと平然を保しながら言った。かといって元のように接することなんて無理な話だ。だから明海には少し卓巳の変化に気づいた。

『ねえ、理由だけ……』

「ん?」

『理由だけ聞かせてよ。私と別れるって理由』

「……そうだったな」

そして卓巳は遠い目をする。

『強いて言つならば昔の俺に対する責任ってやつかな』

『責任?』

『そう、責任だ。お嬢さま……詳しい事は言えないけど、いろいろあって今執事やっているんだ。そのお嬢さまが俺に言つたんだよ。夢を叶える前の自分に責任をもつて』

『……そり』

『俺は前までお前の事を本当に好きだった。授業中もお前の事をずっと考えていた。風呂に入っている時も、布団に入っているときも

』

『もう止めて……お願いだから止めてよ……悲しくなるから』  
卓巳の言葉を遮り、明海は叫ぶ。それと同時に携帯電話の向こうから明海の鳴き声が卓巳の耳に届いた。

『だけどそれも最初だけだった。日が経つにつれてそんな感情は薄つすりと消えてつた。お前だってそうじやないのか? 学校でも話さなくなつたし、連絡のやり取りもなくなつた』

それでも卓巳はお構いなしに続ける。

『違つ……もん。私は今でも卓巳の事は好き……誰よりも好きなの

』

「それじゃあ、どうして？」

『『だつて卓巳はいつの間にか私の事を見てくれなくなつたもん！だからどうしていいか分からなかつたもん……』』

そうして卓巳は気づいた。

俺は一人で先走っていたのだと。

明海が悲しい時、卓巳はそんな時そつとしといてあげた。そして逆に卓巳が悲しい時があった時、そんな時は明海が電話をした。それでも一人にして欲しいと思う気持ちがあつた。その気持ちが明海も同じだと卓巳は勘違いをしていた。だから卓巳と明海に間に知らぬ間に深い溝が出てきた。

卓巳は歯を思いつきり食いしばる。

『……そうか、俺がお前の事を知らなすぎてこうなつたんだな……ごめん、な』

『それじゃあ』

『いや、よりは戻せない。もう無理なんだ……』

『お嬢さまのことがあるから！？』

『それもあるし、それとは別に俺はお前の事を傷つけた。だからもうそんな思いをお前にさせたくない。だからもう……』

『……誰かと付き合うこと楽しい事ばかりじゃないの。お互いを傷つける事もあるの。だからそれは仕方ない事なのよ。だからこれから傷つけない努力をすればいいじゃない』

卓巳は以前に誰かにそう言われたような気がした。誰だか分からぬが、その言葉が卓巳の記憶に薄つすらと残つていた。

『……ごめん』

そしてお互に沈黙が訪れる。

数秒それが続き、卓巳が持つている携帯電話の向こうから明海の声が届く。

『……分かったよ。けど、これだけは言わせて』

『なんだ？』

『後悔してもしらないからね！』

「ああ

『私は卓巳の事が今でも好きだからねー。』

「ああ

『誰よりも好きなんだからねー。』

「ああ

『だからまたいつか、その時は私から告白するからねー。』

「ああ

『……バカ』

最後は今にも声が消えそうなほど小さな声で呟いて電話が切れた。卓巳は明海の部屋から視線を外し、携帯電話をパタリと折りたたみ再びズボンのポケットに入れる。

少しの間、卓巳は田をつむつた。  
とその時。

「気は済みましたか？」

優しくほんのりシャンプーのする彼女の声が卓巳の耳に届いた。振り返らなくても卓巳は誰なのか分かっている。

小堂愛華。卓巳の主であり、卓巳の執事として使える相手。

「ああ……悪くはない後味だ」

卓巳は愛華の顔を見るのではなく、明海と別れた場所を見ながら言った。

もう誰もいないその場所を、ずっと、ずっと、ずっと、ずっと、見ながら言った。

「そうですか。それは良かつたですね」

静かな街中、彼女の透き通った綺麗な声が響き渡る。

「ああ

微弱な卓巳の声は響くことはなく、愛華の耳にだけ届いていた。

12パシリ 真の名前は狩野明海（後編）（後書き）

明海ルートは終了しました。

次回からは……まあ、少しばかり考えていましたが、全体の流れは何一つ  
考えてないです、はい＾＾；  
感想や評価、どんな話が見たいかななどがありましたら気軽にお願い  
しますね。

それでは次回にまたお会いしましょう♪^\_^

## 13パシリ 入院とは賤な生活の最終地点

とある病院の一室。

そこに西沢卓巳がベッドに横たわっていた。  
彼はカツコイイと言われるより可愛い、そう比喩された方がしつくりする顔立ちで髪の色素が薄いのか少し茶色をしたブラウンヘア。大きな眼が特徴で、それに合つた長いまつ毛、そして太陽の光を浴びないのか白くスベスベした肌。全てが男性と言つよりかは女性と感じさせている。

卓巳はパジャマを着込み、外見上ではどこも異常のないように感じられる。が、パジャマの下、腹部に巻かれた包帯が痛々しさをだしていた。

そんな彼の傍ら、ベッドの傍らには彼の主である小堂愛華が無駄にゴージャ斯な椅子に座りながら本を読んでいた。

彼女もまた美しい顔立ちをしている。

長い髪は自然に垂らし、大きくアーモンドに似た目、整った鼻、リップをつけているのか綺麗な色をした唇、雪のように真っ白な肌。初めて見た人は芸能人かモデルでもしているのかと勘違いするほど美貌と、それにあつたスリムな体型をしていた。スリムといつても出るところはしっかり出て、そうでない所はしっかりとない。病院の中でも上ランクに値するほどの個室には一人以外だれもなく、部屋は静寂に保たれていた。それでも卓巳にとっては居心地が悪い場所でしかたがなかつた。

「俺の事はほつといいいから邸に帰つたらどうだ？」

恐る恐る卓巳は言つ。ちなみに愛華がこの個室にきてから、もう何度か言つた言葉だつた。

「あなたの怪我の責任は私にあります。ですから下僕の怪我は私に任せて下僕はしっかり休養しなさい」

治るものも治らん。

卓巳がやう思つたが、そんな事を言つてしまつたら後々めんどりな田に呑みと察知し心の中で咳く。

「別に愛華さまの責任じゃないから氣にする事はないって」「いえ、経過はどうあれ最終的に私が下僕に命令をしたのは変わりません」

「でもな……ほら、学校の宿題とかあるんじゃないのか?」

「下僕は私にやつせと帰つてもらいたいよつて感じられますが、それは私の氣のせいしから?」

「そ、そんな筈があるわけないでしょ? 愛華さまの氣のせいですよ」

かなりベタだが、卓巳は今にも口笛を吹きながらどこか遠い田をしそうだつた。

愛華は一度きつと卓巳を睨む。

読んでいた本にしおりを挟み、パタリと閉ざす。

「まあ、いいでしょ。今日は帰りますので、また明日学校が終わつてからきます」

座つていた椅子から立ち上がり、本を脇に持ちながら出口に向かつて歩き出す。

卓巳はようやく解放されたことの嬉しさから笑みがこぼれる。

「最後に言つときますが、私がいない事を良い事に日に余る行動は控えるように。ではまた明日」

それだけを卓巳に告げ、愛華は部屋から出て行つた。

「……脇いてー!」

今にも泣きそうな顔をしながら卓巳は脇腹を軽く抑え、歯を食いしばる。ちなみに卓巳の怪我はアバラ骨折と全身打撲だったりする。卓巳がこうなつてしまつたのは三日前とかのぼる。

\*  
\*

とある日羅田の血下がり。

卓巳と明海との問題が一段落してから早くも一週間が過ぎようとしていた。その間、明海から卓巳に何度も連絡はあったものの、本人に伝わる前に色々な事情からもみ消されていた。そんな事があるとは知らず卓巳は以前より愛華からの命令に忠実とは言いがたいが、それでも愛華の頼みを聞いていた。

愛華の頼み、命令は日に日にエスカレートしていき、時間なんて関係なしに卓巳を使っていた。咽が渴いたから紅茶を持つてこいとは序の口で、酷い時は眠れないから羊の格好をして柵を飛び越える、などと無茶な事を言つていた。

別に卓巳が嫌いだから無茶な命令を愛華はしていたのではない。

ただ、彼女はムシャクシヤしていた。

別れても連絡をしてくる明海に、主である愛華をほつといて明海のところに行つた卓巳に、そして無茶な命令をしても結局やる卓巳に、色々な事に対してもムシャクシヤしていたのだ。だから思つてもいいことを卓巳に命令していた。

そして卓巳の怪我に繋がる一件もまた、愛華の命令からだつた。  
「下僕。暇だから力ナメのスカートをめくつて下着の色を私に報告しなさい」

この愛華の一言がことの発端である。

「さて、取り敢えず落ち着こうか。俺が力ナメさんのスカートをめくるとする。それによつて何の利益がある?」

もちろん卓巳はそればかりは拒もうとする。なぜなら力ナメの腕力は並みではない。きっとリングを持たせれば何の感情もなく握りつぶすほどの腕力の持ち主だ。さらには日々のトレーニングで鍛え抜かれた筋肉は尋常ではない。かといって力ナメも一人の女性。人目を集めようなど筋肉一色の体ではない。ほどほど鍛え抜かれた体のため、じっくり見ない限り、誰も力ナメがトレーニングをしているとは感じない。まあ、早い話、見せる筋肉ではなく、戦う筋肉ともいおう。

そんな力ナメのスカートをめぐれば仕打ちが恐いのは誰だつて同

じだ。

「決まつているじゃない。私の暇潰しになるじゃない。下僕だって私の暇を潰せて嬉しいでしょ？」「

愛華は何の迷いもなく言つた。

そして愛華は直側にある鈴を鳴らす。  
チリンと部屋に鈴の音が響き、その後にカナメがどこからともなく現れる。

「どうかなさいましたかお嬢さま？」

「さあ、下僕。条件はそろいました」

カナメの言葉を無視し、愛華は卓巳を見る。

卓巳は一度舌打ちし、半ばやけくその状態でカナメのメイド服のスカートを掴む。そのまま一気に手を振り上げようとしたのだが、カナメの蹴りで阻止される。

馬の蹴りのように、カナメは思いつきり卓巳を後ろに蹴り飛ばし、その結果としてどこかのカンフー映画のように蹴り飛ばされ壁に激突。漫画のように壁にめり込むまではいかなかつたものの、ミシリと壁が悲鳴を上げた。

「ま、愛華さま……ピンクです……」

やり遂げましたみたいな表情のまま卓巳は息を引き取つた。ではなく、気絶した。

次に卓巳が起きた時、悲鳴と絶叫が邸に響き渡り、小堂家専属の医師によればアバラ骨折に全身打撲と告げられ再び卓巳の絶叫が邸に響き渡つた。

\*

\*

時は戻り、病院の一室。

愛華は卓巳に休養をかねて長期休暇を与えた。それでもどこかに行けるはずもなく、休暇とはすこし言いがたいものがある。  
(ジユースでも買いに行くか)

卓巳はそんな事を思い、横になつていたベッドから立ち上がる。

そして愛華が卓巳のために置いていった財布を手に取る。が、その財布の異変に卓巳は気づく。

そつと覗き込むように財布の中身を確認したのはいいものの、常識外れの中身に少々戸惑う。

なぜなら財布の中身は全て万札だからだ。しかも枚数が普通ではない。もう百万ぐらい軽く超えているぐらいの厚さを誇っていた。もちろん愛華なりの心遣いの結果としてこうなつた。普段の愛華はカードしか支払いはしない。そのため札という存在を今の今まで忘れていて、カナメのアドバイスから札になつたのはいいが、自動販売機は万札を使えない。そのため卓巳からしたら嫌がらせ以外にもなかつた。

（これだから金銭感覚がおかしい人は……）

やれやれと思いながら卓巳はそつと財布から一万円札を取り出し、それ以外はそつと枕の下にでも隠しといた。

軽く欠伸をしながら売店に行くため部屋のドアをスライドさせ廊下にでる。

VIPと思わせる個室だが、一般的の病室と同じフロアにある。そのため一般の方とも顔を合わすことは少なくない。

が、卓巳が部屋から出た途端にビックリして一歩引き下がる。なぜなら卓巳の部屋に入るためのドアの両脇。そこに黒服の大男が一人立っていたからだ。まさかの展開に卓巳はドン引きする。

「西沢さま、どちらに？」

一人の大男がハモリながら囁く。

「ちょっと売店に……って誰だよ、お前らー？」

「病院の中ではお静かにするのがマナーというものですよ  
大男Aが普通に注意する。

「あっ、すいません」

そして普通に誤る卓巳。

第三者から見ればきっとお偉いさんと、そのボディーガードのよ

うに見えるだろ？

「じゃなくて、お前ら誰だつて？ つーか、そこで何をしている？」

「愛華お嬢さまから何も聞かされていないのですか？」

ハモル大男一人組み。

「聞かされてないけど……」

「そうですか、私たちは西沢さまの行動を監視するために愛華お嬢さまから申しております」

どこまでもハモル大男一人組み。

「……百歩譲つて認めよう。だが、他の人に迷惑だから帰れ」

「そうは言われましても愛華お嬢さまの決定は絶対ですので、いかに西沢さまの頼みでも受け容れることはできません」

「何か、今の言い方からすれば他の頼みなら聞いてくれるのか？」

「当たり前です。私たちより西沢さまは格が何段階も上ですので」  
説明しよう。小堂家に使える使用人にはそれぞれランクがある。  
下から邸の掃除人、車の運転手、コック、ボディーガード、メイド、執事ときていてる。さらに専属の執事になると使用人から崇拜されるほど凄いのだ。

「そうとは知らず、今の今までそれらしい待遇を受けたことがない卓巳は全く実感ができずに今に至っている。

「……そうか、なら帰れ」

「ですから愛華お嬢さまの決定は絶対ですので受け容れることはできません」

「全ての責任は俺が背負う」

「ですから……」

「ならこれは命令だ。今すぐ帰れ。上官の命令も絶対だろ？」

ニヤリと卓巳は笑みを見せる。

「……分かりました。どうなつても知りませんよ？」

大男Bが諦めたようにため息をつく。

「おい、いいのか？」

大男Bに賛成できないのか、困ったように大男Aが言う。

「西沢さまの命令なら仕方ない。それに私たちが西沢さまのボディーガードをしたところで、何かが変わるはずがない。そうでしょう、西沢さま？」

「ああ、その通りだ」

「なら西沢さまの命令に従うまでだ。帰るぞ」

そして大男Bは一度卓巳にお辞儀をし先に歩いていく。その後ろを不満そうな顔で大男Aがついていった。

一人取り残された卓巳は一度大きなため息をつき、当初の目的である売店に向かつて歩き出した。

売店で適当に飲み物を買い、近くに置いてある固いソファに腰を下ろす。

ぐつたりと座り、天井に視線を送る。

(とてもなく疲れたような気がする)

そんな事を卓巳は思っていた。

「となり、空いているかな?」

卓巳の気持ちとは裏腹に、卓巳に明るく声をかける少女が一人。そして卓巳の返事を待たずに、控えめに座る。

誰かと思い、卓巳は横目でそっと見る。

そこにはパジャマ姿の可愛らしい子が一人座っていた。黒く長い髪、モデルのように小さな顔に大きな瞳と少し控えめな口。とても可愛らしい子がそこに座っていた。

不意の出来事に卓巳はドキッと胸が高鳴る。

「私は東郷亜里沙。君は?」

とても笑顔が似合う子だった。

「……西沢卓巳」

それ以外に卓巳は何も話せなかつた。

ただ、隣に座っている彼女の顔が素敵だったからだ。

## 13パシリ 入院とは賑な生活の最終地点（後書き）

次は亞里沙ルートです。

今回も愛華の出番は多分少ないかもしませんね^ ^ ;  
それでは次回を楽しみにしていただけたらとても嬉しいです

## 14パシリ 一人の出会い

卓巳と亜里沙が出会ってから一日が過ぎた頃。

あまり人との付き合いが得意とは言えない卓巳は亜里沙と会つて、かなりぎこちなかつたのだが、亜里沙はそんな卓巳とは正反対で、もう仲良しになりましたと言つていいのかのように、さくに話しかけてきた。

話の内容としては日常生活やら昨日見たテレビ番組の内容やらがメインだった。そしてお互い自分の病気やら怪我やらの話は一切しなかつた。それが当たり前のように。

卓巳と亜里沙が話しこむ場所は決まっており、最初に会つた場所。売店の固いソファだつた。

亜里沙も卓巳同様に個室なのだが、男子部屋と女子部屋まで結構の距離がある。そのため卓巳が亜里沙の部屋に行くことはない。だけど女子部屋から男子部屋、主に売店などに行く場合に限つて話しは別だ。女子部屋から売店に行く過程の道に卓巳の個室がある。それでも何故か話す場所は売店の固いソファと決まつていた。

それは今も同じで、固いソファに並び二人は並んでジュースを飲んでいる。

「そのジュースって美味しいの？」

不思議そうな顔で卓巳が持つているジュースを見る。

卓巳が持つているジュースは特別珍しいものではない。むしろメジャーすぎるぐらい有名なジュースだ。

「？ 飲んだことないのか？」

「うん。体に悪いからお医者さんが飲んだらダメだつて  
そう言つて彼女は苦笑う。

本当は飲んでみたい。そう何度も思った。美味しくつて甘いお菓子も沢山食べたい。そう何度も思った。それでも亜里沙のお母さんや担当の医師はダメだといつけていた。だから余計にそういつた

事に敏感になつていた。

「……そり、か」

「それだけ？ ここは嘘でも体が良くなつたら何でも奢つてやる。とか言つてほしかつたんだけど」

「俺は守れない約束はしない主義なんだな」

「それなら仕方ないね」

あはは、と亜里沙は笑う。

「あつ、そうそう。前から一度聞こうと思つていたけどいいかな？」

「別にいいけどスリーサイズは教えないぞ」

「……西沢くんと初めて会つた日のこと覚えてる？」

卓巳の言葉を軽くスルーしながら囁く。

さすがの卓巳でもそれぐらいは覚えている。固いソファに座りながらジユースを飲んでいたら笑顔の彼女が隣に座ってきた。たつた一日前の事ぐらいしつかりと覚えていた。

「当たり前だろ？ なにか、東郷は俺の事をバカにしているのか？」  
「そんなわけないでしょ！？ ただね、始めて話す前に廊下で黒服の人と西沢くんが話しているのが見えたの」

「ああ、あれか。それがどうかしたのか？」

「氣を悪くしたらごめんね、それがどうしても氣になつて……」

亜里沙は最初に卓巳を見かけた時、黒服の大男と話している姿がミスマッチしていたため印象が濃かつた。

「そうか……あれを見てしまつたのか……東郷とは短い付き合いでつたが仕方がない」

「も、もしかして……」

一瞬で全てを悟つた亜里沙の表情が青ざめていく。

「すまないな、痛いのは一瞬だけだ。少しだけ我慢してくれ

そういうながらパジャマの中に手を突つ込み、指で拳銃を持つているように見せかける。

「バーン！」

そう言うのと同時に笑いが込み上げてくる。

卓巳はあまり嘘をつくのが得意ではない。それは顔に出るためだからだ。だから今までかなり我慢していたのだが、それも限界。言い終えるのと同時に、笑った。けど、笑いと同時にわき腹に激痛が走ったため、結果としてやり損といえるだろ？

騙された当の亜里沙は、漫画でいうならば口を二角にして、潤んだ瞳で放心状態に陥っていた。その姿は可哀想というより、どこか愛らしかった。

「おい、しつかりしる」

少し罪悪感に浸った卓巳は、軽く亜里沙の肩をゆする。

「ふ、ふえ？ 私死んじゃったの？ あれあれ？」

卓巳の冗談を真に受けている亜里沙は自分が死んでいるのか、それとも現役バリバリ生きているのか分からぬ様子で足やら胸をペタペタ触っている。

「すまん、軽い冗談のつもりだったけど、ここまで本気にすると私は予想外だ」

軽く笑いながら卓巳は言つ。やうじやないと、わき腹が悲鳴を上げるからだ。

「も、もー！ 西沢くんのバカー！！」

顔をトマトのように真っ赤にし、できるだけ大きな声で叫ぶ。けれども卓巳にとってはその姿もまた、愛らしい姿だと思い、少し心が和んだような気がした。

「それより胸から手を退けたらどうだ？ あまり人前でそつするのはよろしくないかと思うけど」

つい先ほど足やら胸やらを触っていた手が、まだ胸を触っている形で、健全な卓巳にとつて少々刺激的だった。

「……セクハラで訴えてもいいかな？」

「それはちょっと困るな。まあ、それはそうと、話を戻すよ。あの黒服の人たちは何て言つのかな？ ……簡単に言えば、職場仲間つてやつかな。といっても、この前初めてあつたから職場仲間つていのもの微妙なニュアンスなんだけどな」

「西沢くんって私と同じ年だよね？ 何の仕事をしているの？」  
首を傾げて、亜里沙は怪訝そうな顔をする。

「執事」

「執事ってあの執事？」

「あの執事だ。一応こいつ見えてもお嬢の専属執事だから結構偉いんだぞ」

「具体的にはどのへん？」

「偉いってことで？」

「うん。それ以前に使用人にも位つてあるの？」

「さあ、俺も詳しく述べ知らん。けど、執事の中にも色々なカテゴリーがあつて、オールマイティーな執事もいればメイドのような仕事をしている執事もいる。その中でも専属執事は色々な使用人の中でも一番位が高いらしいんだよ」

「なんで、らしいなの？」

「一応俺だってついこないだまで普通の高校生だったんだけど、不運が積み重なりちょっと前から執事に無理やりならされたつてわけ。だからそういうことは無知な」

「ふうん、西沢くんも苦労しているんだね」

「まあな」

そつけなく返し、改めて自分が苦労しているのだと感じた。けど、苦労というよりかは、親に売られた性といつても過言ではない。そのため卓巳は思った。

別に裕福な暮らしじゃなくともいい。だから親が親であつてほしい。

そう思つた。

「楽しそうね、お二人さん」

どこからともなく綺麗で透き通る愛華の声が売店に響く。それでもトゲがあるような声なのに、卓巳は直ぐに分かった。

卓巳は慌てて時間を確認すると、時間は既に五時をまわり、いつもなら既に愛華がお見舞いにきている時間だった。

少し機嫌が悪い愛華とは裏腹に、一面に花が咲いたような顔を亞里沙はした。

「ねえねえ、この綺麗な人って西沢くんの知り合い？」

「つきつきしたようにわき腹をシンシンと突つつく。もちろん卓巳にとつては痛いから迷惑以外になにもない。」

愛華と亞里沙が会うのは初めてなのはいうまでもなく、愛華のようないい綺麗な人に声をかけられるのも初めてだった。そのため亞里沙は憧れの瞳で愛華を見つめる。

「さつき話したお嬢だ」

「へへ、この綺麗な人がそうなの」

「卓巳さん、隣の可愛い方を紹介してもらいます?」

ニッコリと笑みを見せる。

愛華は自分の家、主に部屋以外では素ではない。猫を被り、いい顔をする。そのため部屋なら卓巳の事を下僕とか言い今とは比べ物にならないぐらい何ともいえない性格をしている。

そんな事とは知らずに亞里沙は自分が可愛いと言われ、嬉しいのと同時に照れる。

(可愛いなんて、そんな……けど可愛いか。うふふ、照れる~)

亞里沙はそんな事を思つていた。

「……ああ、彼女は東郷亞里沙。見ての通り入院中の身だ。ってかさ、本人に聞けばいいだろ? どうしてわざわざ俺が説明する必要がある?」

「そう、東郷さん私の執事が迷惑かけませんでしたか?」

「おい、人の話を流すな!」

「ちょっとセクハラ発言がありましたけど、西沢くんはとっても優しくしてくれますよ。まあ、無愛想なのが少し残念ですけどね」

小さく笑う。もちろん卓巳は全く笑えない。この後に愛華に何を言われるかと考えたら、かなりテンションが下がる。

「セクハラ発言ですか……卓巳さん、後でお話をしなければいけませんね」

顔が引きつっている愛華の笑顔。

責ざめる卓巳。

嬉しそうな亜里沙。

それぞれ、いや卓巳だけは一つ問題の種ができる事にがっくりと肩を落とした。

「まあ、それはそうと、東郷さん？」

「あっ、はい。なんでしょう？」

「卓巳さんは私の事をあまり良いように思っていないようなの、私がいない間は卓巳さんの事を頼みましたよ」

そんな愛華の姿に卓巳はお母さんのように見えた。

発言だけではなく、時々見せる心遣いや仕草がそう見えた。それでも年頃の卓巳にとつては、そんな発言もまた嫌で仕方がない。

「おまえは俺のおかんか！？」

「あら、卓巳さんは主人である私におまえと言つのですか？」

「……愛華さま」

あまりお嬢さまという存在から縁のない亜里沙の前で、愛華さまと言つた事に卓巳は少し恥じらいを覚えた。

学校ではこれが常識なのだが、一歩外に出ると常識とは少し違つている。それは庶民の方が富豪よりはるかに多いため、誰かの事をお嬢さまと言つ機会がないからだ。だから富豪の常識は庶民には非常識となる。これは富豪と庶民に関係なく、色々な面からでもいえるだろう。

「それでいいのです。それで、卓巳さんにカナメが話したい事があるそうです。部屋で待っているので、後ほど二人で話してください」卓巳はどことなく何を話すのか予想はできた。決して悪い方向の話ではないと思っていても、怪我のきっかけとなつたカナメの蹴りが明細によみがえり、ひしひしと腹部辺りに痛みが走る。

「分かつた」

「心配はなさらなくても大丈夫ですよ。カナメには私から誤解を解きましたので、もう乱暴することはないと私は思います」

「それについては何も心配はしていない」

「と、いいますと？」

愛華はてつくりカナメから説教をされるのかと思つていたらしく、予想もしない返事に首を傾げる。

「おまえ……愛華さまがするよつとにカナメさんに言えば、カナメさんは愛華お嬢さまの事を軽蔑するんじゃないのか？ それなら別に誤解を解かなくてもよかつたと思つて、な」

「卓巳さんは私の事を心配してくれるのですか？」

「そうじやない。邸で愛華さまとカナメさんは結構一緒にいることが多いだろ？ だから気まずい関係になると嫌じゃないか。それに、嫌な事は全部俺に押し付けても別にいいんだぞ？」

「少しさは男らしいところもあるのね。けど大丈夫よ。カナメと私の関係は卓巳さんが思つているよりも深いですから」

「そうか、ならいいんだが」

「ええ」

一ツコリと愛華が微笑む。

卓巳はその笑顔が作り物だと感じていたが、突然の笑顔に少し胸がドキッとする。けど、愛華は別に作った笑顔ではなかつた。卓巳の思いがけない言葉に少し心が躍り、その結果として自分でも信じられないほど素直に笑顔ができた。

「それでは東郷さん？ 卓巳さんをお借りしますがよろしげでしょうか？」

「あつ、はい。どうぞです」

軽くお辞儀して愛華は歩き出す。

「じゃあまたな」

卓巳はそれだけを言い残し、先に歩いている愛華の後を追つ。少し歩いたところで、卓巳は愛華の隣を歩き、

「今日もお嬢さまを演じきつているな」

そう小さく呟く。

「当たり前です。いかなる場合も人の目を気にしなければ、どこか

ら噂が流れるか分かりませんからね」

卓巳は「そうか」と、ぶっきらぼうに答え軽く欠伸をしながら愛華と共に部屋に向かった。

## 15パシリ 仲直りと皮肉

「お帰りなさいませ、お嬢さま」  
卓巳と愛華が部屋に入るや否や、カナメが深くお辞儀しながら出迎える。そんなカナメの姿を卓巳は素直に見ることはできなく、視線をずらす。

カナメは無表情で卓巳をチラリと見て、直ぐに隣の愛華に視線を送る。その表情からは何かを読み取るのは難しく、長年メイドとして雇っている愛華もカナメの考えている事が分からなかつた。

「卓巳さんを連れてきたので、私は廊下で待っていますわ。お話が終わり次第声をかけてちょうどいい」

それだけを言い残し、愛華は背を向け廊下に歩み寄る。

「お嬢さま、私たちが廊下でお話しますので、お嬢さまはこひらへ」「私は廊下でも構わないわ」

愛華は立ち止まることもせずに、歩きながら言つ。そしてカナメの返事も待たずに、ドアを開けて廊下に出る。

部屋には静寂に満ちた。

カナメは無表情で、ピクリとも動かない。卓巳もカナメから視線を外したまま何かを言つ気配がなく、二人の間に沈黙が訪れる。

卓巳とカナメが話すことは少なく、邸でもすれ違いに挨拶程度だつた。それが普通の日常であり、一人が共にいれば静寂になる時間は少なくはない。それでも今は違つている。今の静寂はとてもヘビーな静寂で、少なくとも卓巳は部屋から出たい気持ちでいっぱいだつた。

「……西沢さん」

短い沈黙を打ち破つたのはカナメだつた。卓巳にとつては長い沈黙のように思えたが、実際はほんの三分程度だつた。

ビクッと卓巳の体が震える。

「……」

「お嬢さまから聞きました。私は西沢さんに悪い事をしてしまいました」と思つています」

愛華同様に深く頭を下げる。

卓巳にとつては理由がどうあれ、あんなことをしてしまったのは変わりはない。だからカナメの行動がどうにも納得できなかつた。「……俺の方こそごめん。でも……どうして誤れる？　俺はカナメさんに酷い事をしたんだぞ？」

そこでようやく卓巳はカナメの顔を見ることができた。

無表情の彼女からは読み取ることはできないが、それでも卓巳はどうことなく寂しげな顔をしているように思えた。実際のところ、カナメは本当に悪いことをしたと反省をしていて、寂しげといつりかは落ち込んでいた。

「理由の経緯は問題ではありません。それによつて西沢さんが怪我をさせてしまつた事実に責任があります」

「それこそ問題じやない！　俺がやつたことが問題で、カナメさんは何も悪くはない」

「ですから西沢さんを蹴つてしまい、あまつさえ怪我までさせてしまつた私が悪いのです」

「違う。俺がやつたことに對してカナメさんは反射的にした。だから全ては俺の責任だ」

「……分かりました。それではこいつしましょ。この件につきましては誰の責任でもない。私も西沢さんも悪くはありません」

「それなら俺ももう何も言わん」

「あと、西沢さんつて結構頑固なのですね」

不意だった。

卓巳はその時のカナメの顔が笑つたよつて見えた。いや、見えたのではない。笑つていた。まだ卓巳とカナメの付き合いはほんの少しだが、今までに卓巳は一度カナメの笑顔を見た。それがどうしても忘れられなく、そして素敵で、そして素敵な笑顔だった。

「……ああ、よく言われる」

少しの間だけ驚いたようにカナメを見ていたが、直ぐに卓巳もクスリと小さく笑う。

「それでは私はお嬢さまをお呼びいたします」

「いや、俺の方が近いから、俺が呼ぶよ」

そう言い、卓巳は部屋のドアを開ける。

愛華は部屋の前に仁王立ちで立っていた。ドアの左右には愛華のボディーガードらしき人が立っていて、その表情は困っているようだつた。

「話は済んだ。早く中に入れよ」

ドアから顔だけを出して、左右のボディーガードを軽くスルーするように言つ。

「そう、思つたよりも早かつたのね」

ぶつきらぼうに愛華は答え、卓巳が部屋に入つたのと同時にさつさと部屋の中に入る。そして愛華の特等席である無駄に「一」ージャスな椅子に足を組んで座る。

愛華の座つている椅子の前にはベッドがあり、その上に置いてある本を手に取り読む。一連の動作に無駄がなく、そんな愛華を卓巳は果然と見ていた。

「私に何か言いたい事もあるの？」

本のページをめぐりながら咳く。

「あつ、いや、別に何でもない」

卓巳は愛華が何か、具体的に言えば卓巳とカナメの事について言つてくるものと思っていた。だが、愛華は別に何もなかつたかのように椅子に座り、そして本を読んだ事に卓巳は予想外の行動に上手く言葉がでなかつた。

「そう」

それだけを言い、愛華は再び本に集中する。カナメは壁と同化したかのように部屋の隅で愛華から何かを言われるまで立つており、音らしい音はカナメが本のページをめくる音だけで、再びベビーな沈黙が部屋に流れる。

卓巳はこんな部屋にいるとどうにかなりやうと悟り、廊下に向かつて歩き出す。もちろん悪い意味で、だ。

「卓巳さん、どちらに？」

本に視線を送りながらも愛華は言つ。  
「ちょっとトイレに」

「そう」

それだけだつた。

卓巳は大きなため息をつきながら廊下に出る。ドアの左右に立っているボディーガードをチラリと見て、再び大きなため息をついた。ボディーガードは無表情まま何も言わずに立ち、その姿はできのいい人形のようだつた。

卓巳は別にトイレに行きたいわけではなく、その場から移動したい一身での嘘だ。そのため、トイレとは反対の方向を目的もなく歩いている。いや、目的がないわけではなかつた。少なからず、今の卓巳にとつても唯一の救いの場である売店に本人も気づかずに向かつていた。

入院してから何度も通つたが分からぬ道を卓巳はポケッとながら歩いている。知らない誰かが見たら、夢も希望もなく今にも屋上から飛び降りそうな人のようにも見えた。別に重い顔をしている訳ではない、むしろバカそうな顔をしている。そのせいか暇だから飛び降りようかな、とでも他の人に思わせていた。

「あれ、西沢くんじゃない？ お話は済んだの？」

卓巳は気づかない間に売店についた事に、亜里沙の声で気づいた。

「ん？ ……ああ、終わつた」

「そうなの。ほら、立つてないで座りなよ」

亜里沙は座つている椅子の隣をバシバシと叩く。けど直ぐに手に持つていた紙パックを卓巳に差し出して「これ捨てて」と促した。紙パックを直側にあるゴミ箱に捨てて、卓巳は亜里沙の隣に座る。

「ありがと。それで、どんな話をしていたの？」

「他愛もない話だよ。ってかさ、それ以前にずっとここにいたわけ

？」

「そうだよ。それがどうかしたの？」

卓巳がそう言つのにも訳があった。卓巳と亜里沙が別れてもう二十分ほど時間が経っている。そんな中で、テレビもなにも無い所にいるという事だ。あるのは固いソファと自動販売機、そして売店の小母ちゃんぐらいだ。小母ちゃんとなら話すだろうが、それでも卓巳は小母ちゃんが喋つたところといったら「ありがとうね」や「いつもありがとう」のどちらかだ。

亜里沙は不思議そうに首を傾げる。

「ここって何もないじゃん？ それなのによくいられるなって思つてや」

「ああ、私の数少ない趣味に妄想があるの。だから妄想で時間を潰していたの。これが結構面白くてね、ついつい時間を忘れていたよ」

本当に面白かったのか、亜里沙は笑顔で言つ。けど卓巳にとっては複雑な心境だった。どうにも世間一般では妄想を良く思わない傾向にある。だから卓巳もその一般にのつとつてている訳ではないが、今まで話してきた中で亜里沙がこつも楽しそうなのは初めてだった。そのため卓巳は複雑で、どうにもやるせない気持ちがあった。

「そう……それで、どんな妄想をしていたんだ？」

亜里沙はニヤリと口元を緩める。

「聞きたいの？」

「いや、別にいいや」

卓巳は背筋に嫌な汗が流れた。どことなく自分にとつて不利な話がこれから聞かされそうな気がひしひしとしたからだ。案の定亜里沙は卓巳に関係のある話をしようとしていた。

「どうせ暇でしょう？ それなら少しぐらいいいじゃない？」

「いやいや、今からお嬢に飲み物を持っていこうと思つてだな、それほど暇じゃないんだよね。いや、残念だよ。本当は凄く聞きたかつたけど、本当に残念だ」

「ごめん、嘘です。

と、卓巳は心中で呟く。

そして曲がれ右で部屋に戻る訳にはいかず、ポケットの中に突っ込んであつた小銭を取り出し自動販売機に投入。愛華の事だから市販の紅茶には文句を言うと察し、適当にお茶と炭酸飲料水、そしてジュースをチョイスした。カナメは飲み物に関してはさほどうさくはないと判断しての全く違つた三種類だつた。ちなみにジュースとは一般的に果汁100%の事を言い、本当はそれいがいをジュースとは言わないのだ。

冷たい缶を三つ持つて卓巳は逃げるようにな店を後にした。

亜里沙から眼の届かないところで大きなため息をつく。

「ああ、俺の居場所つて少ないよな」

そんなため息のオプションとして、そんな独り言も呟く。

戻った先は言つまでもなく、愛華とカナメがいる個室である。ドアの前で待機しているボディーガードを軽くスルーし、卓巳は腕でスライドドアを開ける。

卓巳が部屋を出て行つた全く同じ光景がそこにあつた。

愛華は無駄にゴージャスな椅子に座り本を読み、カナメは部屋の一部と化して立つてゐるだけで、その光景は見ていて決して楽しいものではなかつた。

缶ジュースを手に持つたままベッドの隣に供えてある机に置く。愛華は横目でチラリと盗み見るように見て、カナメは卓巳が部屋に入ってきたときに缶ジュースを手に持つてゐる姿を見ていたため、さほど視線を送ることはなかつた。

「それは何ですか？」

興味があるのか、愛華は読んでいた本を閉じてジロジロと缶ジースを眺める。

正真正銘のお嬢さまである愛華にとつて缶ジュースという代物は珍しいものだつた。とりわけ何かを飲むという時はカナメが作った

紅茶がメインで、それ以外はほとんど口にしないのだ。そのため缶ジュースは今までに飲んだこともなければ、触ったこともない。

卓巳は怪訝そうに缶ジュースを見つめる愛華を、さりげに怪訝そうに見た。

「何かの[冗談]か何か、か？」

あくまで一般人の考え方しか持ち合わせていない卓巳にとって、お嬢さまである愛華でもジュースの存在くらい知っているものだと思っていた。

愛華はムツとし、

「私は卓巳さんに、これが何なのか聞いているのです。何も言わず

に素直に答えるのが紳士のたしなみつてものではないのですか？」

「……ああ、そうだな。簡単に言えば、咽が渴いたら誰でも直ぐに飲めるように缶に飲み物を入れて自動販売機で売っている。それ以外詳しいことは俺に聞いても何も知らないから聞かないでくれ」

「なるほど、やはり庶民という種類の人は時間というものが極端にないので、じうじつ物で咽を潤すのですね」

感心したように卓巳を一瞥し、机の上に置かれていたメジャーな炭酸飲料水を手に取る。ブシュッと缶から炭酸が抜け音がし、匂いを嗅いだり、缶にプリントされている絵を見たりと興味津々に缶を見ていた。

そんな愛華の様子を傍から卓巳は見て、驚いたように目をパチクリさせ、缶に唇を近づけるものの中々飲もうとしない愛華が微笑ましく見えた。

「……飲まないのか？」

見ていても飲もうとしない愛華に憐れを切らし、卓巳が小さく鼻で笑いながら言つ。

「飲むわ。けど始めて口にするものは少し抵抗があるの」

「その気持ちは分かるが、それほどの物じゃないだろ？」

「……それもそうね」

愛華はギュッと瞳を閉じ、ゆっくりと缶に唇を近づける。いつき

に飲むのではなく、ほんのちょっと口に含んだ。

最初は炭酸特有の酸味が口に広がり、それから咽にささやかな刺激が加わる。

今までに愛華は色々な場でワインやシャンパンなどを飲んできた。そのため、特に咽には気に留めることは無かつた。それでも口に残る糖分特有のべとつきが気に食わなかつた。

「もういいわ。残りは卓巳さんあげる」

口元を軽く拭きながら再び愛華は本に視線を送つた。

そんな愛華の姿に卓巳は肩をすくめ、直ぐにカナメの方を見る。それからジュースを手に取り、大きな円を描くようにカナメに投げた。カナメは小さくお辞儀をし、愛華とは反対に一気に飲み干す。

「あっ、そうそう。卓巳さん？」

大事な用件を思い出しました。みたいな感じで愛華は卓巳を見る。

「ん？ どうした？」

「今週いっぴいでお医者様が退院してもよろしいとのことです。お早めに東郷さんにお別れでも言つておいたほうがよろしいですよ？ それにも残念ですね。可愛らしきお友達がせつかくできたのに、一人で先に退院とは」

そういういつつ悪戯っぽく愛華は笑みを見せた。

卓巳は、というと突然の退院宣言に少しあつけを取られ上手く言葉がでなかつた。

「……また大変な日常に逆戻り、か」

ようやく出た言葉が愛華に対する皮肉だつた。

## 16 パシリ 普通ではない日常に逆戻り

愛華から退院宣言をされてから卓巳が感じた体感時間は普段の倍以上スピーディで過ぎていったような気がしていた。

眼が覚めたかと思えば、気づいた頃には日が傾いている。それの繰り返しだった。

卓巳にとって些細な一日でしかなかったのに、思いのほか毎日を充実に過ごしていた。

ドラマでは退院の時に医師やら看護婦が花束を渡す光景を高確率で見る。だけどそれは重い病気やら酷い事故のあつた人に贈るお祝いで、卓巳の怪我はそれほど重い事故ではないので本当ならば花束は贈られることは無いだろう。それでも小堂家が関係しているため、卓巳にも花束が贈られた。

花束を手に卓巳と愛華、そして亜里沙が病院の出入り口に向かい合って立っている。

「ははは、西沢くんに先を越されかけたな」

亜里沙は苦く笑いながら残念そうに言つ。

卓巳は何も言葉が出なかつた。亜里沙が今にも泣き出しそうになつたから。

「……」

「卓巳さん？ 毎週日曜日は暇でしょ？ ですからお見舞いにでも行つて色々な話をしてあげなさい。もちろん東郷さんがよろしくればですが……どうですか？」

本当は卓巳に日曜だらうが土曜だらうが暇な日は一日たりともなかつた。強いて言つならば愛華なりの心遣いだ。

「あ、はい。ありがとうございます」

そんな事とは知らずに亜里沙嬉しそうに頭を下げる。

「お嬢さま、そろそろお時間になります」

力ナメが切りのいいところでやついた。愛華は腕時計で時間を確認し、亜里沙に一礼をする。

「それでは私たちは用事があるのでまたの機会に。卓巳さん、行きますよ」

それだけを告げ、愛華の後ろに控えてある車に向かう。

卓巳も軽く亜里沙に手を振り、愛華を追うように車の方に歩む。

「西沢くん！ また入院するのを楽しみに待っているからね…」

ようやく退院した人に言うような言葉じゃない事を卓巳に告げ、二ヒルな笑みを亜里沙は浮かべた。予想外の事に卓巳は亜里沙に振り返るが、悪戯っぽく笑う彼女に卓巳は鼻で笑う。

「ああ、その時はよろしくな」

そう言い、愛華同様に車に乗る。

卓巳が車に乗ると直ぐに邸に向かって走り出した。少しの間は一人とも車から見える景色に視線を送っていたが、流れていた景色、信号に拘まつたことがきつかけとなり卓巳は愛華の横顔をチラリと盗み見る。

「どうかしましたか？」

外の景色を見ながら、耳だけを卓巳に向ける。

「愛華さまはどうして東郷さんになんな事を？」

「話の意図が理解できないのですが」

つそつき。

愛華がそう言つものの、卓巳は何の話をしているのか愛華は気付いていると確信を持つていえた。お互いの付き合いは短いものの、愛華は賢い子で、頭の回転が速いと短い付き合いの中でも卓巳は分かっていた。

「そうか、なら言い方を変える。どうして俺が毎週日曜日に東郷さんの見舞いに行かないといけない？ 僕には日曜でも土曜でも愛華さまの執事として働かないといけないだろ？ 今までずっとそうだったのに、どうして今更？」

「逆に聞きますが、どうしてそんな事を私に聞くのですか？ 聞かなくても大方検討はつくでしそう？」

「あいにく俺はバカでね。愛華さまが言わない限り気づかない」

「それもそうですね」

何の迷いもなく肯定する。その事に少し俺はムッとした。

「答えなら時が解決してくれるでしょう。ですから卓巳さんは私に言われた通りに毎週日曜日に東郷さんのお見舞いに行きなさい。私がもう何も言つ事はないわ。……少し疲れたわ。あまり私に構わないで」

「……」

卓巳は愛華が何を考えているのか分からなかつた。

流れゆく景色を見ながら卓巳は大きくため息をついた。

邸についたのは病院を出て一十分ほど経つた頃だ。

卓巳と愛華が車を降りれば、玄関に向かつてズラリと頭を下げて並ぶメイド達。そのいつもと同じ何気ない光景を見た途端に、卓巳はようやく帰つて来たのだと実感した。

愛華は表面上では笑みを見せてメイド達の間を歩き、玄関から自分の部屋までもその笑みは崩す事はなかつた。それでも自分の部屋に入るや否や、さつきまでの笑みは消えうせ、腕を組みながら機嫌が悪そうにベッドの上に座る。

卓巳がこの部屋に入るのは久しぶりだったが、最後に入った時と何も変わつていない。

無駄にゴージャスなシャンデリアにキメ細かなタンス。そして卓巳専用の小汚い椅子。それ以外にも沢山の物が置かれている部屋で、どれも卓巳の知つてゐる部屋だった。

「なあ、愛華さま？」

卓巳は座り心地がお世辞にも良いとは言いがたい小汚い椅子に座り、愛華を一瞥する。

「下僕の分際で私の名前を軽々しく呼ばないでほしいわ。あと気安

く私の肌を見ないでくださいる?」

「……」

睨み付けたかと思えば、 Pruittと直ぐにそっぽを向く。

卓巳はそんな摩訶不思議な愛華の言葉に返す言葉もないため肩をすくめ、そつと小汚い椅子から立ち上がる。

チラリと愛華は卓巳を見るものの、卓巳と田代が合ったと単に再びそっぽを向く。こうなつてしまつたら手がつけられないと悟つた卓巳はホトボリが冷めるまで部屋を出たほうがいいと思い、何も言わずに静かに部屋から出る。

どこかに向かう訳もなく、卓巳は無駄に広い廊下をひたすら巡回していた。廊下ですれ違うメイドは立ち止まり卓巳に向かつて頭を下げ、掃除をしている人に限っては完全に壁に張り付き道を譲つていた。そんな今までに受けたことのない待遇について卓巳は少々居づらい気がしてならなかつた。できることなら普通に接してくれるのが何よりベストなのだが、卓巳の気持ちを知つてか知らず、卓巳の願いは無残にも届く事はなかつた。

「西沢さん、こちらで何を?」

廊下を普通に歩いていても頭を下げられたり、道を譲つてくれたりとありがた迷惑の行為に心底うんざりした卓巳は、適当に入つた部屋のベッドに仰向けで寝転がり天井を眺めていた。とりわけ広くはなく、あるのはベッドとタンス、そしてテレビに簡易のキッチンと冷蔵庫ぐらいだ。後は備え付けのシャワー室などがあり、客を泊めるような部屋でもないようと思える部屋に、だ。

そんな時、完全無欠のメイド長であるカナメの声が部屋に響く。静かな部屋にドアの開く音は聞こえなかつたのだが、色々なステータスを持っているカナメに今更驚く事はなかつた。

「お譲りに名前を呼ぶな、私を見るな……そんなことを言われて、な。部屋にいても気まずいし、適当に廊下を歩いていたらもつと場違いなような気がして……」

「それでこちらに?」

「ああ、結構落ち着ける広さだし、割と気に入つた。」  
「じゃマズイか？」

「そんな事はありません。気に入つたのでしたら好きな時にいらしてください、お茶菓子ぐらい用意できますので」

「？ こいつてもしかして……」

「私の部屋です」

さすが完全無欠のクールビューティーといったところか、表情を  
変える事無くカナメはサラリと言い、キッチンでお湯を沸かし始めた。

卓巳はそんな事とは知らずに勝手に部屋に入り、天津さえベッドに寝転がっている。それについてかなり悪い気もしたのだが、それでも体を動かすほつだるかつた。だからカナメの言葉に甘えようとベッドから起き上がる事無く寝転んだままだ。

数分してからカナメはお盆にお茶と和菓子を乗せてベッドの脇にある小さな机に置くと、そつとベッドの脇に座る。

「お茶と和菓子を持つてきたので、どうぞ召し上がってください」

「ああ、ありがとう。……ねえ、カナメさん？」

「どうかなされましたか？」

「どうして俺なんかに敬語を使うんだ？ 自分で言つのも何だけど、俺に敬語を使うほどの人材じゃないと思つ。それに勝手に人の部屋に入った俺にどうして怒らない？」

言つていて少し虚しくなつた卓巳はカナメに背を向けるように寝返つた。

「お気を悪くされたのでしたら謝罪いたします。ですが、私はこれが素なのです。私が怒らない件についきましては、卓巳さんだからです」

「俺だから？」

「そうです。他の誰かが勝手に部屋に入つていたのならきっと私は怒つていたでしょう」

「使用者の位つて奴ですか？」

まだ。そう卓巳は思つた。

「それは違います」

「だけどカナメは否定した。

「卓巳さんはお嬢さまに、そして私にも優しく接してくれます。それに自分の地位から誰かに押し付けることなく、それでいて皆に気配りができる優しい方です。だからです」

「……変な事を言つてごめん」

卓巳は考えることを途中で止めて、遠心力を使って体を起こす。ひょいと卓巳は手を伸ばし、机の上に置かれていた和菓子を摘まんで食べる。そして口の中に残る和菓子を流し込むよつにお茶を一気に飲み干した。

「美味しかったよ。ありがとうございます」

「いえ、私は何もしてはおりませんよ」

卓巳は軽く肩をしかめて小さく鼻で笑う。そしてベッドから立ち上がり軽く伸びをする。

「またいつでもお越しになつてください。私はいつでもお待ちしておりますから」

ドアに向かつて歩き出す卓巳の背中にカナメは落ち着いたよう言つ。

「ああ、またさせちまいます。その時はよろしく」

それだけを告げて卓巳は廊下に出た。

中々いい時間を過ごせたと卓巳は思い、廊下から見える中庭に視線を送る。

中庭には綺麗に切られた木、そして誰が育てているのか分からぬが数々の花が花壇に植えられていた。そのプチ庭園を少しの間眺めながら廊下を歩く。

「西沢さま？」

プチ庭園から心が和んでいる時、透き通る心地のいい声がした事に卓巳はビックリして振り返る。

そこにはメイド服を着込んだ一人の女性が不思議そつに立つてい

た。

愛華とカナメは美しい美人なのが、卓巳に声をかけた女性は幼く可愛らしい顔をしていた。どことなく卓巳に似ている。

「えつと……君は？」

「あっ、すいません。私つたらつい」

アハハと苦く笑いながら、女性は頭を下げる。

「頭を上げてください。別に俺は何も気にしてないし、できれば普通に話してもらつてもいいですか？　あまり敬語とかで話されるのは慣れていないので」

「いえ、私はメイドで西沢さまは執事です。それだけはできません」「ん~、なら執事の俺が普通に喋つてほしい、そうお願ひします。それでもダメですか？」

「うう~……」

女性は少し唸り、考え始める。

「……分かりました。西沢さまがそつおつしゃるなら普通にお話しですね」

渋々女性は了解したものの笑顔で答える。

「私の名前は朝倉空です。空と書いてクウつて呼びます。気軽に空つて呼んでくださいね。それで西沢さまは中庭に興味があるのですか？」

「できれば西沢さまつて呼ぶのも止めてもらつてもいいですか？」

「俺の事も気軽に卓巳つて呼んでください」

「あっ、はい。……なら、卓巳くん。卓巳くんは中庭に興味があるのでですか？」

ちよつと頬を赤らめて空は俯きながら言ひ。別に空は卓巳に特別な感情をもつているから頬を赤らめているのではない。強いて言つなら異性の人を名前で呼ぶのは初めてだつたからだ。

「そうだね、結構素敵なか中庭だね。まあ、今始めて中庭の存在を知つたけどね」

「そうなのですか。ここの中庭を任せているのは私なのです。な

ので、いつして中庭を見ている卓巳さんを見ていたら「でもお話ししてください」

そんな感じで中庭について卓巳と空は楽しく話していた。季節によつてどの花を植えているのとか、ここで一緒に作られているハーブは料理に使われているだとか、そんな他愛もない話をしていた。卓巳が愛華の部屋に戻ると、まだ機嫌が直つてないのか愛華は卓巳と目を合わそうとはしなかった。それでも卓巳は心が落ち着いていたからイラつくことなく、大人の対応で愛華を見守りながら軽く話しかけた。

## 17パシリ お見舞い

田曜日。

卓巳にとつて田曜日とは仕事が唯一休みになつた日であり、以前の入院で友達になつた亞里沙のお見舞いに行く曜日だ。それについてはあまりノリ気じやなかつたのだが、愛華の命令で渋々といった感じでお見舞いに行く事になつた。

卓巳が亞里沙のお見舞いにあまりノリ気じやないのには理由があつた。

第一に私服は実家に置いてあるため、着ていく服が仕事用だけである。その格好を知り合いに見られるのはとても恥ずかしいためである。

第一に卓巳の退院の時に見せた悲しい顔、そして何より亞里沙自身が抱えている病気。短い付き合いだつたとはいえ、少なからず卓巳は亞里沙の病気が普通の病気ではない事は感づいていた。だから何を言つていいのか分からぬのだ。これが本当の理由なのかもしれない。

気持ちではそう思つてゐるにしろ、卓巳は病院に向かつてゐた。愛華の行為により卓巳は車で送つてもらえる事になつた。

車内の中では愛華と亞里沙は一度ほどしか顔を合わせていないのに、どうしてこいつまでするのが。それについて卓巳はずつと考えていた。

考えていたのはいいが、結論にたどり着く前に病院についてしまつた。

卓巳は大きくため息をつきながら、運転手に軽くお礼を言つて車から出る。

眩しく輝く日光を遮るように手を細めながら手を当て、再び大きくため息をつく。

「わあ、本当にきてくれた」

卓巳が亜里沙のいる病室に入り、カーテンで閉ざされた亜里沙のスペースに入り込むなり、卓巳を待ち構えていたように胸の前で手を打つて喜んだ。

そこまで喜ばれるとは当然思つてもいない卓巳は少しだじろぐ。亜里沙は卓巳が思つていた以上に平氣だった。卓巳が退院した時は悲しかつたものの、それでも時間が解決してくれた。そして自分のためにお見舞いにきてくれた事に対し、心の底から嬉しいと思っている。

卓巳はその場に突つ立つてゐる訳にもいかないため、外来用の椅子に腰を下ろす。もちろんこの前まで卓巳が入院していた個室にあつた無駄に豪華な椅子では断じてない。『ぐぐく普通の緑色をした固く背もたれのない椅子だ。

「取り敢えずこれ」

卓巳は素つ気なくそれだけを言い、邸を出る時に豪華から渡されたフルーツの詰め合わせセットを机の上に置く。

亜里沙は卓巳からそういうった物をもらえるとは全く思つていなかつたため、嬉しさ半分と悪い気持ち半分があつた。かといって悪い気持ちがあつてもお見舞いの品がもらえるのは嬉しい。亜里沙はフルーツが入つたバスケットを嬉しそうに触る。

フルーツ詰め合わせセットは實にベタなのは言うまでもないが、バスケットの中に入つてゐる果物はベタでは断じてない。それどころか金持ちの力をフルに發揮してゐるのか、亜里沙が知つてゐる果物はあまりなかつた。

「わあ、嬉しいな。ありがとう、西沢くん！」

亜里沙は果物を一通り確認してから手軽な果物を手に取る。実を言えば亜里沙は普段ミカンかリンゴしか果物は食べていない。そのため手に取つた果物は良く知つてゐるリンゴだつたりする。あまり果物に詳しくない亜里沙が無難に美味しいリンゴをチョイスした。

「お嬢からの贈り物だ」

「お嬢さまにもお礼を言わないよね」

「別にお嬢だからいいって。それよりリンゴの皮をむかなくていいのか?」

卓巳は別にリンゴが凄く食べたい。そうは思ってはいないのだが、亜里沙が包丁を片手に話しているものだから危なつかしくて見ていられなかつた。

亜里沙は忘れていたかのように一瞬体を震わせる。そして手馴れた手つきで包丁でリンゴの皮をむき始めた。病室に果物ナイフがあるのは取り敢えず伏せておくとして、亜里沙の包丁さばきは本当に上手で皮をむいているだけなのに卓巳は見入つた。

リンゴの皮をむき終わつたところで食べやすいようにリンゴをカットし、何時の間にか机の上に置かれた皿の上に置いていく。

何かをやり遂げたように亜里沙はリンゴが置かれている皿を卓巳に差し出す。卓巳は一つをヒョイッと手に取り食べた。

「甘くて美味しいな」

それ以外の感想を言えるほど卓巳に実況のセンスはない。それでもこのリンゴは実際に甘くて美味しい、卓巳はそう思つた。実を語つとところ卓巳はあまりリンゴを好んではいなかつた。それでもこのリンゴは別格の美味しさを放ち、お見舞いの品と忘れてひょいひょいリンゴに手が伸びようになつた。

「あっ、本当に甘くて美味しい」

感動したように亜里沙も卓巳同様にリンゴに夢中になりつつあつた。

「そういう、前から聞いつけと思つていたけど、執事つてどんな仕事をしているの?」

リンゴの話で花を咲かせるのは別にいいが、これだといささか若い二人には場違いと言える話かもしれない。そのため思い出したように亜里沙は前から聞こつと思っていた質問を卓巳に投げかける。

「東郷さんが思つてはいるような仕事だよ。一日の予定を言つたり、

一緒に学校に行つたり、お嬢の世話が俺の仕事、「

「けどそれだと西沢くんが遊びたいと思っても遊べないよね?」

「仕事だからな」

「それって寂しくない?」

「寂しくはないけど、青春を無駄にしているとは思つね」

本音だ。卓巳はまだ十代の半ばであり、少し前まで働くのは当分先と思っていた。まだまだ時間に余裕があるものだと思っていたため、あまり青春ドラマみたいな事は何一つしていなかつた。それにいざ働くとなれば青春の舞台もなければ時間もない。あるのは終わりのない仕事だけだ。

「……」

亜里沙は寂しそうな顔をした時に、卓巳はようやく自分が地雷を踏んだのだと悟つた。

「今までのないのだが、亜里沙は卓巳以上に青春とは遠い生活を送つていて。それどころか病院の敷地から出ることさえもあまりない身だ。そのため卓巳の言葉が深く胸に突き刺さつた。

「アハハハハ。私の体が弱いから仕方ないよね」

亜里沙は無理に笑う。

ズキリと卓巳の胸に罪悪感が生まれるが同時だった。

「……ごめん」

「誤らないでよ。本当の事だからさ」

「けど……」

「もういいの。この話は終わりにして、面白い話をしようつ

\*

\*

帰りの車の中で卓巳はため息しか出でこなかつた。

お見舞いは病院の食事の時間になつたため、卓巳は無理やり話を切り上げた。亜里沙自体はまだ話し足りないのか、残念そうな顔で卓巳の背中を見つめていた。

「……めんどくせえ」

流れる景色を見ながら卓巳は呟く。

何が面倒なのかは言つた本人にも分からない。ただ胸の中がムシヤクシヤとしていた。そのムシャクシヤがどうにも気持ちが良いものとはいえたかった。

それでも愛華がいる邸につくまでずっとムシャクシヤした気持ちうごめいていた。

毎週日曜日の午前中に亞里沙のお見舞いをするのがいつしか卓巳の口課となっていた。

何度かお見舞いに行き、その都度卓巳は心のどこかでムシャクシヤする気持ちがあった。別に亞里沙が悪いわけではない。悪いのはそう思う卓巳の方だ。

それについて卓巳も罪悪感でいっぱいだが、ムシャクシヤする気持ちを抑えられなかつた。

今日もまた午前中に卓巳は亞里沙のお見舞いをし、午後は休息がないに等しいほど愛華にじこかれていた。

身も心も疲れ果てた卓巳は唯一の安息地であるカナメの部屋に転がり込んでいた。

「どうぞ」

人の部屋だというのに卓巳はマナーという言葉を知らないのか、はたまた疲れ果てて一瞬だけマナーという言葉を忘れたのか、カナメのベッドに寝転がつている。

カナメはベッドの横に備え付けられている机に紅茶が入ったティーカップを一つとクッキーが入っているバスケットをおく。

「今日は紅茶とクッキーにしてみました。お口に合わなければ気にせずにお残してください」

卓巳は体を起こしてベッドに座り、少しこのクッキーを口に放り込む。

口の中にしつとつとした食感と甘い味が口に広がる。簡単に言えば絶品だった。

あまり紅茶に詳しくない卓巳でも、ティーカップから香る紅茶の匂いから本格的に作ってくれたのだと思った。そして口に一口含めば、口中に紅茶の味が広がる。

「……すいません。蒸らし時間が足りなかつたので、少し味が濃い

ですね」

紅茶というのはティーポットの中で葉がジャンピングするの言  
うまでもなく大切なのが、それと同時に紅茶の種類一つひとつに  
蒸らす時間が決まっている。その時間通りに蒸らさなければ味が濃  
かつたり薄かつたりする。それもまた紅茶を淹れる中で氣を配らな  
ければならないことなのだ。

卓巳はそこまで紅茶を飲んだことがないため、多少味が濃くても  
気にする事はなかった。

「あ～、俺はこれぐらいが好きですよ」

社交辞令程度に庇う。

「そうですか。では次回はもっと美味しい紅茶をお出しできるよう  
に頑張ります」

「ほじほどに頑張つて」

そう言って多少熱いが、卓巳は紅茶を一気に飲み干して再びベッ  
ドに寝転がる。

「一つだけ質問してもいいですか？」

卓巳は見慣れない天上を見上げながら言つ。

「答えられる範囲ならお答えします」

「最近のお嬢は俺に厳しくないですかね？」

「厳しいという事は西沢さんに期待をしているのだと思います。少  
なからず愛華お嬢さまは西沢さんを悪いように思つていないと私  
は感じています」

「そうですか……どうしてお嬢は俺を執事にしたのかな？」

「それについては私も疑問に思つていました。愛華お嬢さまと西沢

さんは以前からお知り合いだったのですか？」

「いや、俺が知る限りでは昔会つた記憶がない。それ以前に金持ち  
の知り合いなんて俺にはいない」

「ではどうしてでしょう？」

「さーね、金持ちの考える事は俺には分からん。まつ、俺に分かる  
事があるならお嬢は相当の変わり者つて事ぐらいだけだ」

「ちなみに言いますが、この部屋で行われている会話も愛華お嬢さんが聞かれていますよ。」

カナメがそういう終えた途端に、部屋に備え付けてある電話が鳴る。

「……まるで鬼だな」

卓巳は大きなため息をつきながら言つ。

電話の相手はいつも無く愛華で、電話に出た卓巳に「今すぐ部屋にいらっしゃい」と单刀直入に言つて電話を切った。

そして卓巳は部屋に不釣合いで小汚い椅子に座り愛華と向かい合つている。

「私が何を言いたいのか分かりますよね？」

「サッパリ」

卓巳は何食わぬ顔で言つが、何を言いたいのかは察している。

そんな卓巳の態度に愛華はため息をつく。それからポケットからテープレコーダーを出すと、再生ボタンを押す。

テープレコーダーから先ほどの卓巳とカナメのやり取りが繰り広げられるが、卓巳は顔色一つ変えずに腕を組んで聞いている。

「それは俺の影武者だ」

全てを再生し終わつたテープがまき戻されているBGMを聞きながら卓巳は適当な事を言つて椅子から立ち上がる。

「そう、ならその影武者とやらをこの場に連れてきてちょうだい」

「……愛華様は俺に何をさせたい？ 最近それについて疑問に思つてしまふがいい」

「あら、影武者はもういいの？」

「……」

皮肉たっぷりの笑みを浮かべながら言つ愛華を卓巳は無言のまま見据える。

やれやれといった感じで、愛華は肩をすくめる。

「……私はまだ執事がほしかつただけよ。それ以外に何もないわ」

「なら俺は来週のお見舞いが終わつた後に執事を辞めさせひがつ

……」

卓巳は面倒くさこと思えてきた。

「の執事としての仕事も、愛華を相手にするのも、やり口は無理やりお見舞いに行かされている亞里沙の事も。全てが面倒で仕方がないような気がしてきた。

卓巳は愛華にもつと違つた答えを求めていた。だが、その答えが普通すぎて、その普通が卓巳にそういう気持ちは芽生えさせた。もちろんその事に愛華だが、言つた本人さえ気づいていない。ただ面倒くさい。それだけの気持ちが卓巳に芽生えるだけだった。

数秒愛華は言葉を発することができなかつた。卓巳に言つた意味が突然すぎて理解できなかつたからだ。

そんな愛華とは正反対に卓巳は実に面倒くさひがつて愛華に背を向けて歩き出す。

「……辞めるつて、その意味が分かつているのー。」  
そこによつやく愛華は我に返り、卓巳の背中に叫ぶ。

「父さんの会社は好きにしむ」

「本当にそれでいいの！？」

「ああ、それでいい。後は勝手にしてくれ」

卓巳はドアを開けて廊下に出る。

もちろん愛華は「ちょっと待ちなさい」と卓巳の背中に叫ぶもの、当の卓巳は振り返る事は無かつた。

愛華の部屋のドアによしかかりながら卓巳は遠く田で廊下を見る。

「……結局俺は……」

そこまで言つて卓巳は黙り込んだ。

一度田をつぶり、目的がある訳もなく、ただ一步前進する。

「……今までの生活に戻れるのか」

そう最後に呟いて卓巳は当ても無く歩き出した。

## 19 パシリ　自由の身

卓巳が愛華に「執事を辞めさせてもらひ、「わづらつてから、約束の日まではあつ」という間に時間が流れた。

以前の生活に戻れる。そう分かっていた卓巳にとって愛華の執事としての残りの生活は実に面倒であつたが、それでも仕事だけはこなしていった。

そして日曜日の十一時頃。

恒例となりつつある亜里沙のお見舞いに今日もまた卓巳はきていた。

これが最後のお見舞いになるとは亜里沙は知る由もなく、この日もまた平凡な話を繰り返していた。

「ちょっと、聞いているの？」

無駄に固い椅子に座りながらボンヤリと考え方をしていた卓巳は、いじけたような亜里沙の声で現実に戻される。

卓巳はどのタイミングで「もつお見舞いにはいられない」と、告げるか考えていた。

タイミングを誤つてしまえば、亜里沙は悲しい思いをする。

そのため言い出すタイミングで少しでも悲しげに思ってさせないように卓巳は考えていたのだ。

それでも何か良い案がある訳でもなく、亜里沙に不快な思いをさせるだけだった。

「あ、ああ。ちゃんと聞いていたよ」

バカ正直に「考え方をしていたから聞いていなかつた」とは言えんはずもなく、卓巳は苦笑しながら言つ。

ベッドの横に置かれている時計で時間を確認すると、そろそろ昼食の時間になろうとしていた。

結局のところ、一時間程度ここにいたのだが、亜里沙との話の内容が記憶に無く、切り出すタイミングも思いつかない、最悪なお見

舞いになる形となつた。

「今日はちょっと変だよ？ 何か悩み事でもあるの？」

付き合いと共にした時間は短いのだが、それでも卓巳の異変に亞里沙は気づいていた。その異変に最初に気づいたのは、ベッドの囲むようにあるカーテンを開ける時からだつた。

亞里沙は病院に入院し、そのせいで毎日暇な時間を持て余していた。その結果として、亞里沙は人間観察を暇つぶしにしていた。おかげで亞里沙はそういう変化に少し敏感になつていた。

思ひがけない言葉に卓巳は無理やり笑みを見せて首を振る。

それでも亞里沙が感じている異変は薄れるはずもない。それどころか無理をしているのがハツキリと分かるほどだつた。

「…… そうなの」

亞里沙はそれ以上の詮索はしなかつた。

あまり人の心の置くまで土足で踏み入れる。または異常に詮索するのには誰だって嫌で、嫌われる対象だからだ。もちろん全ての人があれう対象とするのではない。それでも多数の人はその対象と見るだろつ。

「ああ…… そろそろ！」飯だろ？

「もうそんな時間か。やつぱり友達と話していると時間が経つのが早いね」

「……」

卓巳は胸にズキリとするものがあつた。

亞里沙にとつては無意識からの言葉だつたが、それでも「友達」その言葉を聞いた途端に卓巳の胸には罪悪感が生まれた。

そう、卓巳はその「友達」と別れる最後の言葉を言うのが今日の目的だつた。だが、亞里沙の口から「友達」と聞かされた。

卓巳は悩んだ。

本当に別れてもいいのか、俺は友達を裏切つてはいけないのだろう

か、と。

否。

別にこのままお見舞いを続けてもいいじゃないか、愛華とは何も関係ない、俺がしたいようにすれば何も問題は無い。

別れや裏切りの直後に亜里沙との関係を続ける思いが卓巳を支配する。

「そうだな」

先ほどは何も言えなかつた卓巳だったが、気持ちが楽になると自然に口元がほころぶ。

そうだ、このままでいい。何も問題はない。

そんな事を思いながら卓巳は椅子から立ち上がる。

「また来週くるよ。……あと、悪かったな」

謝罪の言葉を最後に付け足す。

この謝罪は今日の態度と卓巳が一時でも「友達」と別れようと黙った気持ちからの謝罪だつた。

亜里沙はどうして謝られたのか知るはずも無く、怪訝そうに卓巳を見る。それでも、まあいいか、そつお気楽な言葉で見るのを止める。

「分かつたよ。また来週楽しみだよ。その時までに面白い話を用意しておいてね」

「ああ」

卓巳が相槌を打つのと同時にカーテンが開かれ、看護師が昼食を持つてくる。

卓巳は看護師に軽く会釈をし、病院を後にする。

亜里沙のお見舞い後、たつた今から卓巳ははれて自由の身となつた。それでも本人に自覚は無い。自覚が芽生えるとするならば、実家に帰り、以前のように学校に通う。それを経験して初めて自覚が芽生えるだろう。

兎にも角にも、卓巳の気持ちはまだ執事だった。

ようは一刻も早く執事のトレードマークである服を脱ぎ、私服に着替える。自覚とは別に、そこで初めて愛華の執事を辞める事になるのだ。

卓巳は迎えの車に乗り込み、窓から見える流れる景色を呆然と見つめる。

車の中では愛華にどういった別れを言おうか考えていた。無難に「じゃあな」が一般的かもしないし、もう会わない事を前提に皮肉の一つでもプレゼントをするのもよし。何にせよ、何も告げないで別れるほどの仲ではないのは確かだ。

頭の中で色々な事を考えているうちに邸に着く。

車は邸の玄関に停められる。運転手の心遣いだった。

卓巳はお礼を言つてから車を降りる。

すれ違うメイドからは道を譲られ深く頭を下げる。まだ愛華と力ナメ以外は誰一人として卓巳がここを去るのを知らない。

それでも日常は何一つ変わらない。

卓巳という人がいないだけで誰かが凄く困ることもなれば、誰かが凄くガッカリすることもない。そう思えば気が楽だった。ゆっくりと歩く卓巳に最初に目に入った知人は朝倉空だった。

空は中庭を任せているメイドである。

格好も仕草もメイドそのものだが、それでも花に対する顔つきは真剣そのものだつた。別に愛華に中庭を任せているからこれほどに真剣になるのではない。空は花に限らず、何かを育てるのが好きだつた。だからこそ中庭を任せられた今は毎日が充実している。卓巳は一瞬だけ話しかけるが、仕事の邪魔をしないようにその場を去るか考える。が、今日でなにもかも終わりのため、卓巳はゆっくりと空に近寄る。それと同時に車の中で飲もうと思つて病院で買った缶コーヒーを取り出す。

「そこいら休憩でもいれないか？」

ピトツと空の頬に缶コーヒーを当てる。

買ってから相当な時間が経っているため、冷たくなければ熱くも無い。それでも元からの缶の冷たさからビクッと体が震える。

「ひやう！ た、卓巳くん！？」

驚いたように振り向き、その後に頬を赤らめて怒ったように言

う。

「悪いわるい。せひ、缶コーヒーあげるから休憩でもどうだ?」  
空は「ありがとう」そう言つて卓巳から缶コーヒーを受け取る。

一人は中庭にあるベンチに腰掛けた。

「毎週日曜日の午前はいつも何をしているのですか? 午前だけ姿が見当たらないのですが?」

「ん? ああ、友達のお見舞いだよ。朝倉さん」そ日曜なのに仕事を?」

「いえ、今日は休みですが、お花さん達のお世話をありますので」「偉いね。俺なら休みの口まで仕事とかしたくはないな。まつ、それも今日まだけどね」

「えつ? それってどういう意味ですか?」

「今日で執事はおしまい。はれて自由の身を」

「……愛華お嬢さまは承諾したのですか?」

「どうだう」

卓巳は愛華に言つた時の事を思い出す。

どうにも無理やりで、愛華の言葉を聞く前に部屋から出た。だから愛華が承諾したのかは何も分からない。それでも、だ。卓巳は今日限りでこの邸から出るつもりでいる。愛華が何て言おうが卓巳の気持ちは変わらない。

あさつての方向を見る卓巳を空は怪訝そうな顔で見つめる。

「お譲の返事を聞く前に俺は部屋から出たからな」

少しの間を空けてそう卓巳は呟く。

「……そうですか。とても残念です」

「どうして? 別に俺がいても何も変わらないだろ?」

「それは違います。愛華お嬢さまはきっと寂しいと思つていますよ。それに西森をまだつて卓巳くんがいなくなると寂しいと思います。

二人だけじゃなく、私もそうです。とっても寂しいです」

「……」

卓巳は何も言えなかつた。

ただ呆然と俯いている空を見つめる。

卓巳本人は気づいていないが、心の奥で誰かにそう言つてもらいたいことを望んでいた。愛華に辞めると言つた時も、だ。それの引き金となつたのは愛華の「ただ執事がほしかつただけ。それ以外に何もない」その言葉だつた。もしその言葉が偽りでも卓巳を気に欠けた事を愛華が言ついたら卓巳が辞めるとは決して言わなかつただろつ。

結論として卓巳は誰かに必要とされたかつたのだ。

そして今。

卓巳は空に引き止められた。

空の言葉で卓巳の心は少しだけ揺れる。それでも愛華の言葉を思い出せば、空の言葉は意味の無い言葉となつた。

「やつ言つてくれるのは朝倉さんとカナメさんだけだよ。ありがとう」

そして卓巳はベンチから立ち上がる。

「まつ、これからも頑張つて中庭を綺麗にね。そうすればきっと良い事があるよ」

それだけを言い残して卓巳は中庭を後にする。

もちろんだが、卓巳の背中に空は言葉を投げかけた。だが、卓巳は手を上げる以外に何も答えなかつた。

## 20パシリ 気づく気持ち

空に別れを告げてから卓巳が次に向かつた先はカナメのところだつた。

カナメの部屋の前で卓巳は立ちすくんでいた。

ノックをするのもドアノブを回すのも容易いのだが、卓巳はカナメと何を話せばいいのか分からなかつた。

カナメは以前から卓巳が執事を辞めることを知っていた。そして空と同じような事も言つていた。だからこそ、だつた。

部屋の前で立つていると、突然ドアが開かれる。

もちろんだが、部屋の中。ドアノブを手にとつて卓巳を見ているのはポーカーフェイスのカナメだつた。

カナメの内心では早く部屋に入らないのか、そう思つていたが中々ドアが開かれる様子がなかつたため、痺れを切らしてカナメ自らがドアを開けたのだ。

卓巳は驚いたような顔をするが、カナメだから。その一言で驚きをなくす。

「ど、どうも」

「立ち話はなんですから中にどうぞ」

カナメはそれだけを言つて先に部屋の中に入つていく。卓巳もカナメの後を追うように部屋の中に入り、ベッドに座つた。

卓巳がカナメの部屋に訪れるのは今までに何度かあつたが、それでも今の卓巳はどこか落ち着きが無かつた。

カナメは既に淹れていた紅茶をお盆に載せてベッドの横にある机に置くと卓巳の隣に座る。

「お気持ちは変わらないのですか？」

卓巳が口を開こうとしなかつたため、カナメが先に問う。

最初は何を言つているのか卓巳はカナメの言つた事の意図が掴めなかつたが、それでも今日の事で分かつた。

カナメが言つてゐる事、それは執事を辞める気持ちは今も変わらないのか。ということだ。

「ああ、俺は今日で辞める」

卓巳の気持ちは変わらない。いや、搖るがないのだ。  
もう卓巳はその答え以外は持ち合わせていなかつた。

「それは残念です」

何事にもポーカーフェイスに対応しているカナメも今もそのポーカーフェイスを崩さず言つ。それでもカナメは内心とても残念で仕方が無かつた。できることなら以前の生活がもつと続けばいい、とまでも思つていた。

カナメと付き合いが短い人なら言つてゐることと表情が矛盾していると思つても仕方が無いのだが、それでも卓巳にはカナメの想いが伝わつていた。

基本的に卓巳は愛華とカナメと共に行動をしていた。そのため愛華ほどではないが、卓巳はカナメの想いが薄つすらと読み取れるようになつていたのだ。

「……ねえカナメさん？」

卓巳は膝に肘を乗せ、手のひらで顔を覆う。突然その行為に走るのには少なからず意味がある。

「俺は最後にお嬢に会うべきなのか？　それともこのまま何もしないで帰るべきなのか？」

そう、卓巳は結局今日の今まで卓巳がこの邸を出る理由も意味も何も問われず、さらには卓巳が辞める事をあたかも知らないかのように以前と同じように振舞つていた愛華と最後に会うべきか、それともこのまま自然消滅かのようになんか、普通の人ならば何も悩むほどの事でもない事を卓巳は以前から悩んでいた。

「私はやはり会うべきなのだと思います」

「どうして？」

手で顔を覆う卓巳にとつてカナメの表情は見られない。仮に見たとしてもポーカーフェイスのカナメから意図を掴むのは非常に難し

いだろ。そのため耳だけをカナメに向ける。

「強いて言つならば一時であれ家族だつたからです」

「家族？」

「ええ、家族です。住み込みで働いている私が雇い主である愛華お嬢さまを家族と思うのは出すぎた真似だと承知しております。ですが、出すぎた真似と思つても心の奥では家族として共に生活をしている事と思つています。それが愛華お嬢さまにとって迷惑な事でも、メイドとしてはならない事でも私の思う気持ちは私の自由です。私がどう思つても誰にも迷惑をかける事はありません。……すいません。上手くまとめられませんが、要するに私が言いたい事は……」

「一時であれ家族として思えたお嬢と最後に会つのは当たり前。そ  
う言いたい訳ですね?」

卓巳は力ナメの言葉を遮るよつて言ひへ。

その時の卓巳は先ほどのように手で顔を覆う姿はしていなかつた。組んだ手の上に顎を乗せ、横目でカナメを見ていた。

「その通りです」

「……俺はお嬢を家族だと思った事は今の一  
度も無い」

「それでは会わないと？」

「いえ、そうじやありません。確かにお嬢を家族と思った事は一度

も無いのは確かです。ですが、一瞬でも大切な人だと思えた人に別れを告げるのは当たり前ですね。結局俺は逃げたかつてのよう

木を售りに三ヵ月で木 終局作に達に成功する。成功の

ようです。そう言つからには今までその事に気づかないで、たつた今その事實を知つたかのようなのだが、その通りだつた。卓巳は今い今まで「逃げたかつた」そうとは思つてはいなかつた。それに気づいたのはカナメが「家族」と言った時だつた。

愛華の脅迫に似た形で執事となつた卓巳にとって日常を十足で踏みにじり、それだけでは物足りず平穏を蹴散らしたといつても過言ではない愛華から逃げたいと思うのは十分すぎるぐらいの理由だ。

だがその気持ちは物理的なものではない。むしろそれでは何の解決にもならない。

そう、卓巳が逃げたかったものは気持ち、精神的な面だ。

愛華が卓巳の平穏な日常を奪つたのは連れられない事実で、変えられない事実だ。もちろんその事に対しても卓巳は今更何も言わない。だが、卓巳が以前に愛華に対して自分を選んだ理由を聞き、その答えとして「執事がほしかった。それ以外に何もない」そう返ってきた。愛華の言つた事は本音かそうでないのかは卓巳には分からない。だが、そう言われた以上卓巳にとって今まで少なからず慕つていた人に裏切られた。そう思っても仕方が無かつた。それが愛華から逃げたいと本人が気づかずに抱いていた思いだつた。

「愛華お嬢さまですか？」

「自分の気持ちからです。俺はお嬢から次に何を言われるかを知るのが恐かつたのかもしれません」

「恐い？　お言葉ですが愛華お嬢さまは誰かを傷つけるような事は決して言いません」

「そうかもしだせんね。ですがそれは一般的なものです。現に俺はお嬢から『執事がほしかった。それ以外に何もない』そう言われた時にとても悲しかつた。空しかつた。今までしてきた事は何だつたのか？　そう思えるぐらいにね。だから俺はこれ以上何かを言われる前にこの邸から出たい気持ちが強すぎて結果としてお嬢から逃げたい、そう思いました」

「ならこのまま愛華お嬢さまに会わないのですか？」

「いえ、それはさつきも言つたように会いますよ」

「ならどうしてそんな事を私に言つたのですか？」

「そうですね、強いて言うならカナメさんだからですよ。この部屋に知らずに入つた時にカナメさんは俺に『優しい方』と言つて怒りはしませんでした。それと同じですよ。カナメさんも優しすぎる方だからこそ俺は本音を言おうと思いました。まあ今の会話はお嬢に筒抜けなので何を言われるか分かつたものじゃないですけどね」

そう言って卓巳は苦く笑つた。

卓巳は机に置かれたティーカップをヒョウイッと手に取ると一気に飲み干す。

「とても美味しかったです。それじゃあ俺はもう行きます。カナメさんも元氣で」

それだけを告げると卓巳はドアの方に歩き出す。燐華に別れを言いに。

「あっ、やうやう。中庭で花の手入れをしてくる朝倉さんにもう少し樂をわせてあげてください。彼女休みの日とか関係なしに花の手入れをしています。それだけ覚えといてください」

ドアノブを回した時に卓巳は思い出したように言つ。

「ええ、朝倉さんにつきましては私も以前から何度も樂をさせてあげたいと思っていましたし、それにつきましては任せください」「ありがとうござります」

「いえ、卓巳さんこそお元氣で」

卓巳はカナメの言葉を笑顔で返して部屋を後にした。  
閉ざされたドアに卓巳はよしかかり、大きなため息をつく。

## 21パシリ 閉ざされたドア

卓巳から執事を辞めると告げられてから愛華は今に至るまで卓巳の気持ちを尊重し、このまま送る事を決意していた。

が、その日はあつという間にやつてきて、日が一日ずつ削られるごとに愛華は自己嫌悪を抱いていた。

愛華にとつてこれほど素直になれない自分が憎く、おぞましく思えた瞬間は無かつた。

それでも気まずい関係のまま別れるのを愛華は嫌っていた。それは遠い昔に喧嘩別れした卓巳との出会いが原因となる。

そう、卓巳と愛華は昔出会っていた。

卓巳はその事は何も覚えていない。だが愛華は覚えている。何の因果があるのか分からぬが卓巳と愛華は出会っていたのだ。

二人が出会ったのは四歳の頃。

そこまで幼いのならば卓巳が覚えていないのは当たり前で、それは卓巳以外の人も覚えていないだろう。仮に覚えていたとしても写真のようなワンシーンを覚えているだけが精一杯だろう。人の記憶ほど曖昧なものはないのが現状だ。

だが愛華は違つた。

世の中には例外という言葉がある。まさに愛華は例外だった。

一般的に長い年月を経た記憶ほど真実と異なり自分に都合のいいように書き換えられる。が、心に傷ができた記憶は長い年月が経つても覚えていられる。傷をつけた本人にしてみれば忘れられる対象ではあるが、逆に傷を受けた本人にしてみれば些細な事でも記憶として残る。人間はそこまで強い生き物ではないからだ。強いて言うならばモロイ箇所を突けば容易く崩れ落ちるという事もある。いかに入からどう思われようが人はそれほどモロク、壊れやすいものなのだ。

とにかく一人の間に何らかの問題が生じ、一方は何も覚えていな

し、もう一方は明細に覚えている。これを皮肉以外にどういづべきなのか愛華は知らない。

何はともあれ愛華もまた卓巳同様に悩んでいた。

今しがた卓巳とカナメの会話を聞き、直ぐに卓巳が愛華の部屋に訪れるのは真実だ。だが、愛華もまた卓巳に何を言つていいのか分からなかつた。

愛華は無駄にゴージャスな椅子に座り、目の前に置かれている部屋には不釣合いな朽ち果てた椅子を見つめながら考える。

仮に愛華が「体には気をつけて」と言うとしよう。が、その後に続く言葉が思いつかない。思いつくのは発展性のない掛け言葉だけだつた。そう思えば思うほど、以前どういった会話を卓巳としていたのか思い出せないでいる。

論外ではあるが、仮に卓巳がカナメに言つたように中傷的な言葉を投げかければ、それこそ最悪の別れであり昔の繰り返しである。普通なら愛華の素直な気持ちを卓巳にぶつけるのが何よりも効果的ではあるのだが、動搖している愛華にとってその選択肢は存在しなかつた。だが、これもまた皮肉な事に卓巳はその愛華の素直な気持ちを心の底から受け止める事はできないだろう。

卓巳は既に「執事がほしかった。それ以外に何もない」その愛華の言葉を本音と受け取つてしまつてゐるからだ。

何とも哀れな愛華のだろうか。

世の中にはツンデレという部類の人人がいる。だがそれは漫画やアニメ、はたまた小説などだからこそ人々に受け入れられる部類である。

人と関わる中でツンは致命的とも言える。

第一印象だ。ツンで接し、その結果相手に恐い人とインプットされればそれ以上関わろうとはしないのが普通だ。そうなればデレに入る前に二人の関係が途絶えてしまう。要するに卓巳はツンの愛華に対して「キツイ人」と認識している。だからこそ愛華が卓巳に言った言葉が冗談や嘘の類ではないと認識してしまつてゐる。

なら仮に今から『テレとして卓巳に接すれば何もかも上手く収まる。』という訳でもない。以前までキツイ姿を見てしまっている以上、多少の優しさや素直を見せたところで「何か裏があるかもしない」と逆に警戒されるのがオチである。もちろん記憶同様に例外もある。そこで「『テレ期キター！』と思えるのであればお互にハッピーな結果になるだろ？」

が、あいにく卓巳にそういうた答えは持ち合わせていかつた。持つているのは相手を警戒する気持ちと、『気づかないフリをする気持ちだけだ。

結果として愛華の照れ隠しを信用させるのには他の誰かの力を借りなければ成立しない。もちろん時間をかけてゆっくりと誤解を解く方法もあるのだが、今日といつ短い時間ではどうにも誤解を解く術はないに等しいだろ？

そうなれば直ぐ未来に待ち受けの卓巳と愛華にはバッドエンドの一方通行しか用意されていない事になる。

以前明海との問題で卓巳は「感情に流された恋人の結末はどうなると思う？」 そう問い合わせ、愛華の答えは「バッドエンドの道しかない」だった。その質問をもう一度されれば愛華は同じような返事を返すだろう。

が、それが今の卓巳と愛華である事は言つた本人にも気づいていない。

愛華は昔の過ちを断ち切り、新たな思い出を求めるために感情に身を任せて卓巳に近づいた。結果としてそれは卓巳を傷つける事になつた。

よく「違った出会いをしていれば結末もまた違つた」やら「君とは違った出会いをしたかった」似たり寄つたりな言葉が使われる。それは今の卓巳と愛華のためにあるかのような言葉である。が、それは結果が出た時に使う言葉であり、まだ結末がない卓巳と愛華には必要のない言葉なのもまた事実。

だが遠かれ早かれ愛華が今まであればあるほど、その言葉が

近づいてくる。

要するに自分の思いを相手にぶつけられない人、我慢をして相手に合わせ続ける人ほど良い結末が用意されないので。

当たり前ではあるが、愛華はその全てを気づいてはいない。気づいているのは目の前に置かれていた朽ち果てた椅子に座る卓巳と気まずくなる事だけだ。

愛華が悩む張本人である卓巳といえば、カナメの部屋と同様に愛華の部屋の前で呆然と立っていた。

ノックをするために上げられた手は無常にもその役割を果たせないで、ドアの直前で止まっていた。

やはり卓巳もまた愛華同様に悩んでいた。

先ほどカナメとの会話で愛華に別れを告げると宣言したのにも関わらず、直前になつて迷つっていた。

このままドアをノックするのは容易い。だが、会つて何を話せばいいのか。愛華と全く同じ事を考えていた。

卓巳と愛華は似たもの同士だった。

自分の気持ちを相手に言えないでいるのに対し、至つてはミリ単位もずれないほど同じだった。もちろんお互いその事に気づいてはいない。

カナメに会う時もまた卓巳は同じように何を言えばいいのか分からぬでいた。だが、それはカナメの力を借りて話せたに過ぎない。だが今は誰かの援助も助言もない。

卓巳の悩みは辺りの気配にも気づかないほどだった。

卓巳から少し離れた位置にカナメは西洋のドールのように立つて卓巳を見守っていた。その姿は誰もが息を呑むほどの中だが、その美しさに気づく人は誰もいない。

ドアの前で立ち尽くしている卓巳の頭の中では会話の序列を並べに並べている。だが、悩んでいる時こそ気の利いた言葉が欠けるものだった。

かといって、このままドアの前で誰かの助け舟が来るのを待つほ

「卓巳は落ちぶれてはいけない。

コンコン。

だから卓巳はノックをした。もちろん頭の中では先ほどと何も変わらず、何を話せばいいのか分からぬでいる。

「……どうぞ」

数秒遅れてからドアの向こうへ、愛華の返事が返ってきた事により卓巳はもう逃げる道を失った。ノックをしなければまだ逃げ道はあった。もちろんそれは愛華とカナメを裏切る形になるのだが。

卓巳はきめていた決意をよりきめ、閉ざされたドアを開けた。

## 22パシリ 進まない話

卓巳はこの部屋には不釣合いな朽ち果てた椅子に、その朽ち果てた椅子から一メートルほどに向かい合つようにならに置かれた無駄に、ゴージャスな椅子に愛華。

それぞれ自分が座る椅子に座り、向かい合つたままお互に喋りつとはしなかつた。何もない空田の時間だけが無残にも過ぎ、それは優に五分強ほど続いている。

卓巳がこの部屋に訪れてから未だに会話らしい会話が展開されていない。お互いこれほど居心地の悪い場所はないだろう。

それでも卓巳にしても愛華にしてもお互い気づいている。このままでいい、と。

かといって思いはするもののそれを行動に移せないのはお互いが自分の素直な気持ちを表に出さず、心の奥底でどどまっているからだ。その行為がお互いを気まずくさせ、さらには何を言えばいいのか分からぬ元凶だとは気づくはずも無かつた。

何もない空白のこの部屋に唯一ある音、それは時計の秒針が進む音だけで、いつまで経ってもお互い喋る兆しが無い時だった。

ドアが一度叩かれる音が部屋に響く。

「どうぞ」

卓巳が部屋に入つて初めて発する言葉が愛華のそれだった。

「紅茶をお持ちしました」

そう言つてお盆にティーカップを二つにケーキの乗つたお皿もまた二つを乗せてカナメが部屋に入つてくる。

これはカナメの優しさだった。

どうにもこのままでは誰かがきっかけを作る以外にお互い黙りこむとドア越しに気づき、そのきっかけを作りにカナメがやってきたのだった。

卓巳は優しさ事態には気づかないものの、それでも嬉しさから安

堵の息を漏らす。

そんな姿の卓巳を向かい合つて座つてゐる愛華が見ないはずがなかつた。愛華はその卓巳の何氣ない行為を「私というのが嫌だ」と受け取り顔には出さないものの、それでも相当なショックを受けた。もちろん愛華の受け取りは実際遠くも近くもない。別に卓巳は愛華とこうしているのは嫌だとは思つてはいない。気まずいのは嫌だが、それでも愛華といるのは嫌とは思つてはいない。

愛華の微妙な変化に気づいたカナメはハツとなる。

この状況において最善の策なのは変わらない。だが、卓巳の反応によつて愛華が傷ついたのも事実。カナメの優しさが裏目に出てしまつたのは本人にも直ぐに分かつた。

卓巳自身は全く気づいてはいないのだが、卓巳はカナメがきた事によつて緩みきつた表情をしていた。その表情もまた愛華の気に障つた。

嫌だつた。卓巳のそういうた表情を自分以外の誰かにするのは嫌だつた。それがカナメでも嫌だつた。

そう心の中で誰にも悟られないように思つ。それと同時に切なさが込み上げてきた。

どうしてそういうた気持ちが芽生えたのかは本人の愛華にも分からぬ。だが、卓巳がカナメに送る視線と愛華に送る視線が違つてゐるのは薄つすらと気づいていた。

卓巳がカナメに送る視線は、優しさや信頼などの安らぎの視線だつた。そして愛華に送る視線は、優しさや安らぎが半信半疑となつた微妙な安らぎの視線だつた。

なにはともあれ、だ。その事に知つてしまつた愛華にとって気まずさから、カナメが来た事により卓巳が愛華をどう思つているのか知つた居心地の悪さに変わる。

いうなればこれは共に過ごした時間が多い愛華より、共に過ごした時間が愛華より少ないがそれでも濃い時間を過ごしたカナメの方を卓巳が選んだ。ということになる。

それを知つてしまつた愛華とつてこの場ではカナメに太刀打ちできないと悟つた。

軽くうな垂れる愛華を見てカナメはどうにも親切心から申し訳ない気持ちに変わつた。

卓巳の気持ちこそは普段と何ら変わりないのだが、それでも気持ちの奥、本人でも悟るのに時間がかかるほど心の奥底にはカナメの存在が大きく聳え立つてゐる。簡単にいえばカナメに今まで得られなかつた物を望んでゐる。さらに簡単にいえばカナメに優しさ、安らぎ、落ち着き、そういうつた部類の物を望んでゐる。

卓巳は別にカナメに恋心を抱いてゐる訳ではない。望めるなら、望んでいいのなら、何でも話せる姉といつた物を望んでいた。それを愛華は恋心と勘違ひをしている。

「……そこに置いといてください」

少しの沈黙の後に愛華が呟くように告げる。その愛華の声からは嘆きと切なさが發せられていた。

そこでようやくカナメの表情が変わつた。常にボーカーフェイスなのだが、この時ばかりは焦りが見られた。カナメが表情を変えるのは実に稀だ。

カナメのボーカーフェイスが崩れるのには条件がある。

一つ、大切な人が傷つく姿を見た時。

二つ、自分のせいで相手が傷ついた時。

明らかに今は後者となる。

いかに卓巳にスカートをめぐられても平常心に対応したカナメでも、焦りからくる心理状態まではどうにもセーブできない。もちろんそれはカナメに限らず、大抵の人人がセーブできずにオロオロするだろう。

カナメは取り敢えずこの場から離れる事が何よりも重要だと悟り、紅茶の入つたティーカップとソテーを机に置き一礼をする。

そのまま礼儀正しくドアの方に向かうものの、どうにも卓巳とすれ違う間際に見てしまつた悲しみに満ちた顔が脳裏に焼きつき離れ

なかつた。それは主である愛華の気持ちを気づかないフリをしてまで部屋に残留するほどの事だつた。

だが、辞める身である卓巳とこれからも主であり続ける愛華、この一人を天秤にかければ愛華を優先するのが当たり前となる。

「……私は甘いですね」

そう、誰にも聞こえないようにカナメは呟く。

結局のところ天秤にかけようがその意味は場の雰囲気と自分を頼りにする人がいるのなら覆すのがカナメである。

ようはいかに卓巳と愛華に会話ができるように仕向けるのか、いかに二人にとって一番良い結果が残れる状態で別れられるようにするのかが重要になる。だが、本当に別れに良し悪しがあるのかは全く謎である。いや、別れ 자체が悪い結果が導いた答えなのだからカナメがどう行動を起こしても悪い結果にしかならないのかも知れない。

カナメは体を反転させて卓巳たちの元に静かに戻ると愛華の背後に立つ。

「愛華お嬢さまはどうなされたいのですか？」

無表情のまま、同じ体勢で、愛華の表情を見据えるように、カナメは呟く。その呟きは愛華に届くものの、ほんの少しだけ離れた卓巳には聞き取れなかつた。もちろんカナメは愛華だけに伝えるのが目的で、卓巳に聞き取られないように配慮したのだ。

「私は……」

愛華は口ごもる。

正直になれない自分をもどかしくもあり、それによつて自己嫌悪を味わつた愛華なのだが、今まで誰かに本音や弱みを見せないでいた。だからこそ今更どうしようもできないでいたのだ。

人は慣れている物、生活でも性格でも急に変えられるものではない。時間をかけてゆっくりと他の物に変えるのが周流となり、それは愛華も同じだ。もしかしたら愛華がこの場で素直になることによつて卓巳の考えも変わるのもしれない。だが、それを愛華自身が

分かつていていたとしても中々行動には移せない。たつた一言「辞めないで」そんな簡単な言葉を発するにしても同じだ。

カナメは大体十秒ほど愛華の答えを待つた。だが、結局愛華は黙り込んだまま答える様子がなかつた。

呆れる様子もなくカナメは卓巳に視線を送る。

「卓巳さん、申し訳ありませんが、朝倉さんに今すぐ仕事を切り上げるようにお伝えお願いします。先ほど伝えるつもりでしたが、紅茶に気をとられて忘れてしました」

頭を深く下げるカナメは言う。

実際のところ電話一本で済ませられる。それでもまだカナメには愛華に伝え、その答えを聞かなければならなかつた。もちろん卓巳がそれについて断る選択肢は用意されていないと踏まえての頼みだつた。

「分かりました」

案の定卓巳はそう言い残して椅子から立ち上がりドアの方に向かう。

卓巳はこの場から一時でもいいから離れたいと思つていた。卓巳が想像した以上に気まずく、どうにも一人で考える必要があつたからだ。その事にカナメは気づいていた。だからこそ告げたのだ。当たり前ではあるが、カナメが伝え忘れるなどの失態をしない。簡単に言うならば空を利用したのだ。

カナメはドアに歩みゆく卓巳の背中を見つめ、卓巳が部屋から出たのを確認してから愛華に向き直る。

その時のカナメの瞳には不安そうな表情の愛華が映つっていた。

「もう一度お聞きします。愛華お嬢さまはどちらがいいですか？」

愛華が豪華な椅子に、その後ろに立っているカナメ。そして愛華の向かいには誰も座っていないタダの小汚い椅子。

カナメが言つた通り一度田の質問だった。一つ違うとするならば、一回目は小汚い椅子に卓巳が座つていたため声のボリュームを落としていたのだが、今はハッキリと言つほどの違つぐらうだった。

「私は……」

先ほど同様に愛華は口ごもる。

卓巳が部屋から出て行く間もカナメにどう答えるべきか考えていた。それでも愛華には答えが出てこなかつた。できるなら「辞めないで」と言いたい、そう思う以外は何も。

「……」

カナメは愛華の返事を待つ、愛華はどうするべきなのか考え、静寂が辺りを包む。

その静寂の時間を打ち破つたのはカナメだった。

「私は卓巳さんには辞めてほしくないと思つています」

愛華がどう思つているのかカナメは察している。だからこそ愛華の本音を聞くためにそう言つたのだ。もちろんカナメはポーカーフェイスで、その言葉に信憑性が欠けるのは致し方ない。

「……」

「愛華お嬢さまはどちらがいいのかは私には分かりません。私は卓巳さんの事はとても大切な方思つています。私個人の意見を述べますと、これからも愛華お嬢さまと卓巳さん、そして私の三人で一緒に仕事をしたいと思つています。こう思つ私は我が侶でしょうか？」

「……」

「愛華お嬢さまも気づいているのではありますか？」

カナメは責め方を変えた。一向に喋らうとしない愛華に憐れを切らしたからだ。

\*

\*

一方その頃卓巳はといえば、中庭で楽しそうに仕事をしている空の背中を見つめながら呆然と立っていた。

カナメに言われた通り「仕事を切り上げて休むように、だつて」と言つるのは簡単だ。だが、そう言つてしまえばまた静寂に包まれた愛華の部屋に戻る事になる。だから卓巳は今の時間をできるだけ伸ばしたいと思つている。

が、その思いははかなく終わりを告げた。

「あれ？ 卓巳くん何しているのですか？」

卓巳の存在に気づいたからだ。

空は軍手をはめた右手にスコップを持ちながら怪訝そうに卓巳を見る。今更なのが、メイド服に軍手とスコップとこののは実にシユールだ。

もう少しこの時間が続けばよかつたのに、やつ思ひながら卓巳は肩を竦めながら空に近寄る。

花壇の側でしゃがむ空の隣に卓巳も一緒にしゃがむ。

「この花なんて名前？」

そう言つて指した先には白く垂れた花がある。

これといって花に興味がある訳でもない卓巳だが、これほどまで鍛錬に整えられた花壇と花に少しだけ興味を抱いた。

空は嬉しそうに胸の前で手を打つ。

「すずらんです。花言葉は純潔と謙遜です。本当は五月に咲く花なのですが、ビニールハウスで育ててここに植えなおしました。それでもこの気温に合つないので数日もすれば枯れてしまうかも知れ

ません……」

実に残念そうに空は肩を落とした。

「それなら別に花壇に植えなおさなければいいじゃない」

「できるなら私もそうしたいと思つています。ですが、これも仕事ですから仕方がありません」

「そう……それはまた可哀想に」

卓巳はすずらんを指でピンとはじく。すずらんは揺りだり、何事もなかつたかのように元の位置で止まる。

「お花を苛めちゃダメですよ！ ひとつも可哀想です……」

「あっ、悪い……」

「はい、分かつていただけたのならそれで結構です」

と、ニッコリ空は微笑む。

「どうして休みの日に仕事をするわけ？」

先ほども卓巳は同じ質問を空にしている。その時の答えも卓巳は覚えている。それなのにどうして同じ質問をするのかといえば、違った答えが返ってくるのかもしない。ではなく、根元からその理由を知りたかったからだ。

「さつきもその質問しましたよね？ 答えも一緒にです。お花さん達のお世話がありますので」

「別に他の誰かに任せてもいいじゃない。そこまで苦労する理由がどこにあるの？」

「それは違います」

空は真剣な眼差しで卓巳の瞳を見る。一瞬だがその真剣な眼差しを卓巳は逸らしたが、直ぐに空同様に瞳を見据える。

「私は今までお花さん達のお世話を苦労したと思つた事はありません。私の意志でお休みの日もお花さん達のお世話をしているのですよ。それに私はこうしてお花さん達のお世話ができるとても嬉しいです。だから私は毎日がとても充実しています。卓巳くんだって短い間でしたが、愛華お嬢さまが好きだから仕事をしていたのではないですか？」

「俺は別に俺はお嬢が好きだから仕事をしていた訳じゃない。する

以外に選択肢が無かつたからだ」

「それならどうして辞めるの？」

「お嬢に執事がほしかった。それ以外に何もない。そう言われたから

から仕事事態が馬鹿らしくなったからかな」

「それはつまり卓巳くんは愛華お嬢さまを特別視していたから、そ

う言われて空しくなったのでしょうか？」

「特別視とまではいかないけど、一時は大切な人と思つていた」

「私は愛華お嬢さまの事はよく知りません。こう言つた事をいうのは叱られるかもしませんが、私の知る愛華お嬢さまは素直ではないと思います。私だって思つている事を素直に誰かに言えるほど器用な人ではありません。きっと愛華お嬢さまは照れ隠しにそう言つたのだと私は思いますよ」

空はそう言つて卓巳に微笑む。

卓巳もそれについては薄々感づいていた。それでも確信がなかつた。あるのはそう合つてほしいという願いと愛華の表情だった。あくまで前者は卓巳の願いであるため無視してもいいのだが、後者は無視するには致し方野暮だ。

愛華が「執事がほしかった。それ以外に何もない」そう言つた時、愛華の視線の先には見慣れたアンティークの家具が映つていた。

嘘の答えに卓巳の顔を直視できなかつたせいで。

それでもその時の卓巳にはどうして愛華がそういうた行為をする意図が掴めず、その結果として辞めると告げた。もし仮に卓巳が行為の意図を掴むことができたのならば、違つた結末が待つていただろう。

「……」

かといつて今更どうこう空が言おうが、卓巳の思いは変わらない。

ただ辞める前に手品の種明かしでもされた程度だ。

結局のところ素直じゃない一人が向き合つても何も良い結果にはならない。一人のうち一人が妥協するか、その場だけでも素直にな

れば良い結果になるだらう。だが卓巳と愛華は今更と思ひ返持ちが強く胸のうちについた。

今更辞めたくない。

今更辞めないで。

と、お互に答えは出しているのだが、その気持ちを素直に受け止めていないので。

「……………」

受け止められないからこそ卓巳は逃げるようになってしまったの場から立ち上がる。いや、逃げるようこそではない。実際逃げている。自分の素直な思いからも、空からも。

空は「そうですか」と呟き、去りゆく卓巳の背中を見つめた。  
卓巳が中庭から姿を消したのを確認してから、「もつと素直になればパッペーハンドなのにね」と、田の前のすずらん元町へ。

## 24 パシリ 見慣れた天上

卓巳が空に用件を告げて部屋に戻つても静寂は変わらなかつた。当たり前といえど当たり前である。

無言を決めているのか、カナメは愛華の背後に蝋人形のように立ち、少し冷めた紅茶が一人を見守るかのように机に置かれ、それ以外はいつも見慣れた部屋だつた。唯一の音は時計の秒針が動く音だけだつたが、二人にとつてその音さえ氣まずさに変えていた。

どちらかが話を切り出さなければ無言は打破できない。それは二人とも分かつているのだが、どうしても切り出せない。もちろん理由はプライドと氣まずさだつた。

卓巳は視線だけを愛華に移した。

目が合つ。

そらす。

それの繰り返しだつた。

だが、どちらかが「あ」でも「い」でも「し」でも「て」でも「る」でも一言を口にすれば違うのかもしれない。あるいは今までのようになんか沈黙が続くかもしれない。ただはつきりする事、それはどちらかが一握りの勇気さえあれば事はハッピーエンドを迎えるということだ。たつた一言「一緒にいたい」ただそれだけ。とても簡単で、とても難しい一言。それでも今の一人には到底無理な話なのかもしれない。

ため息でもつきたい表情を浮かべ、カナメはようやく口を開いた。「……私は卓巳さんとこれからも一緒に仕事をしたいと思つています」

卓巳はハツとなる。不意打ちだつた。

「お、俺は……」

何を考えているのか分からぬ瞳に見つめられ、卓巳はすぐに視線をそらした。怖かったのだ。全てが悟られていくので。

「俺はもう……無理、だ」

途切れ途切れになりながらも答えがそれだった。

結局のところ卓巳はプライドを捨てられなかつた。いや、男の意地というやつだらうか。

かくして卓巳の無駄に高いプライドと、どうしようもない意地で事はすんだ。

好きな異性に高いポイントを持たせるには手っ取り早い方法が一つある。言うまでもなく、褒めちぎる事だ。褒めてホメテ褒めちぎる。逆のパターンを思い浮かべれば想像はつくと思う。異性から、男性なら「カッコイイね！」女性なら「可愛いね！」そう言われて不愉快な思いをする人はいない。むしろ表面上には出さないものの、内心では嬉しい気持ちが芽生えるだらう。それでも勘違いしてはいけない。それはただのきっかけで、そこからどうつなげるかによってハッピーエンドになるのか、はたまたバッドエンドになるのか変わる。中には「そんな恥ずかしい事言えない！」そう思う人もいるだらう。だが、恥ずかしくても言った方が近道になるのは明白だ。ただ注意事項が一つだけある。それは二二二口しながら、あたかも社交辞令かのように言つても信憑性に欠けるということだ。言う方からすれば本音かもしれないが、言われた方は眉唾物である。

さて、話が少し脱線したが、用は今の卓巳と愛華がまさにそれだつた。典型的な恥ずかしがりやだらう。「一緒にいたい」「辞めないで」「俺の事見てくれよ」そんな事口が裂けても言わないだらう。よつは一步踏み出せなかつたのだ。

卓巳は特に荷物という物がない。それは荷物をまとめる暇もなく家を出たからだ。どっちにしろ卓巳の私物が愛華の部屋に置かれる事は万に一つもなかつただらう。

「どうしてもお辞めになるのですか？」

愛華の部屋の前でカナメは悪あがきをする。

少し寂しそうに瞳のカナメを卓巳は見れなかつた。見てしまつといつつい「もう少しここに居たい」と言つてしまいそうだから。

卓巳はカナメに一礼をして背を向けて玄関に向かつて歩き出した。その後姿はどこかもろそで、ほんの少し力を入れて押してしまえば倒れそうなほどだつた。自分のせいで家庭崩壊寸前の父親にどこか似ている姿だつた。

その小さすぎる背中が見えなくなるとカナメは両手を壁に押し当てよしかかる。この場を誰かに叩撃されれば一騒動になるだろ。カナメのそういう姿は愛華でも見たことがないからだ。

それでも少しの間だけだつた。少しだけ考えにふけて卓巳を追つた。カナメは最後の最後に卓巳を実家まで送ろうと思つて。

\*

すゞしく久しぶりに自分の部屋の天上を見た。そんな事を卓巳は思つていた。

辞めたのはいいが、家に帰る手段がなかつた卓巳にとつてカナメの申し出は實にありがたく、お言葉に甘えて家まで送つてもらつたのだ。卓巳が何食わぬ顔で家に帰つてきたのを見た卓巳の父である浩史は、顔を青ざめてその場に崩れ落ちたのは言うまでもない。が、それも今更の事だ。浩史は特に卓巳の事を攻めなかつた。浩史にも卓巳を無理やり執事にした事について罪悪感があつた。その償いにしてはかなり小さいが、攻めなかつた。

漫画やドラマでは担任の教師が退学届けを隠し持つっていた。という展開があるのかもしれないが、現実はそこまで甘くはない。もちろん退学した事になつていいし、今では晴れて時代の最先端であるニートになつた訳で、暇をもてあますお嬢様となんら変わりない生活にならうとしている。ここは忠実にティーカップ片手に鏡の向こ

「この血分で血腫の一つでもじょつかと車止めなんだ。

## 25パシリ 意地つ張りな男の子

執事を辞めてから一週間ほど過ぎた頃、卓巳は廃人と化していた。突然すぎるが、これが事実なのだから仕方がない。では卓巳の一日の流れを大まかに説明しよう。起床すると何かをするわけでもなくボーッと天井を眺める。朝食を食べていると時々意識がなくなり、ハツとする。なお昼食も夕食も同様。お風呂に入ると、口を大きく開けてボーッとしている。自由時間は読書や暇つぶしに勉強などをしているが、ふと気がつくと以前の忙しい日々の妄想。これを廃人という以外に何といおうか。卓巳の両親さえ息子を見るのが辛いときている。

特に何をするわけもなく、卓巳は近くの公園のベンチに座り、ボーッと空を眺めていた。近くでは近所に住んでいる子どもが楽しそうにキャッキャと騒いでいるが、今の卓巳には全く耳に届いていない。

時々ビクッと体を震わせ、近くで遊んでいる子どもに興味を植え付けるが、それ以外は変人としかいいようがない様である。仮に卓巳の隣にカップルが座っているとする。きっとヘビーなデートになるだろう。幸いな事に卓巳の隣には誰もいなかった。

そんな廃人と化している卓巳の隣に、学校の制服を着込んだ一人の女性が座る。手には不可解なキャラクターがプリントされている缶を手にしている。

「久しぶりに西沢くんに会つたけど、相変わらず間抜けな顔をしているのね」

女性はそんなサド的な発言をする。

かといって今の卓巳を罵ろうが、当の本人である卓巳の意識は遠い彼方にあるわけで、全く効果はない。こうなつてしまつたら罵つた張本人がバカらしくなるだけである。

「……」

案の定卓巳は無言のままボーッと空を見るだけだった。

「ちょっと… 無視しないでよね…」

卓巳の反応にイラッとした女性は卓巳の体を揺らしながら大声を上げる。

「……」

それでも卓巳の意識は戻らない。

「ちょっと…！」

さらに大きく揺さぶり、さらに大きな声で怒鳴る。

そこでようやく卓巳がハツとし、意識が覚醒する。それと同時に今の状況を飲み込もうとあたりをキョロキョロする。

「……明海の友だちの少女Aか…」

さもどうでもいいように呟き、関わらないでくれと言わんばかりに嫌な顔をする。

明海の友だちの少女A……梨乃はプルプルと体を振るわせる。当たり前だが、そこまで言われて怒らない人はいないだろ。

「誰が少女Aよ…！」

さつき以上に怒鳴り散らし、公園中の視線を集め。母親の交流の広場である公園で、そのような光景を見ればかつこうの話のネタになり、案の定「どっちが浮気したのかしら?」と、キャピキャピした話題で盛り上がりしている。

「どうしてここに少女Aが?」

「もうつー！ そこをスルーしないでよ…！」

「そもそも学校はどうした？ 今の時間だとまだ授業中だと思つけど…」

「人の話を聞きなさいよね…！ ……はあ、もう少女Aでいいわ。

今日は学校の都合で午前中だけなの」

卓巳が話を聞かない事に梨乃は諦める。そこで「そういえば西沢くんに名前いってなかつた」と気づく。今の梨乃にとつて、どうでもいい話になる。

「そうか…」

「そういう西沢くんは何をしているわけ？」

「何つて……今や流行の最先端の一ートだけど、何か問題でもあるのか？」

「問題しかないでしょ。つてかさ、学校辞めてからずっと？」  
「いや、一週間ほど前からだ。その前まで金持ちの道楽に付き合っていた」

梨乃は意味不明な発言に「？」マークを頭につかべる。

「あの……ひ、話変わるけど、あれから明海に連絡した？」

その途端に卓巳の表情がみるみるうちにブルーになる。今の卓巳にとつて愛華と共に過ごした時間のときにあつたさせやかな出来事でもNGワードとなつていて。

卓巳は大きなため息をする。それから明後日を見て「そんな事もあつたな……」とかいいうそな表情で現実逃避する。

そんな卓巳の異変に気づかない梨乃は追い討ちをかけるかのように、

「明海寂しがつていてるよ？ ほら、携帯かしてあげるから連絡してみれば？」

そう言いながらキー・ホルダーが何個もついている鞄から携帯電話を取り出す。携帯電話を卓巳に差し出し、そこで梨乃はギョシとする。

「ちょっと落ち着こう。何で泣いているわけ？」

そう、卓巳の頬には一粒の涙が流れている。

「連絡したところで何て言えばいい？『俺つて今一ートだけど、それでもいいかな？』とか言えばいいのか？」

「別にそんな事言わなくていいと思つよ。つてかさ、それは全世界の一ートに対する挑戦になるから、あまり一ート一ートとか言わない方がいいと思うけど……」

「ならせ、『今の俺は色のないパレット……無色だけどいいかな？』とか言えばいいのか？」

「意味不明だし……」

もう梨乃は卓巳の異常に驚きを通り越して呆れていた。

だがこうなつた卓巳は止まらない。例えるなら急な坂を一輪車で爆走するようなものだ。

「そりだよな……。今の俺はどう転んでも悪い結果にしかならないよな。ははっ、これじゃあ、お譲も明海も愛想尽かすか……」

そしてしおれた花のようにシヨンボリする。

取り敢えず今の梨乃にできる事は一つ「今の西沢くんは少し優しくすれば簡単に落ちるよ」と明海にメールをするぐらいだった。そんな不可解な会話を繰り広げている卓巳と梨乃が座っているベンチの後ろ、道路の脇に真黒のリムジンが停車する。こんな平凡で、高級住宅街とはお世辞にも言えない地区にリムジンは場違い以外はない。

西森カナメ。

場違いなリムジンから出てきたのはカナメだった。

カナメは何の迷いもなく卓巳に近づく。

公園でいる子どもの保護者達は何事かヒソヒソする。

卓巳が執事を辞めてからの一週間、ずっと卓巳の事を考えていた。空にも相談し、その結果としてカナメが仲裁として卓巳を連れ戻す結果にまとった。

「卓巳さんお久しぶりです」

礼をして卓巳を見据える。

その場に居合わせた梨乃は新手と卓巳の関係が気になるものの、その服装がどうにも本場の物としか思えず困惑する。

「カナメさん……俺に何の用ですか？」

さつきまでとは打って変わつて卓巳は落ち着いていた。卓巳はカナメが来る事を察していた。いうなれば一週間も妄想した結果から可能性がある結末としてピックアップしていたのだ。

「卓巳さんを連れ戻しにきました」

「それはカナメさんの意思ですか？ それともお譲の意思ですか？」

「両方と言つておきましょうか。卓巳さんが執事を辞めてからお嬢

様は落ち込んでいます。それをどうにかするのもメイド長の務めです。こういった言い方をすれば私が卓巳さんには、お嬢様の気持ちを元に戻すためだけに連れ戻しにきたとお思いでしょうが、私も卓巳さんと一緒に仕事をしたいと思っています。こう呟るのはおかしいと私自身も思いますが、私は卓巳さんに期待しているのです

「期待？」

「ええ、期待です。卓巳さんは短い付き合いです。執事として日に余る行動もありました。それでも卓巳さんのおかげで今まで見たことのないお嬢様の表情を見ることができました。ですから私は卓巳さんに期待をしています」

「俺に期待するのは期待はずれですよ。さうと氣のせいです  
「……卓巳さんは寂しくないのですか？」

卓巳は表情には出さなかつたものの、ドキッとする。今までの言動から卓巳が寂しいと思うのは明白であり、そして愛華に対する気持ちも日々高ぶっていた。

そんな卓巳とカナメのやり取りを真横で見ている梨乃は、近いようで遠い話だと、ただただ盗み聞くだけだった。もちろん卓巳とカナメの関係を聞けるものなら聞きたいという気持ちはある。だが、それを今聞くわけにもいかず、あくまで傍観者の立場をキープしている。

カナメは淡々と続ける。

「お嬢様や私、朝倉さんは卓巳さんが辞めることを寂しいと思っています。お嬢様は最近あまり学校の方へ行つておりません。どうしてかわかりますか？ 私が思うに、お嬢様は卓巳さんがいつ戻つてきてもいいようにと、必要最低限は屋敷から出ないのだと思います」「それこそ気のせいですよ。あのお嬢がそんな事をするはずがないません」

そう断言するものの、淡い期待をしてしまつのが人といつものであり、この一週間廃人として生活してきた卓巳である。

カナメにそう呟つが、内心では妄想で膨らませた脳内が活発に色

々なシユチューションを生み出していた。このまま承諾して再び執事として働く道、プライドから断る道、車の中から愛華が出てくる道、色々なパターンが妄想として思い浮かんでくる。

「では邸に戻つてくるつもりはないのですか?」「……」

卓巳は答える事ができなかつた。一言「戻ります」そう言えば問題は解決なのだが、その一言がどうしても言えなかつた。それで全てがまるく収まるのにも関わらず。

数秒間の沈黙後、カナメは「またきます」とだけ告げ、その場を後にした。

残された卓巳は俯き、梨乃はあくまで傍観者なため黙り込んでいた。

カナメと別れた後、およそ20分間は地面が友だちといった具合にしつむいていた。その隣では居心地が悪そうに梨乃が座つている。時折「うつ」「あつ」と、声を漏らすが、今の卓巳に何と答えればいいのか梨乃是分からず、居心地が悪そうに卓巳の横顔を盗み見ていた。

やれやれといった感じに梨乃是携帯電話を鞄から取り出す。やはり女子高生といったところなのだろうか、ものすごい速さでメールを打ち込む。

### 狩野明海。

名前の欄には梨乃の友だちであり、卓巳の彼女だった明海の名前が携帯電話のディスプレイに映っていた。

梨乃是メールを打ち終えた後、静かに鞄の中にしまった。公園で遊んでいる子どもの母親達は、卓巳たちをコソコソと見ては話のネタにしていた。内容としては第三者の登場についてだ。そういう、カナメとの関係をそれぞれの妄想をして話している。主にピンク色の妄想だつたりする。

「……あのぞ、申し訳ないけど、私帰つてもいいかな?」

「そうだな。俺も帰るか」

「いや!……ちょっと待つた。西沢くんはこのまま座つていなさい」

「どうして? 僕もそろそろ帰りたい」

「別に理由はないけど……」

「そうか。なら俺は先に帰るな。長い時間付き合つてくれてありがとう。少女Aって結構優しいな

「誰が少女……。まあ、いいわ。それより西沢くんはここにいなさい。私は帰るけど」

梨乃是理由を告げず、ベンチから立ちあがる。最後に念を押すよ

うに「言つておくけど、帰つたら絶対に後悔するからね」そう言い残し、やれやれと言いたげにその場を後にした。

どうして梨乃がそんな事を言つのか全く意図が掴めず、卓巳は言われたとおりにベンチに座り直す。卓巳が家に帰つても、居心地の悪い思いしかしなく、それなら梨乃の言われたとおりにベンチに座り直したのだった。

卓巳は改めて公園を見渡した。鬼ごっこでもしているのか、元気に走り回る子ども。その子どもの様子をチラチラと気にしながらも、楽しそうに雑談に花を咲かせる子どもの母親。とても平和な光景だつた。元気に走り回る子どもを見ていると、卓巳は「自分にもこんな頃があつたのか」そう思う。

それからほどなくした頃、だつた。卓巳に一人の女性が近付く。足音に気が付き、卓巳がその方を見れば、そこには卓巳が以前付き合っていた元彼女 狩野明海がそこに立つていた。

卓巳はそこでようやく梨乃が引き留めようとした理由が分かつた。それでも卓巳にとつて、この場合は何と言えばいいのか知らなかつた。仮にも一度は愛した人なのだが、それも過去の事で、今となつては氣まずい関係である。

「……」

卓巳同様に明海もかける言葉を知らず、一人して黙る以外の方法を知らないようだつた。

そして第四者の登場に、外野で井戸端会議をしていく子どもの母親達の会話が弾む。卓巳の存在によつて、本日のネタには困りそうにないようだ。

先ほどまで梨乃が座つていた場所に、明美は無言で腰を下ろす。言つまでもないが、明海は梨乃に呼び出されたのだつた。先ほど梨乃は「今すぐ学校の側にある公園にきて!」そう明海にメールを送つたのだった。

実は以前から明海は卓巳に会いたいと思つていた。それは隠しよ

うのない事実で、何度も卓巳の家に行こうかとも思っていた。それでも中々決心がつかず、今に至る訳だった。だが、いざ本人を目の前にすると、こうである。二人とも黙つたまま、時だけが過ぎていく。

どちらかが勇気を出して一言何かを言えば、もしかしたら話題が弾む……、訳でもないが、それでもきっかけにはなるだろう。

「……たつくん。あのね」

「たつくんって誰!? いつも卓巳だったよね!? ……いや、なんでもない。忘れてくれ」

せっかく明海が勇気を振り絞って声を出したのに、卓巳は異変に突つ込みをいれ、そのせいで再び気まずい空気が流れる。バカな事をしたと、卓巳は唇をかみしめる。そして再び無言の時間が過ぎた。

実際のところ、明海は今までに卓巳を「たつくん」と呼んだ事は今の一度もない。ではどうして突然「たつくん」と言いだしたのだろうか。答えは簡単だった。心中ではいつも「たつくん」と呼んでいたから。学校でのイメージ、卓巳からのイメージ、そして何よりも自分が可愛らしく「たつくん」と呼べるような人ではない、そう知っているから心中限定での呼び名だった。

一分ほど全く会話がなく、そろそろ子どもの保護者達の興味が薄れていく頃、次は卓巳の方から会話を持ち出した。

「……あ、なのな。突然どうした?」

「たつたそれだけの、何気ない一言だった。」

「えっとね、梨乃からメールが来て……」

「梨乃? ……あー、少女Aの事ね」

「少女A?」

「あつ、いや、じつちの話」

「……卓巳さ、前と少し変ったね」

「変わった?」

「なんかね、雰囲気が少し変わったような気がするよ。学校やめて

から何があったのか話してよ

「……ああ」

卓巳はこれまでの事を話した。愛華が通っている学校の事、入院中に出会った亜里沙の事、邸で働く花がとても好きなメイドの事、無愛想だけど優しいカナメの事、そして一番身近にいた愛華の事。順を追つて卓巳は話した。

今までの出来事を話している卓巳はとても楽しそうだった。それが卓巳の話を聞いている明海が感じた事。

「 そんなところかな」

全ての話が終わつた事には、先ほどの氣まずい空気はなくなつていた。卓巳は楽しそうな表情で、明海もそんな卓巳につられて嬉しそうな表情をしている。

「そっか……。私の知らないところで色々な事があつたの。ちょっとお嬢様に妬けちゃうな……。ねえ、少し歩かない?」「どこに?」

「目的のない散歩だよ。嫌かな?」

「……ん、行くか」

そして二人は並んで歩きだす。

一人にとつてこの辺りの地理は少し詳しい。学校の近くだけあり、付き合つて間もない頃は、二人肩を並べて遊びに行つたりしていたからだ。それも今では良い思い出だろう。

目的のない散歩のため、卓巳が曲がり角を右に行けば、何も言わずに明海も右に行く。明海が曲がり角を左に行けば、何も言わずに卓巳も左に行く。

二人の会話は主に思い出話だつた。下校途中に立ち寄つた本屋だつたり、雑貨屋だつたり、ファミレスだつたり、その時に何があつたのか、面白楽しく一人で話しながら歩いていた。

ほどなくして学校の近くにある商店街についた。学校の近くだけあり、卓巳にとつても明海にとつても、よく知つてゐる制服が目立つようになる。明海は才女として学校では有名人だつた。そのため

学校の生徒から注目を浴びる。そうなれば隣にいる卓巳もおのずと注目を浴びる。そのせいだらうか、至る所から「ほら、狩野さん。隣にいるのつて……、もしかして前に学校やめた彼氏の西沢くんだけ? まだ付き合っていたみたいだね。ちょっと意外」と、遠からず近からずそんなような話が至る所でされていた。

もちろんだが、そこまで大きくない商店街なため、卓巳と明海にもその話題は耳に入る。一人とも居心地が悪そうに、お互いの顔を見て苦笑いをする。

そんな時、商店街の入り口に一台の車が停車した。商店街に不釣り合いな車がそこに停まっていた。その車から一人の女性が出てくる。後ろには黒いスーツを着込み、体格のいい男性が数人出てくる。さながら映画に出てくるボディーガードのようだった。

\*

\*

ほんの少し前の話。

卓巳が邸に戻るつもりはなく、連れ戻す事に失敗したカナメは、邸に帰る車の中で考え方をしていた。車の中には数人の男性がいて、全員が黒いスーツを着込んでいた。本来彼らの仕事は愛華のボディーガードなのだが、カナメが卓巳の所に行くと知り、無理を言って数人だけついてきたのだった。

ボディーガードと言つても、四六時中一緒にいる訳ではないのだが、邸で働く他の人達よりかは愛華の側にいる身である。そのため愛華の変化にも少し敏感である。仕事内容を忘れ、カナメについてきたのだった。

「西森様。西沢様は何と言つておられたのですか?」

黒服の一人がそう言つ。以前一度だけ、入院中の卓巳と関わった事がある人だった。

「何も言つていませんでしたが、戻るつもりはないようです」

「ではこのまま帰るのですか?」

「……そうするしか方法はないでしょ、うね」

少しだけ考えてから、カナメはそう言つ。内心では苦虫を噛んだ  
かのような気持ちだつた。

「ですがこのままでは

「何の解決にもならないのは分かつてあります」

「でしたら、ここは強引に連れ戻すのはどうでしょ、うか?」

「と、いいますと?」

「愛華お嬢様にしても、西沢様にしても、お互い意地になつていて  
詫ですよね? それでしたら強引に一人を会わせてみてはいかがで  
しょうか?」

「お互い意地になつていて、会つたところで何の解決にも  
ならないと思います」

「二人が会わない事が解決にならない一番の原因だと私は思ひます

「……それもそうですね」

カナメは車内に付属されている電話をとる。呼び出し音などは全  
くない。その電話は運転手に用件を伝えるために存在する電話だか  
らだ。

「卓巳さんの所に行つてください」

そう短く告げると、相手の返事を聞かないまま受話器を置く。  
ほゞなくして走ると、車は商店街に停車した。どうして迷いもなく  
卓巳の居場所が分かつたのかといえば、さすが何でもこなすハイ  
スペックなメイド長とでも言つておこつ。

## 27 パシリ 気づく思い

「卓巳さん」

居心地の悪い商店街を抜けようと、卓巳と明海が歩いていると、卓巳の名前を呼ぶ声が響く。誰が呼んだのかは言うまでもなく、力ナメだった。卓巳が振り返ると、その後ろに控えている黒服たちは一例する。

元から注目を浴びていた一人だが、カナメと黒服の登場で更に辺りがざわめく。

「ねえ、卓巳。この人達だれ？」

明海は不安そうに卓巳の後ろに隠れ、消えそうな声で問いかける。

「さつき話したカナメさんと、お嬢のボディーガード。……それで、次は何の用ですか？」

そう簡潔に田の前にいるメイドと黒服の説明をすると、卓巳は本題を切りだす。

「先ほどと同じです

「俺は……、戻りませんよ」

卓巳はカナメの顔を見て言えなかつた。視線を地面に移し、今にも消えて無くなりそうな声で言つた。そんな卓巳を明海は怪訝そうな顔で見つめる。

それもそのはずである。先ほどは実に楽しそうに、田の前にいる力ナメや愛華の事を話していたからである。それなのに、どうして「戻りません」と言つのか理解できなかつた。

数秒だけ卓巳とカナメを交互に見て、明海はハツとする。卓巳が意地になつてゐるのだと、理解したのだつた。卓巳の事をよく知つてゐる明海にとつて、とても容易い問題だつた。

「…………卓巳」

「…………」

「…………卓巳ー」

名前を呼んでも聞いていない卓巳。明海は大声を出す。突然の出来事に辺りが静まり返る。

「えつ？ どうした？」

「どうしたじやない！ 」この頑固者。さつきとお嬢様の所に行きなさい」

「いや、俺は……」

「本当はお嬢様と仲直りしたいのに、いつまで意地はつているつもり？ お嬢様が謝るまで会うつむりがないの？」

「……」

「さつきは楽しそうにお嬢様達の話をしていたのは何だったの？ このままだったら、前の私と卓巳みたいになっちゃうよ。それでもいいの？」

以前の卓巳と明海。その言葉に卓巳は心が締め付けられる思いをした。関係を修復しようにも、どうしようもできない状態。それが二人の関係だった。

「俺は……」

「今行かなかつたら、もうカナメさん来てくれないかもしねないよ？ 私だつたら絶対に後悔すると思つ……。私は卓巳との関係に後悔している。もっと話せばよかった。もっと卓巳の気持ちを知ればよかつた。……私はもう後悔したところでどうにもならないの。卓巳はお嬢様とそうなつてもいいの！？」

「……」

何も言わない卓巳の背中を明海は押す。

「ほら、行つてきなさい。きつとお嬢様も卓巳と仲直りしたと思つてているよ」

「それで」

「はつきりしなさい！ ……自分の気持ちに素直にならつよ。何なら私が卓巳の気持ちを今いつてあげましょうか？」

「俺の気持ち？」

「そう。卓巳の気持ち。……本当はお嬢様の事が、大好きでたまら

ない気持ち。本当は前と同じ関係に戻りたいけど、傷つるのが嫌で逃げている気持ち。本当はお嬢様に迎えに来てほしい気持ち。できる事なら自分の気持ちを伝えたいけど、拒絶されるのを怖がっている気持ち。何より今すぐお嬢様に会いたい気持ち。どう、何か違う？」

「ちが！……違わない」

卓巳は一瞬だけ「違う！」と言こそうになる。それでも数秒だけ間を置き、本音を言つた。それは明海の瞳が真剣で、はぐらかそうとする自分が情けなく思えたからだ。

「そう、ならお嬢様のところに行きなさい」

そしてもう一度卓巳の背中を押す。

卓巳は今にも消えて無くなりそうな声で、「ありがとうございます」と呟いた。返事の代わりに、明海は笑顔で返した。

もし明海が傍観者となっていたのなら、愛華に会つても卓巳は意地でも自分の気持ちを伝える事はなかつたのかも知れない。そうすれば、また違つた未来　卓巳と明海のよりが戻つた未来もあつたのだろう。それでも明海は背中を押した。それは同じあやまちをさせないために。

そして卓巳は黒服達と一緒に商店街の入り口に向かつて歩き出す。カナメだけはその場に残つてゐる。明海に話があるためだ。

「ありがとうございました。私一人では卓巳さんを、無理やり邸に連れて行くしかありませんでした。卓巳さんは私達について何か言つていましたか？」

「いえ、特には何も。ただ、すごく楽しそうに話していましたよ」

「そうですか。いい事を聞きました。ありがとうございます」

そう言つて一例をする。

「最後に一つだけいいでしようか？」

「何ですか？」

「卓巳さんとお嬢様がお付き合いをする事になつた場合、狩野様はどうなさりますか？応援するのか、しないのかって意味です」

「両方です。卓巳には幸せになつてほしいと思ひますけど、やっぱり私の気持ちもあります。私は今でも卓巳の事を好きです。正直に言えば、私の元に帰つてきてほしいですよ。ですが、こればかりは私がどうにかできる問題ではないので、応援をしたいですし、逆に応援もできません。こんな答え方はするいですか？」

「卓巳さんの思いを受け止められて、狩野様は優しいですね」「逆に聞きますが、カナメさんはどう思つているのですか？」

「ど、いいますと？」

「卓巳の事です。何とも思つていませんか？」

「私と卓巳さんは職場の同僚です。確かに卓巳さんは優しい方です。きつと卓巳さんもそう思つていると思います」

「違います。私はカナメさんの事を聞いているの。卓巳の思いは関係ありません」

カナメにとつて、どうして明海がそんな事を聞くのかが理解できなかつた。カメにとつて卓巳は人として好きな部類に入つてゐる。それはカナメ自身も認めている。それでも恋愛感情に発展するのかは分からぬ。恋愛感情というよりも、世話のかかる弟のような気持だつた。

現段階での思い。今のところはそつた。だが、明海の次に發した言葉で心が揺れた。

「ならどうして卓巳を必要以上に求めているのですか？ お嬢様のためですか？ 心のどこかでは、お嬢様を口実にしていたのではないか？ もつと卓巳と一緒にいたかつた。もう少し卓巳にお菓子と紅茶を出して、何氣ない一時を味わいたいと思つた。できるなら、いつまでも三人でいたかつた。……生意気な事を言つてすいません」

明海は頭を下げ、最後に「私はこれで」そう簡単に告げ、カナメの返事を聞かず逃げるようになつた。

残されたカナメは何も言ひきませんでした。すぐに来た道を歩き出す。カナメが無表情なつたが、それも数秒。すぐには背中を追つたが、それも数秒。すぐに来た道を歩き出す。カナメが無表情な

のはいつも通りだが、心だけは酷く揺れていた。

邸に戻る車内は実に重たい空気だった。

無表情なのだが、色々な思いがあるカナメ。まるで人形のようにピクリとも動かない黒服。そしてその黒服に挟まれながら座つている卓巳。この状態で居心地がいい人は、数えるほどしかいないだろう。

それなら大人しくと、卓巳はこれからのことを考える。手つ取り早く、「お嬢様と一緒にいたい」それだけを告げれば、問題は解決するだろう。だが、それを言えれば、今まで苦労はしなかつたはずだ。だからこそ考えた。どうやって話を切り出そうか、最初に何を言えばいいのか、邸につく短時間はその事を考えていた。

カナメはカナメで、先ほど言われた事を引きずっていた。卓巳との関係についてだ。明海に言われた事はあながち間違つてはいないのかもしれない。そう思うと、自分の中にある荒んだ心がどうにも嫌になり、カナメは卓巳の表情をまともに見る事ができなかつた。そして何より、自分の事なのに、今の気持ちが分からなかつた。はつきりしなかつた。それがもどかしく、切ない気持になる。今まで一度も恋愛をした事のないカナメにとって、今の気持ちが何からくるものか分からるのは当たり前である。

取り敢えずは、卓巳さんとお嬢様の仲を以前に戻そうとカナメは結論を出したのだった。

## 28パシリ 自分の思い

卓巳とカナメは一人並んで、愛華の部屋の前に立っている。

もちろんだが、愛華は卓巳が来ている事を知らないし、カナメが外出していた事も知らなかつた。部屋から見える外の風景をずっと見ていたからだ。

「カナメさん。今回は俺一人でもいいですか？」

車内で考えた結果がそれだつた。カナメは特に何も言わずに、そつとその場を後にした。残された卓巳は深呼吸を一つし、決意を決めてから軽くノックをする。

直後に部屋の中から「どうぞ」と愛華の声が響く。  
ゆっくりとドアを開け、ドアの向こうにいる愛華を卓巳は見据える。

愛華は豪華な椅子に座り、外を眺めていた。そのため卓巳の存在にまだ気づかないでいる。卓巳が部屋に一步足を踏み入れ、その場で立つていると、ゆっくりと愛華の視線が外からドアの方に移つた。ありえない物を見たかのように、愛華の表情は驚き一色だつたが、すぐにその表情が消える。その代わりにどこか嬉しいような、怒つたような、それでいていじけているような不思議な表情を一瞬だけした。

それもまた一瞬。すぐに視線を外に移したのだった。あたかも卓巳に表情を見られまいとする乙女のように。

「……どうしてここに？」

「色々な人に背中を押してもらつたから」

色々な人。カナメに明海に梨乃の事だ。あくまで名前は出さない。

「そう」

そこで会話が終了してしまつた。

「のままでは何の解決にもならないと、卓巳は一步、また一步と歩き出す。向かった先は未だに豪華な部屋に不釣り合いな小汚い椅

子だった。その椅子に腰を下ろす。

「カナメさんから聞いた。部屋に引きこもつているらしいな」

「……またカナメですか」

嘆息に似たため息を一つ愛華はする。

彼女にとつてカナメとは実に大きな障害物になつていて。卓巳はカナメに恋心を抱き、自分が入る隙間がないのだと勘違いしているため、卓巳の口からカナメの名前が出される度に胸に突き刺さるのだった。そうとは知らず、卓巳は何気なく話題を振つたのだが、それが失敗する。その事に卓巳は全く気づかないでいた。

その返事の答えを探すように、卓巳は外を眺めている愛華の横顔を凝視する。当たり前だが、その横顔には答えなどない。あるのはカナメと少し似ている無表情の横顔だけだった。

「あのさ、カナメさんが心配しているぞ」

「そう。それは嬉しいわ」

「嬉しいって……。もう少しカナメさんの気持ちを考えてやれよ」

「つるさー」

ボソッと呟くその声は、これ以上何も聞きたくない訴えだつた。

「あのなー」

「つるさーって言つてているの！ サっきからカナメ、カナメつて！ 卓巳は私の気持ちを考えた事ある！？ 適当な事言わないで！ それに卓巳はカナメの何なのよ！」

我慢の限界がきたのか、乱暴に椅子から立ち上がり愛華は大声を出して卓巳を責める。

そんな愛華に圧倒されて卓巳は数秒フリーーズする。

「……何つて言われても」

「二人は付き合つているの！？ そなうならそつて言えばいいじゃない！」

「いや、俺たちは付き合つてない。カナメさんもだと思つけど、別にお互い異性として見てないと思つ」

「それじゃあ何よ！？」

「……俺の中で力ナメさんは優しい姉さんみたいな感じ。ここにくるまで俺は、何をするにしても冷めていたと思う。家庭環境が悪いって事もあって、どことなく人より愛情つていうのかな……。それが現実になかったのかもしね。だから俺はその全てを持つている力ナメさんに甘えている。これからもそのつもり」

「意味が分からぬ！」

そして乱暴に椅子に座ったかと思うと、再び視線を外に移した。部屋から出て行かないのは、とっさに椅子に座つたため、出るに出来ない状況になったからだ。

「なあ、お嬢。一つ頼みがある。聞いてくれないか?」

「力ナメと一緒に居たいって?」

「いや、それもあるけど……」

「それじゃあ、何?」

「あんな、俺はお嬢とも一緒に居たい。……いや、お嬢と一緒に居たい」

はつきりと言い放つ。

日本語とは實に不思議な言語で、一見同じような意味に思える言葉でも、一文字違うだけで全く違う意味になる。この場合もそうだ。「とも」と「と」これが違うだけで意味が変わつてくる。簡単にいふならば、「とも」なら複数で、「と」なら単数となる。

あくまで卓巳の思いは愛華にあり、力ナメではない。卓巳は力ナメの事も大好きであるが、それは恋愛感情とは違う好きだからだ。

その言葉は不意打ちだった。愛華は驚き、卓巳の顔に視線を移した。

「どういふこと?」

「だから俺はお嬢と一緒に居たい。お嬢の側に居たい」「からかっているの?」

「いや、これが俺の本音。だつて、お嬢の事が好きだから……」

その言葉を口にする抵抗は、今の卓巳に持ち合わせていかなかった。はつきりと言い、そして驚き一色の愛華の目を見据える。

その日はとても真剣で、冗談といった類は全く感じられない。愛華もその事に気がつき、一瞬で耳まで真っ赤になる。

愛華にとつて卓巳の告白は人生で初めての物だった。テレビドラマでそういう場面は今まで何度も見てきたが、まさか自分がその場面に立ち会うとは思いもせず、頭の中が真っ白になり上手く言葉を発する事ができなかつた。

とても簡単な一言。それでも、とても難しい一言。その矛盾する言葉が今の卓巳と愛華の関係を修復する一番大切な言葉だった。どちらかが自分の思いを相手に伝えれば、それだけで済む簡単な問題でもあり、自分の思いを言いだせない一人にとつては難しい問題。

ただ一つ言える事は、この魔法の言葉によつて二人はハッピーハンドを迎える事だけだつた。

それでも二人の関係は特に進展はしなかつた。それでも以前の関係には戻れた。もしかしたらそれが一番の進展なのかもしれない。あくまで雇い側と雇われる側の関係が。

## 29パシリ 平日の放課後

お嬢様との問題が解決してから数日後。

卓巳の気持ちが天気に反映されたかのように、雲ひとつない青い空が広がっていた。

平日の放課後。明海は友だちの梨乃と一緒に下校していた。二人とも部活には入部しておらず、他愛もない話をしながら歩いている。

「それでね、今日は欲しい本の発売日なの。だから本屋によらない？」

少し前、といつてもそれほど長い月日が経った訳ではない。梨乃がメールで明海を呼び出し、卓巳と一人きりにした翌日。卓巳との出来事を聞こうとしたが、明海が落ち込んでいるようだつたので、何も聞けるはずがなかつた。その日から話題に卓巳を出さないようにな、梨乃は心がけている。そして明海がどうして落ち込んでいたのかは、卓巳の背中を押した事によって、よりが戻らない可能性の方が高くなつたためだ。

「別にいいけど、試験近いよ？」

「そもそもそうだけど、やっぱり続きが気になるじゃない？ そのまままだつたら勉強にも集中できないって」

「……そもそもうだね。あれ？ 校門の方が騒がしいけど、何かあつたのかな？」

明海の視線の先、校門では下校途中の生徒で人だかりができるいた。

「ん？ 本当だ。ちょっと見に行こう！」

野次馬精神にのつとり、梨乃は駆け足で校門に向かう。その後を

「もう」と、呆れたように咳きながらも明海も後を追う。

あまり人だかりのない左右から、何事かと明海と梨乃は視線を送

る。

そこには三人の男性がいた。一人は明海のよく知っている人で、その後ろに黒服の大男が一人立っている。さらに後ろには、いかにも高級と言わんばかりの外車が一台停まっている。

「お迎えにあがりました。明海お嬢様」

明海の顔を見るや否や、綺麗な一例をし、明海のよく知っている人　卓巳が言う。

一瞬辺りがざわめく。それもそのはずである。少し前までは一緒にクラスで勉学に励んでいた人が、突然学校に現れたかと思つたら、黒服二人を引き連れてやつてきたのだから。

「ちょ、ちょつと！」

明海は大声をあげて、突然の出来事に不満を言おうとする。

「西沢様。そろそろお時間の方が」

「ん。俺は病院に行くから、お嬢のところに案内してやつてくれ」「分かりました」

「ちょっと！　私の話を聞いてください！」

「ん？　あつ……。それでは明海お嬢様。こちらに」

黒服の一人が車のドアを開ける。

「どうして私が車に乗らないといけないの！？」

「愛華お嬢様からお話があります。どうか話し相手になつていただけないでしようか？」

「……わかった。梨乃ごめんね。また今度付き合うから」

数秒だけ考えると、そう結論を出した。愛華とは一度も面識はないものの、それでも明海には思う事がある。特に今後の卓巳と愛華の関係についてだ。この機会を逃すと今後こういった機会がないと考えが至つたのだ。

もう一度だけ梨乃に簡単な謝罪をしてから明海は車内に乗り込む。

「おっ、何どうした？　コスプレ？」

そんな中、さつそつとはいかないが、軽いノリで卓巳の友だちである高松良助が現れた。そして卓巳を見ると盛大に笑いだす。

「お前な……」

卓巳は友人の軽さに呆れる。

「西沢様。お時間の方が」

「西沢様だつて！？ うわっ、超にあわね。……もう無理、笑いすぎて腹が痛い」

その軽薄な態度が気に入らなかつたのか、それとも上司を侮辱された事に対する怒りなのか、黒服は良助の前に立つ。

一瞬にして辺りが緊迫する。

「あー、別にそいつの事はほつといていいので」

「ですが」

「上官の命令は絶対だつたよな？」

「……分かりました。お嬢様がお待ちしておりますので、私達は一足先に行かせていただきます」

「ん。後は頼みました」

やれやれと言わんばかりに、卓巳は少し表情が蒼い良助に向き直る。

「あのなー。もう少し周りと相手を見よつよ」

「えつ、これつてネタとかじやなくて……」

「当たり前だろ。ネタで高級車ひっぱるかつて」

「西沢様！ もうお時間がありませんので、早くお乗りください！」

黒服だけではなく、運転手からも声がかかり、卓巳は少しバツが悪そうな表情をする。

「分かつた。すぐ行く。……まつ、そういう訳だ。またな良助」

「ちょっと待ちなさい！ 明海をどこに連れて行つたわけ！？」

もう一台の車に乗り込もうとした卓巳にストップの声がかかる。相手は言つまでもなく梨乃だつた。

梨乃の表情は焦つていた。それもそのはずである。大切な友人が黒服に連れて行かれ、しかも車が車である。きっとそつちの道の人連れて行かれたと思っているのかもしない。

「あー、心配しなくても大丈夫だと思う

「ふざけないでよ！ それに西沢くんは大男に命令をしたり、高級

車で学校にきたり、いつたい今何をやっているの！？」

「何って……。ねえ、運転手さん？ 僕の立場って何？」

「大変説明しがたいですね。一般の会社の役職だと……、副社長といつたところではないのですか？」

「らしいです。今は副社長をやっています」

言うまでもないが、ボスは愛華である。そしてその下、愛華の元で働いている方々をランギング順にすると、卓巳が一番上になる事になる。そうなれば、ボスの次である卓巳がその役職につく事になる。愛華が会長なら、卓巳は社長となる。まあ、そこら辺はあくまで例である。

「訳の分からない事を言わないで！ 証拠を見せなさい、証拠を！」

「なら一緒に来るか？ それが一番手っ取り早いし。それに早く病院に行かないと、面会時間が終わってしまう。今説明する時間もない」

「……分かった。私も一緒に行く」

ざわめく生徒達を気にせず、一人は車に乗り込んだ。

ゆっくりと車は発進し、目的地である病院に向かつて走り出す。

車の中では特に会話がなく、一人して流れる景色を見ていた。

目的の病院についた頃には、すっかり辺りが暗くなっていた。

そろそろ面会時間が終わる時間が迫り、卓巳は急いで亜里沙の病室に向かう。その後ろを梨乃は追いかけていた。別に車の中で待つてもよかつたのだが、運転手と二人きりは気まずいと、卓巳について行く事を選んだのだつた。

素早くエレベーターに乗り込み、走るわけではないがそれでも早歩きで亜里沙の病室に行く。今日は平日であり、いつもお見舞いに行く日曜日ではないため、卓巳の脳裏には驚く亜里沙の顔が浮かんでいた。そのせいか、ついつい頬が緩んでいた。

病室の前にある殺菌用のジエルを手になじませ、軽くノックをしてからドアをスライドさせる。亜里沙の場所はカーテンがかかつて見られなかつたものの、何か面白い物でも見てゐるのか、クスクスと笑い声が漏れていた。

そつとカーテンを開き、卓巳は何食わぬ顔で近くの椅子に腰を下ろす。

「どうも、こんばんは」

ちなみに梨乃は氣を利かせたのか、それとも氣まずいのが嫌なのか、病室の前にある壁によしかかつて卓巳を待つていた。

そして亜里沙はといえ、漫畫本を片手に驚きを隠せないようだつた。今にも「わー！ わー！」と叫びそうである。それを我慢し、深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。そんな亜里沙の姿をニヤニヤと、卓巳は面白そうに見ていた。

「……もう。ビックリしたじゃない。それで、今日はどうしたの？」

「用がないと見舞いにきちゃまずいか？」

「それは嬉しいけど……。何か裏があるようだ

「もしかして俺って信用なかつたりする？」

「うん！ ……うそそうそ！ 「冗談だつて冗談」

「あのなー、……まあいいや。それより調子どうだ？」

「調子いいつてお医者さんが言つていたよ。それでね、今度外出してもいいつて言つていたから、ちょっと遊びに行こうと思うの」

「そうか。それなら俺からデートのお誘いをしてみようとしているか？ 東郷お嬢様」

「えつ？ ちょっと待つて……。心の準備が」

「冗談だ」

「冗談？ ……もつ、バカバカ！」

「ははっ。『めん、』『めん。』さてと、俺はそろそろ帰るよ。もう『飯の時間だろ？』

「あつ、本当だ。またいつでも遊びにきてね」

「ああ、またな」

来客者用のパイプ椅子を元の場所に戻し、最後に「また来るな」と軽く告げて、卓巳はその場を後にする。

病室の前で壁によしかかっている梨乃は、ボーッと向かいにある変わった要素のない壁を見つめていた。

「かなり早かつたわね」

「面会終了の時間。それより一緒にくればよかつたのに」「だつて恥ずかしいじゃない。こう見えても私って人見知り激しいの」

「そう。それは失礼しました」

そう他愛もない話をしながら、一人並んで車の方に歩き出した。

### 30パシリ レティと呼ばせて

お見舞いが終わり、卓巳と梨乃是特別急ぐ必要もないため、ゆっくりと邸の中を歩いていた。梨乃是無駄に広い邸や、本物のメイドを見て驚き続けた。今も興味津々といった感じに、邸をキヨロキヨロと見ながら歩いている。さながらその姿は、田舎から都会に初めて足を運んだ少年少女のようだった。

メイドが卓巳に向かつて必ず一礼する光景を見て、卓巳の言つていた事を思い出し実感する。そんな自分と同じ年の少年の横顔を梨乃是盗み見る。

その何も考えていなさそうに前を見て歩いている横顔からは、何も得る事がなかつた。実際のところ、特に卓巳は何かを思つている訳ではない。この生活にも慣れたため、驚きや戸惑いといった感情はどこかに置き忘れたようである。

「家中を土足つて落ち着かないわね」

「そうか？ 少女Aの家は土足じゃないのか？」

一般家庭の常識までもどこかに置き忘れたようである。

「あのね、ここは日本なのよ。普通の家で土足つて方がおかしいでしょ」

「そう言えばそうだつたな。お嬢のところに行く前に、ちょっと寄り道してもいいか？」

「私は明海のところに早く行きたい」

「お嬢の話は長いから、まだ時間かかると思うぞ？」

「……どこに連れてくつもり？」

「ん~、メイドさんのところに行くつもり」  
行先はカナメのところだつた。

梨乃是早く明海のところに行きたがつているようだが、愛華は大切な話があると明海を呼び出した。そのため部屋に入れてはくれないだろう。そうなればどこかで時間を潰す必要があり、この邸を隅

今まで知っている訳でもない卓巳にとってはカナメの部屋しか居場所はなかつた。

一人が歩いている場所からカナメの部屋までは遠くはなく、すぐにカナメの部屋についた。

一度ノックをすると「はい」と、落ち着いた声と共に部屋が開く。カナメの表情は特に驚く事はなく、いつもと同じ無表情でその場に立っている。それからすぐに部屋に招き入れるように一歩横にずれる。

その横を卓巳は「おじゃましまーす」と軽く言つてから通り過ぎる。梨乃も唯一の知り合いから離れる訳にはいないと、少しためらいながらも「お邪魔します」と言つて部屋に入った。

それほど広くない部屋とは不釣り合ひなダブルベッドに卓巳、一つだけ置かれた椅子に梨乃が座る。そしてカナメはお茶菓子の用意をしていた。

「ねえ、他人のベッドって少し失礼じやない？」

「ん？ そうか？」

「そうよ。だから西沢くんは立つていなさい」

「さらつと酷い事いうな。それに俺はここが特等席だから問題ない」勝手に特等席にされてもカナメは文句を言わず、三つのティーカップとクッキーを持つて椅子とセットの机に置く。そして無表情で卓巳の隣に腰を下ろした。

「本日は紅茶とクッキーにしてみました。お口に合つか分かりませんが、召し上がってください」

「い、いただきます。……お、美味しい」

「喜んでいただけたのなら幸いです」

「ねえ、カナメさん。お嬢達の話が終わるまでここに居てもいいですか？」

「はい。何もない部屋ですが、ゆっくりしていって下さい」

「ありがとうございます」

ベッドから少し離れた机に手を伸ばし、一つのティーカップを手に取ると一つをカナメに渡し、もう一つのティーカップに口をつけ飲み始める。梨乃の言った通り紅茶が美味しい、卓巳の頬は自然に緩む。

「ところでさ、どうしてお嬢は狩野を呼び出したんだ？」

「は？ あんた分かんないの？」

「そのつもりだけど、何かおかしいか？」

「当たり前よ！ 一人はあんたの事で話しかけているのよ」

「どうしてだ？」

「どうしてって……。一人とも西沢くんの事が好きだからじゃないの。私は詳しく分からぬけど、それ以外思いつかないわ」

「……なるほど。理解できました」

大きなため息を梨乃はつく。

「ところでさ、西沢くんはお嬢様と付き合っているわけ？」

「それは」

卓巳が答えようとしたところで、カナメの部屋に置かれた電話が鳴る。そこでいつたん会話は途絶える。

そこで会話が中断し、カナメがゆっくりと受話器を手にとつて耳に当てる。「……かしこまりました」相手の愛華は用件を簡潔に伝えられ、すぐに受話器を元の場所にカナメは戻す。

「お話を終わったようです。家までお送りいたしますので、一ちらに」

「あっ、はい。紅茶とクッキーもさまでした」

まだティーを残っている紅茶を一気に飲み干し、梨乃は慌てて椅子から立ち上がる。

カナメは来客者一人を車まで案内し、再び卓巳と一緒に部屋に戻ってきた。時間も時間なため、もう愛華からの命令がないと思っての行為だった。

今日も一日疲れたと咳き、卓巳は勝手にカナメのベッドに寝転が

る。その身勝手な行為を田の前にしても、カナメは表情一つ変える事はなかつた。

「……今日はもう疲れました。」そのまま寝ちゃつてもいいですか？」

「よろしくですが、私は寝相が悪いですよ」

「……ちょっと想像つきませんね」

「よく言われます。卓巳さん、少し邸の中を歩きながらお話ししませんか？」

「俺はもう立ち上がりません。おんぶしてください」

どこまでも失禮でカナメに甘える卓巳であった。ちなみに相手がカナメだからこそ言え、相手が愛華や明海だとこうはないかない。こんな姿も見せないだろ？

「……それではこの部屋でお話をしましちゃう。卓巳さんはお嬢様の事が好きですか？」

「大好きですよ」

「狩野明海様は？」

「好きですよ」

「東郷亜里沙様は？」

「好きですよ」

「本庄梨乃様は？」

「……よくわからないので、普通です」

「では私は？」

「大好きです。ちなみに聞きますが、どうしてそんな事を聞くのですか？」

「特に深い意味はありません。お気になさらないで下さい」

ちらりとカナメの表情を見ても普段通りで、何を考えているか分からず卓巳は少しだけ首をかしげる。といつても、ベッドに寝そべつているため自分以外は分からぬほどさせやがった。

「結局のところ、どうしてお嬢は見知らぬ俺を執事にしようと思つたのでしょうか？」

「私にも分かりません。お嬢様に直接聞いてみてはどうでしょうか？」

？」

「はぐらかされました」

「そうですか。……突然ですが、一言いいですか？」

「どうぞ、どうぞ」

「私に恋愛を教えていただけないでしょうか？」

本当に突然だった。

卓巳は目を丸くしてカナメを凝視した。

「と、いいますと？」

「私とお付き合いをしましょう。そうすれば恋愛がどうこうしたもののが分かるような気がします」

「なるほど。……えらく唐突ですね」

そしてクスッと卓巳は笑う。

「ええ、唐突でした」

カナメも珍しく笑みを見せた。

「やつぱりカナメさんは笑顔が似合いますね。とっても可愛いです」「私は笑顔なんて見せていません。それで返事はどうなのでしょうか？」

「そうですね」

卓巳が返事を言い終える前に、部屋の電話が鳴る。愛華が「立腹だと悟った一人は「お嬢が呼んでいますね」「お嬢様がお呼びなつておりますね」と、似たような事をそろえて言つた。

突然執事になつたぶっきらぼうの卓巳。

嫉妬深く意地つ張りな愛華。

無表情のカナメ。

どこにでもある平凡な生活とは言い難いが、それでも少し平凡で少し変わった三人の非日常的なお話。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4080c/>

---

レディと呼ばせて

2010年10月8日13時37分発行